

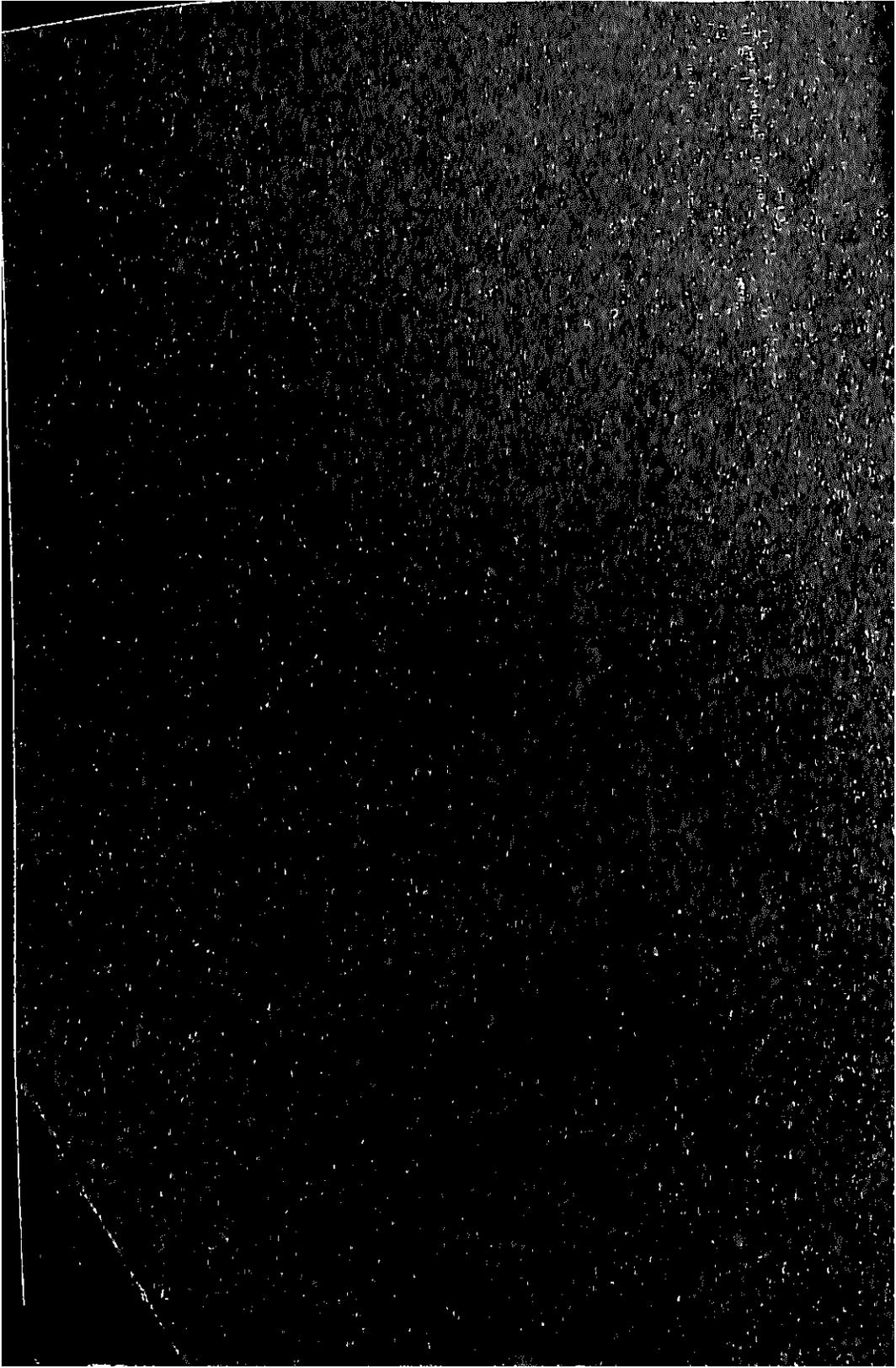
昭和50年度

都倫研紀要

——教材内容の平易化——

第14集

東京都立高等学校「倫理」研究会 研究会



は し が き

東京都高等学校「倫理・社会」研究会

会 長 中 村 義 之

今年の正月、戸山高校の卒業生から何通かの賀状をもらった。その中に次のようなものがあった。少し長くなるが、そのまま、まず引用させてもらうことにする。「小生、昭和27年戸山高校入学、先生に『ソクラテスの弁明』を習いました。夏休みの後試験があり、『悪法もまた法である』について賛否いかん。またその理由いかん、を問われました。その時私は悪法は認められない、と答え、これには自信がありました。その理由(根拠)については、自分でもわけのわからないことを書き、それが心にかかっておりました。その後東京医科歯科大医学部を卒業、大学院を経て2、3の大病院に勤めましたが、ようやく数年前35歳過ぎになって、あの時の試験の解答ができました。これは満点をとれる自信があります。悪法は法と認めない。理由、ソクラテスは自分自身が悪法の犠牲になったのであるが、もし他人がその立場に置かれていたら、果して悪法もまた法なりというであろうか。自己一身の犠牲ですまない時、多くの人々が犠牲になる時そういうだろうか。小生は大森の大田病院という小さな病院に勤務しています。今は答えが(人生の答えも)出て、すっきりした気分です。」

悪法もまた法であるかどうかは、実定法の立場をとるか、自然法の立場をとるかによって結論が違ってくる。実定法の立場をとるにしても内容的に悪い法は悪法なのであるから、それを無効にする制度が具体的に考えられなければならない。自然法の立場をとり、悪法は法にあらざると主張するにしても、各人に、任意に法を悪法と認定して、それへの服従をこばむ権利を与えれば、救いがたい混乱が生ずるであろう。そこで、実際問題としては、だれが、いかなる条件のもとで、悪法として認定するかという現実の制度の方が問題となる。ソクラテスの場合を「クリトン」の中で、ある

程度この辺のことにふれ、国家こそ悪いのだといって勝手に国法に従わない人がいること、国法を改めさせるには改めさせ方があることに言及している。それらを十分に検討し、さらに、不正を行なっても自覚のない市民に不正を自覚させ、ポリスを本来の正しい姿にもどそうとする、国民的使命のために、死を恐れず、国法にあえて従うのである。この辺の事情を考え合わせてゆかないと、満点の解答はかけない。

しかし、上の卒業生は、専門は医学でありながら、人生の問題として、こちらが、とっくの昔に忘れ去っていた問題を真剣に受けとめ、その後10年以上も考え続けて、体験と思索を通して、それなりに実感としての結論を出し、人生の指針もえてくれたことを、うれしく思うのである。

さて、以上のことから私のいいたいことは、次のことである。

- ① 教育、特に倫社教育では、人間にとって重要な問題をいくつか投げ与える。その結論や効果はすぐ出るとは限らないが、蒔いた種はいつか実を結ぶ。蒔く時期は、一般的にはやはり高校生以上であろう。
- ② 私は25年から「クリトン」と「弁明」を15年近く教えてみたが最初5年ほどは、自分も一生けん命研究しながら教えた故か、影響は大きかった。それ以後は調査してみた結果でもそれ程でもなかった。教師がたえず研究し、自分自身を深めていないと教育効果は上らない。
- ③ 角川文庫の「クリトン」や「弁明」は口語訳であるが、それですら今の生徒は論理を追ってゆけないという。昔の生徒と雲泥の差である。教育は、生徒に応じて教える。つまり教え方を考えなくてはならない。都倫研では、本年度の研究主題を「教材内容の平明化」とし、4分科会をもうけるとともに、教育課程の改善に即して特別分科会をもうけ、研究を進めてきたが、その研究成果をまとめて、今回紀要14号を刊行できた。これひとえに、各会員の精進の結果と感謝するとともに、研究の推進役をつとめられた先生方には、特に御礼申し上げる次第である。

目 次

は し が き	会 長 中 村 義 之	1
研究分科会参加者名簿		6
I 研究主題と研究体制および紀要の編集方針		7
II 研究会の全般的活動の概要		9
将来の「倫理・社会」を検討する特別分科会研究経過報告		11
Ⅲ 研 究 報 告		
第1分科会 現代と人間		
研究経過報告		17
ペンサムからウェーブへ — 福祉国家論批判	大木 洋	18
図説戦後世論史 (NHK放送世論調査所編)	菊地 堯	22
「緑色革命」 — 現代と青年, そのライフスタイルについて		
	山下順吉	26
「青春」の生き方 — 先人から学ぶ	小川輝之	30
自我のめざめ — ヘッセ「デミアン」から	小川一郎	34
青年と人間形成 — 工業高校生としていかに生きたらよいか		
	関根荒正	38
現代社会における人間の問題 — ピカソ, M・ブーバーにみる		
	杉原 安	42
第2分科会 思想の源流		
研究経過報告		46

「ソクラテス」についての座談会	50
「ソクラテス」学習指導についてのアンケート	59
「ソクラテスの弁明」の学習方法について	細谷 斉 79
ソクラテスにおける死	海野省治 82
意味の覚醒 その喜び — イキイキした比喩・具体例による 授業展開	葦名次夫 87
人間尊重の精神をさぐる — 罪責と煩惱を通して	中村新吉 93
仏教と「いろは歌」とのかかわり	浅香育弘 99
老子の思想	木村正雄 103
荘子の思想	永上肆朗 107
「老子」の逆説的情熱を	田辺寅太郎 110

第3分科会 現代と思想

研究経過報告	113
現代思想の授業と高校生 — 「自由と必然」	五味 誠 115
「事実」と「ことば」	小河信国 120
主に単純化を通しての「平明」化	津田信一郎 125
アダム・スミスの市民社会論について — その平易な扱い方	渡辺 勉 129
思想と人間変革	市川仏乗 133
「個人と国家」について考える	坂本清治 137

第4分科会 日本の思想

研究経過報告	141
空 海	寺島甲祐 142
吉田松陰	吉澤正晶 147

伝統と近代的自我	佐藤哲男	151
明治啓蒙思想の形成について	佐藤 勲	155

東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約	159
事務局より	163
あ と が き	164

研究分科会参加者名簿 (五十音順)

〔第1分科会〕「現代と人間」

- 市川仏乘 (駒大付) ○大木 洋 (王子工) 大沢利夫 (瑞穂農芸)
○小川一郎 (背山) 回小川輝之 (滑瀬) ◎菊地 堯 (国分寺)
○杉原 安 (保谷) ○中村佑二 (三田) ○村松憐二郎 (府中西)
○山下順吉 (小山台)

〔第2分科会〕「思想の源流」

- ◎浅香育弘 (葛飾商) ◎葦名次夫 (市谷商) ○飯岡^善保 (京橋)
○井原茂幸 (鷲宮) ○内田君夫 (攻玉社) 海野省治 (上野)
勝田泰次 (本所) ○木村正雄 (志村) ○河野^こ遼男 (北)
小平 克 (两国) 回佐々木誠明 (鷲宮) 鷲見美雄 (駒場)
関根荒正 (府中工) ○徳久 寛 (白鷺) 回永上肆朗 (府中)
○細谷 斉 (駒場) 回宮崎宏一 (江北) 野吾信男 (赤城台)

〔第3分科会〕「現代と思想」

- 小河信国 (板橋) 尾崎充昭 (葛西南) 五味 誠 (保谷)
○坂本清治 (白鷺) ○渋谷紀雄 (墨田川) 高野啓一郎 (サレジオ)
田辺寅太郎 (深川商) ◎津田信一郎 (羽田) 回中村新吉 (千歳)
○沼田俊一 (戸山) ○渡辺 勉 (南葛飾) 渡辺道子 (目黒)

〔第4分科会〕「日本の思想」

- ◎佐藤 勲 (板町) ◎佐藤哲男 (江戸川) 寺島甲祐 (広尾)
回吉澤正晶 (葛飾野)

○印は分科会世話人

○印は特別分科会参加者

回印は特別分科会世話人

I 研究主題と研究体制および紀要の編集方針

研究部長 吉澤正晶

研究副部長 宮崎宏一 佐藤 勲

〔本年度の研究主題〕

教材内容の平明化——今日の生徒に適合する「倫・社」へ

〔研究主題設定の趣旨〕

「倫・社はむずかしい」という声、「倫・社とは何を学習するのか」という素朴な感想と疑問が時として生徒から出るのを、われわれはどう受けとめ、どう対処するか。今日、東京では義務教育修了者の97%が高校に入学する。現在進行中の教育課程審議会の動向にも、高校教育のミニマム・エッセンシャルズを設定し、生徒の能力、適性、進路に応じた教育を徹底する、ということ、また現在の高校教育は内容の程度が高すぎるものや細かすぎるものが多いとして、教育内容の精選を求める意見も多いことなどがうかがえる。このことはやはり倫・社が直面している問題である。

以上のことから、教材内容の今日的な精選が急務であると痛感される。それは教材内容をもっと平易にし、はっきりさせることである。そのためには、一方では内容の程度が高すぎると思われるものは割愛することも考え、また他方、むずかしいことをやさしく説く用意が必要である。それには、教師のより深い内容研究が要請される。そしてその成果をどのように生徒に適合させるかという指導技術の研究と実践が必要となる。内容研究と指導技術の研究および実践は車の両輪のように、どちらを欠いても教育的成果はあがらない。ここ数年来はどちらかといえば、教え方に関する技術的な問題が多く取り上げられてきた。この辺で、文献・資料の研究を協同して深め、教材内容の検討と吟味に向かうべき新たな段階に到ったと考

えられる。以上のような趣旨で、本研究主題を設定した。

〔研究体制〕

第1分科会 現代と人間 第2分科会 思想の源流

第3分科会 現代と思想 第4分科会 日本の思想

特別分科会 将来の「倫・社」 — その位置づけ、基本的性格と内容構成を検討する。

〔紀要の執筆要項〕

〈各分科会の研究経過報告〉各分科会世話人において執筆されるところであるが、単なる形式的な実施記録にとどまらず、文献の読み合せ、研究交換、討論などの重要部分については、そのままその発表内容が筆録報告されるとよい。

〈個人分担研究報告〉

テーマ（先哲の名、または主要事項）

1. このテーマをとりあげる理由またはこのテーマの学習のねらい(0.5P.P)
2. 小項目をいくつか立てて、それについてできるだけ平易な文献資料の抜萃を示す。紙幅のつごうで全文を引用できないときは、〇〇本〇ページ〇行目より〇行目まで、と出典を示す。

つきにそれについて平易な解釈（高校生対象）をつける。

または、

生徒に難解な事項をいくつかとりあげ、譬喩・例話などをくふうしたわかりやすい説明（教室で実際に生徒に説明することばで）を考案する。

(3P.P.)

3. まとめ 失敗とくふう、指導上の留意点などをもってまとめとする。

(0.5P.P.)

Ⅱ 研究会の全般的活動の概要

〔第1回〕 6月5日(木) 総会・研究発表大会 東京都教育会館

1) 総会

挨拶	前会長 徳久鉄郎氏
	新会長 中村巖之氏
会務・決算の報告および承認	都立白鷗高 坂本清治氏
事業計画・予算・新役員の選出	同
研究事業計画・研究主題の提案承認	都立葛飾野高 吉澤正晶氏

2) 研究発表

「昭和49年度研究の総括」	都立国分寺高 菊地 堯氏
「新教科書分析—その課題と方向」	都立保谷高 杉原 安氏

3) 講演

「比較思想について」	筑波大教授 三枝充恵氏
------------	-------------

〔第2回〕 6月28日(金) 第1回例会 都立墨田川高

1) 公開授業

「青年期の問題について」	都立墨田川高 渋谷紀雄氏
--------------	--------------

2) 研究発表

「源流思想の平明化—イエスの教えの ミニマムなもの」	都立志村高 木村正雄氏
-------------------------------	-------------

3) 講演

「法と権利」	一橋大助教授 上原行雄氏
--------	--------------

4) 分科会

分科会の結成・世話人選出・分科会年間研究計画の協議決定

〔第3回〕 10月4日(土) 第2回例会 都立市ヶ谷商

1) 講演

「日本の思想の固有な展開」	教育大教授 渡部正一氏
---------------	-------------

2) 研究発表

「日本の思想の取り扱いについて」 都立江戸川高 佐藤哲男氏

3) 公開授業 (定時制)

「イエス・キリストの教え」 都立市ヶ谷商 葦名次夫氏

4) 特別分科会「倫・社」はどうあるべきか” の協議, 会の進め方等

〔第4回〕11月29日(土)・30日(日) { 全倫研関東大会と共催

1) 公開授業 (国鉄スト・休校のため中止) { 第3回例会学芸大付属高

「パスカル」 学芸大付属高 秋元正明氏

2) 研究発表・協議

「わたくしの倫・社授業のあゆみ」 都立駒場高 細谷 斉氏

「わたくしの生徒観」 都立桜町高 佐藤 歎氏

3) 記念講演

「近代と現代」 元法政大学総長 谷川徹三氏

〔第5回〕1月29日(木) 第4回例会 拡大特別分科会 白鷗高
研究協議会

(1) 「倫・社」を中心とした広領域科目を考えた場合の内容構成

(2) 従来の「倫・社」を改善する方向での内容構成

〔第6回〕2月5日(木) 第5回例会 都立葛飾商業

1) 公開授業

「『倫・社』で学んだこと — 一年間のまとめ」(3年生で履習)

都立葛飾商業 浅香育弘氏

2) 研究発表

「一年をふりかえって, その成果と反省点」

攻玉社高 内田君夫氏

3) 講演

「ヨーロッパの人間の原型 — ファストを中心に」

中央大教授 小塩 節氏

将来の「倫理・社会」を検討する特別分科会 —— 研究経過報告 ——

第1回 (5 0.1 0.4) ……………於市ヶ谷商業高等学校 21名

来るべき教育課程の改定に際し、「倫・社」を担当するものとして、これまでの「倫・社」の実績と反省をふまえながら、問題点の把握と改善の方策をさぐり、「倫・社」の基本的性格と内容構成を検討していくとともに高等学校教育における「社会科」並びに「倫・社」の位置づけをも検討していくために、この特別分科会が発足した。またこの日、特別分科会の世話人を決定。佐々木誠明（鷺宮高）、永上肆朗（府中高）、中村新吉（千歳高）、吉沢正晶（葛飾野高）、小川輝之（清瀬高）、宮崎宏一（江北高）以上六氏である。確認事項として「ともかく「倫・社」は今のままでよいか？」という原点にかえて研究協議を始めたらよいのではないかとの合意を得て次回へ。

第2回 (5 0.1 1.1 1) ……………於駒場高等学校 15名

特別分科会資料として(1)新学習指導要領・高等学校社会科「倫理・社会」(2)明治図書「社会科教育」(9月号)指導要領改定への教育研究団体の意見 — 社会科教育全国協議会東山每美氏の抜粋。(3)教育課程審議会「中間まとめ」の抜粋 (4)その他沼田俊一氏（戸山高）のレジメを中心に研究協議。

特に中村義之会長の話された「中間まとめ」に関する文章表現、内容などの微妙な関係（他教科との）に出席者はまず注目。「総合社会」とか「基礎社会」などという言葉がとび出す。次にその問題点の「中間まとめ」の一部を抜粋してみると

「高等学校においては、社会と人間に関する基本的な問題についての理解を一層深めるため、現行の「倫理・社会」及び「政治・経済の内

容を中心として、中学校の社会科の内容や他の科目との関連を考慮しながら、新しい広領域的な科目を設け、全員に履修させる方向で検討する。更にこの科目を履修した後、生徒の興味や関心に応じて多様な選択履修ができるように、例えば「日本史」「世界史」「地理」等を選択科目として設けることとし、その内容構成については、中学校の関係分野の内容や科目相互の関連等に配慮して具体的に検討する。なお社会科における科目の編成や内容の検討に当たっては、道德教育との関連に十分留意する必要がある。(教育課程審議会「中間まとめ」)

以上の文面からも様々な方向が秘められているようである。とにかくこれまで積み上げてきた「都倫研」「全倫研」のレベルで、われわれの現場の声を、実践・体験を通した生の声をこの分科会で出し合うことにより、来るべき教育課程の改定の方策をさぐっていかうという雰囲気が高まってきた。次回からはリポーターを置き、研究協議のテーマを(1)「倫・社」で何を教えるか (2)高等学校社会科の中の「倫理・社会」の位置づけ (3)その他とした。

第3回 (5 0.1 2.6) 於 鷺宮高等学校

19名

資料として「文部広報」5 0.1 0.2 3 付『教育課程の基準の改善に関する基本方向』教育課程審議会による「小学校・中学校及び高等学校の教育課程の改善について」次に4名のレポーターの発表主旨をまとめてみると<細谷 斉氏(駒場高)>二冊の本(「子どものものの考え方」「子どもの認識と感情」共に岩波新書、波多野完治著)をとりあげ、小・中学校の教育方法について母かれたものが倫社のみならず、高校生を教育する上で貴重な視点を提示していることを強調された。特に人間のエネルギーの根は「感情」にあるとし、倫・社の教材の中にも、もっとソフトな教材、柔らかいもの、文学、芸術、自然科学、生活体験などを取り入れたものにてきないだろうか……そんな倫・社を目指し、具体的なプランを考えていき

たいとのことである。

〈永上肆朗氏（府中高）〉具体的に昭和50年度の授業計画の現状報告をされたあと「倫・社」という教科目の置かれている位置を図式化し「倫・社構図」を示された。政経との関連、中学の道德との関連、民主主義（人間尊重）の倫理、その他倫・社でふれうる主な箇所（内容）をあげ、特に青年期での課題テーマ「宗教と人生」について説明された。

〈中村新吉氏（千歳高）〉一高校社会科のあり方をさぐる手がかりとして教育課程審議会の中間まとめをどう受けとめるかという姿勢でいくつかの問題点をあげられた。①各教科の中で、社会科のみ倫社・政経の2科目必修をどう堅持しうるか。②新しい広領域科目の設定は望ましいかどうか。③倫社を現行のように必修科目として、独立を維持するとすればどのような学習内容に構成し、必修に値する科目としうるか。④高校における道德教育の核心は社会科または倫社がになわなければならないという主張、また一方で全教育活動の領域で行なわれるべきであるという主張をどう考えるべきかを指摘された。

〈小川輝之氏（清瀬高）〉

全倫研調査に対する反応を分析し、現場の先生方のご意見、ご感想をまとめられた。さまざまな意見があり、いかに「倫・社」の教える側がむずかしいかをあらためて感じさせられた。特に現行の「倫理・社会」の「社会」の内容は政経の分野へ移行してもよいのではないか。またその意味からも〈現代と人間〉のところは必要ないのではないかというつまり心理学・社会学・哲学などの寄せ集めのすぎるといっているのである。

以上4人の先生方のレポートが導火線となり、かなり研究討議も深まりをみて、次のような三つの柱をうち建てることができた。

（その1）新しい広領域的な科目となるならば（1年必修として）倫理・社会の内容構成をどうすればよいか。

(その2) 現行の「倫理・社会」を改善する方向での内容構成をどうするか。

(上記その1, その2にかかる問題として) 現代の高等学校
社会科での「倫理・社会」の役割分担は何か。改善のねらい
はどこにあるのか。

第4回 (5 0.1 2.2 7) ……………於東書上富士分室

22名

資料として、これまでの特別分科会の経過報告のプリント (世話人まとめ) 教育課程審議会委員である中村義之会長より、その後の審議会の動きについて克明な説明があり、続いて2人の先生方のレポート発表があった。その主旨を次にまとめてみると、

<市川仏乘氏 (駒大高)>

文部広報618号の「中間まとめ」を要約され、そのねらっているものは何かを第一面から丁寧に解説を加えられた。改善の基本方向①改善のねらい②教育課程の領域について③各教科、科目等の編成について④授業時数等⑤各教科、科目の内容などにふれたあと、前述の(その1)新しい広領域的な科目としての内容構成私案が発表された。特に前提条件(材料)を④「倫・社」「政・経」の内容を中心 ⑤中学の社会科の内容の部分(公民的分野のかなりの部分) ⑥他の科目との関連 ⑦道徳教育との関連を考へての内容構成をいくつかあげられたが、問題点としてこの科目は10年のまとめなのか、次の展開のための基礎的役割としてなのか実に曖昧であると指摘された。最後に認識のあり方(考へる)について、理解・批判・反省という実存的問いかけをとりあげられた。

<菊地 堯氏 (国分寺高)>

(その2) 現行の倫社を改善する方向での内容構成をどうするかについて、まず現行指導要領、殊に七つのものの「考へ方」を積極的に評価し内容構成(精選)の柱とされた。そのためにも次の点をとくに主張された。
(1)自己自身のあり方、生き方を考へる主体的問題の学習の場として設定さ

れたこと。(2)対象知としてではなく、主体的問題の学習ということの意味は、すぐれた考え方や生き方について、他から学びとる必要があることを否定するものではないこと。(3)都倫研を中心として、以上の原則的目標をめざした実践と研究が着実な成果を積み上げてきたこと。これらの要点は倫社教育のねらいとその歩みの中でふまえたい点であると強調され、要は正しく考え、正しく生き、ゆたかな情操、謙虚な態度で生きる人間、現代社会を正しくとらえ、自己の責任を自覚し、ゆとりのある生き方を求める人間をめざす科目としての特色を失なうことなく、伸ばして行きたいということのをべられた。

その後活発な討議が展開され、ある程度の特別分科会としての方向づけがなされたようにも思われる。

第5回(5.1.12.9)……………於白鷗高等学校

22名

今回は特にReporterを決めず、出席者全員が何らかの形で意見感想を持ち寄るという方法をとったが、幸いにも予期していなかった文部省の斉藤弘氏が、早々とご出席下さり、われわれの特別分科会の研究討議の状況をご覧になりました。はじめに郵送でレジメを送っていただきました川上清美氏(福生高)の「新しい広領域的な科目について(特に倫社について)」を世話人が代読し、簡単に内容構成に触れました。第1編「思想の歴史」(思想史概説を中心)と第2編「現代の社会生活」(道徳・政治・経済・国際関係)に構成された具体的なものであった。

次に前回のリポーター市川仏乘氏(駒大高)が、過日のレジメの一部に補足説明を加え、(その1)新しい広領域的な科目内容についての問題点をいくつかの例をあげ、指摘された。たとえば、材料④+⑤(第4回市川仏乘氏レポート参照)⑤の内容は倫社・政経でカバーできるので、④を中心に構成可能、ただし要件をみたさないで科目として成立不可能であるとし、実際の作業としてはかなりむずかしいということを強調された。

中村義之会長は、倫社だけの立場から考えずに、さまざまな角度から、

他教科の立場からも、この問題を検討してほしいとのご要望があった。

今回の研究協議の中から要点を整理してみると、

- 1) 1年生で広領域的な科目を学ばせるには、理解力の乏しい現代高校生にとっては相当内容的にやさしく、わかりやすくしなければならない。
- 2) 思想史的な面の強調だけでは、かえって内容が高度になりはしないか。
- 3) 倫社には他教科（歴史や政経など）と違い単なる言葉のみの価値を教えるものではなく、常に自分とかがかかわっている直接的なものを重視している。
- 4) 人間を考察する総合的なもの（たとえば精神医学・文化人類学・民族学・日本文化論などのエッセンス）こそ、広領域的内容として適切ではないか。
- 5) もっと日本的な要素、自分自身に気づくこと、自分の価値観の充実等。
- 6) 社会性をもたせるということで、公民としての適応性を学ばせるという面が、広領域的科目としてその中で取り扱われてもよいのではないか。
- 7) 倫社・政経の単なる寄せ集めでは、総合社会の発想から離れてしまう。現行のままの倫社が望ましいと思うが、社会科学の方法論としてみれば、「平和」「基本的人権」「現代の歴史」「日本の歴史」「人間の歴史」などをもとにすることによって新しい内容となるのではないか。
- 8) 現代の問題（社会現象とかかわる人間）、思想の古典（愛・知・意志・感情など）、日本人のものの見方、考え方等の内容構成はどうか。
- 9) 小・中・高の学習の実態を広い視野から客観的にみることが必要であり特に中学校の道徳と倫社の役割というものを考えねばならない。等々

午後八時を過ぎても熱心な討論が続いた。次回は世話人が中心になり、倫社としての「要望書」の原案を作成することになった。都倫研・全倫研のこれまでの実績を無にすることなく、新しい「倫理・社会」の黎明の鐘を静かにきくことができるよう諸先生方と共に歩んでいこうと世話人一同心より念じております。

（宮崎安一記）

Ⅲ 研究報告

第1分科会 現代人と人間

研究経過報告

はりきってスタートした50年度の分科会研究ではあったが、世話人校が多摩地区の交通不便なところであったり、メンバーの勤務校が散在していたりで、なかなか集まることがむずかしい中で、次の活動を行った。

第1回分科会は、9月16日 都立国分寺高校で行った。参加者5名、今後の研究の進め方などについて協議した。「現代と人間」の位置づけは現行指導要領において、「人生観・世界観」の導入となっているが、今後の社会科学習全体の中で「倫理・社会」特に「現代と人間」の分野の意味をどのようにとらえたらよいか。「現代と人間」の分野で、どのような原典等の資料をとりあげ、どのように教材化、平明化したらよいか。これらの点について、各自の実践報告を交えて話し合った。また、今後「倫理・社会」をめぐる状況の展開に関して留意しつつ研究を進めることにした。

第2回分科会は、年を越して1月19日 都立国分寺高校で行った。予定では、もっと度々行はずであったが、世話人の怠慢その他で、集まる機会を作れず、連絡はがきでの情報交換に代えざるを得なかった。この回は、各自の原稿を持ちより、その内容の紹介と質疑、問題点についての討議を行い、参加者は7名。メンバーはそれぞれユニークな発想で、教材をとりあげ、生徒の関心・理解を深めるためのくふうをこらしていることがわかり、互いに啓発されるところが多かった。

学習指導要領の全面改訂案が提示された。「倫理・社会」指導のこれまでの蓄積の中から、担当教師としてどのように発言していくべきか、根本的には「倫理・社会」がめざしたものは何であり、今後これにどう生かされるべきかについて、現場教師に問われている課題はまことに大きい。第1分科会の研究にも、その問題は大きく影を落していた1年であった。本年度の研究を端緒として、次年度以後の発展を期したいと思う。(菊地記)

ペンサムからウェブへ —福祉国家論批判—

都立王子工業高等学校 大木 洋

1. はじめに

福祉国家論が叫ばれてから久しい。現在の日本はすでに福祉国家なのだ
という発想もあれば、高度成長期には見落されていたが、いよいよこれか
ら福祉国家を目指さなければとの主張もある。しかし、石油ショック以来
の長期不況に見舞われた日本は、今のささやかな福祉政策すら後退させよ
うとしている。老人医療有料化の動きがそれだし、その他受益者負担論の
もと、初診料、各種公共料金の値上げ等、国民収奪が急ピッチで進められ
ている。底の浅い日本の福祉国家の実態を露呈したともいえる。

国民の「いのちとくらし」を守るため一層社会保障を充実させ、憲法25
条を名実ともに己のものにしなければならぬ。この方向を福祉国家と呼ぶの
は正しいと思うが、現在、福祉国家はいろんな角度に解釈されている。日
本はすでに福祉国家なのだから現行憲法にみられる19世紀の各種権利擁護
の規定は軽くしても、福祉国家に協力あるいはこれを防衛する規定を加え
るべきだ、などというのはその最たるものだと思う。ともかく、憲法25条
を絵にかいたモチに終らせず、国民のいのちとくらしを守るためにも、い
わゆる福祉国家論を批判し、その限界を克服しより発展させていく必要が
あると思う。

2. フェビアン協会

一般に福祉国家というとイギリスのフェビアン協会の流れを受けつぐ、
英国労働党の政策と結びつけられる。事実、第二次大戦後のアトリ-労働
党政権はベヴァリッジ報告に基づいて次々と福祉政策を実行していった。
その政策の特徴は、いわゆる体制を変える事なく、重要産業国有化とか、
国民扶助法、児童法等の福祉政策を実施し、漸進改良的に資本主義社会の

ひずみを修正していくにある。かかる諸立法、諸政策は、「ゆりかごから墓場まで」といわれる如く、労働者の生活安定には大きく寄与したが、イギリスに於て労働社会問題が全て解決された訳でない。雇用不安、インフレ等70年代に入って資本主義的の矛盾は激化し、労働者階級は一層危機にさらされている。又、より高度な福祉国家といわれる北歐の国々に於ては、自殺、生きがいの問題等人間の精神面での問題が指摘されている。我々が福祉国家を目指すならば、今一度福祉国家思想の理論的基礎を検討し、批判していく事は必要と思う。

英国の労働党の政策に影響を与えたフェビアン協会は、1883年に創設されたが、19世紀後半のこの頃のイギリスは丁度独占資本主義段階に突入り、国内外ともに帝国主義的危機に直面した時代であった。従来のレッセフェール政策は通用しなくなり、何らかの修正を必要としていた。かかる時創設されたフェビアン協会は、以後オピニオン・リーダーとして大きな影響を与えた。この思想的核心は「社会民主主義実現への実践的行動はそれ自体によって実行されねばならないことを目指さないし、また他のどのような特定の団体や政党によって実現されねばならないことをも目指さない」(Fabian Tract vol.70)つまり、このような実践的行動は、全体としての国民がその所有している各種の公共の機関を用いて、実現すべきだという。つまりマルクス主義等の社会主義を排撃し、独自の路線を歩むというものであった。

このフェビアン協会の中心的指導者はシドニー・ウェブであった。ウェブ的社会主義こそ、その与えた影響の大きさから、イギリス的社會主義でもあるといえる。

3. ベンサムとウェブ

ウェブの思想の核心は、「社会に重点をおいた思考」(thinking in communities)であるといえる。自由放任時代の「個人に重点をおいた思考」(thinking in individuals)では帝国主義的危機段階の内外

諸問題を解決する事ができなくなった事を表わしたともいえる。ベンサム
の「最大多数の最大幸福」は、各人が最大幸福を追求する事こそ、社会の
理想郷実現につながるというものであった。つまり、社会は個人という原
始的単位の集合体ととらえる。しかし、ウエブは社会を一つの有機体と考
える。「社会は多数の個人の単位の集計以上のなんらかのものであるとい
うこと…社会の生命はそれを構成する個々人の生命に優越するものである。
個々人のインタレストは全体のインタレストと調和しないことが、しばし
ば生じる」(Webb, The Basis and Policy of Socialism, P.77)
ここには、帝国主義段階のイギリスの危機が反映されているともいえる。しか
し、ウエブが社会の個人への優先という時、このことによって成員の能力
の発揮と自由の実現が可能であると考えたからに他ならなかった。この点で
は、J.S.ミルが社会主義を論じた時、社会主義が成功するか否かは、その
もとにおいて、人間行動の最大限の自由と生産手段の共有・分配の調和に
あるとしたのと相通じているともいえる。ウエブは社会を個人に優先させ
る事により、自由と平等の持続的調和を考えていたのであり、ミルと同じ
く、「階級社会」の「市民社会」への解消を志向したともいえる。

こうみると、ウエブの社会主義論は、イギリスの帝国主義段階における
ベンサムの功利主義の発展であったともいえよう。ベンサムが最大多数の
最大幸福の原理を社会改革への導きの糸とした時、最大幸福を個々人に委
ね、この事によって個人の自由の確保に重点をおいた。これをおし進めれ
ば Cheap Government の発想となる。このような考えが19世紀半ばす
ぎまでのイギリスでは支配的であったし、これこそウエブが否定した「個
人に重点をおく思考」であった。この頃労働者階級の斗いが激化したか、
ウエブは、斗いによる危機打破の方向には否定的であった。逆に「社会に
重点をおく思考」によって市民的自由を確保しようとしたといえる。政党
を排し、「漸進主義」(gradualism)によるウエブ的社会主義がそれだ。
ベンサムが功利主義の利己面=自由を強調したのに対して、ウエブはそ

の利他面=平等を主張することによって、社会の個人への優先を説いた。

ともかくウェブは市民的自由の実現を目指したのであり、そのための現実的制度がイギリスの民主制度であると確信していた。帝国主義的矛盾がふき出し、階級斗争も強まり労働運動も高揚したこの時代に、危機にひんしたイギリス民主制度に楽観的な見通しをもちウェブ的社会主義を構想した理由はどこにあるか。この点では、ウェブがマルクスの存在が意識を規制するという考えを拒否し、意識が制度に優越するという考えに立脚していた点にあるといえる。つまり、歴史の進歩の過程は目的的に歴史を創る思考が先行して、社会主義社会（ウェブ的の）実現への方向が示されるのだという。つまり、社会生活の状態は人間の意志によって変更することができるし、又この事が望ましいのだという。これはイギリス経験主義的思考方法ともいえる。意識の変革を伴わない制度の変革は無意味だといひ民主制度、つまり「知性への信頼」をより所とせよという。

4. まとめ

ウェブ的社会主義は労働者階級の階級意識を市民的自由の意識へ転化してしまおうとするものであった。その他ウェブの経済理論、ナショナル・ミニマム論はベヴァリッジに引き継がれ、ベヴァリッジ報告書となって、英国労働党の政策に大きな影響を与えた。ナショナル・ミニマム論は結果としては独占資本を利し、他方での貧困の蓄積を促進した。「貧困に挑戦した」はずのベヴァリッジ計画は、かえってイギリスの被救民階層を増加した点を考えると、何か欠落している事を感じさせる。資本の論理に対しては、全労働者階級の統一的闘い以外にはないのに、ウェブの視点にはこれが欠けていたといえる。福祉国家論もこの角度から検討してみる必要がある。最後に、ベンサム以来の「最大多数の最大幸福」の原理が今世紀まで、ウェブ的社会主義という形をとってだが、その批判的建設的意義を有したのは興味深い。功利主義学習も、このような角度から学ぶのも一つの方法だと思います。

図説戦後世論史 (NHK放送世論調査所編)

都立国分寺高等学校 菊地 堯

1. とりあげる理由

「現代と人間」の学習は、全体として「人生観・世界観」の導入として位置づけられている。そのねらいを具体化するくふうのひとつとして、統計資料や意識調査結果の活用を考えてみた。標題の冊(日本放送出版協会刊行・NHKボックス)は、戦後30年間の世論の動きを多方面にわたって各種統計の中から収集し、分析したものである。この中には、教材化に適するものが少ないので、そのいくつかを紙面の許す範囲で紹介してみた。教材化にあたっては、単に現代社会の客観的理解をねらうにとどまらず、倫理・社会全体、とりわけ「人生観・世界観」の学習を通して考えさせたい問題の伏線ないしは導火線となり得る問題提起的扱い方をくふうしてみた。ここでは、統計のみを紹介し分析は省略した。

2. とりあげる資料とそのねらい

(1) 現代日本と宗教 (P102~105)

〔資料1〕宗教は生活に必要なものか (27年販売, 50年NHK)

年次	必要なもの	わからない	どちらでもよい	なくてもかまわない
27	74%	5%	15%	6%
50	46%	5%	26%	23%

〔資料2〕神や仏を信じる人 (27年販売, 48年NHK)

年次	20才台	30才台	40才台	50才台	全体
27	38%	50%	60%	73%	55%
48	28%	42%	58%	70%	50%

(註) 27年に20才台だった人は、48年に40才台というようにそれぞれの世代が20年後にどう変化したかも見ることができる。

〔資料3〕信仰・信心の有無（統数研「国民性」調査—文部省）

もっている：もっていない

33年	35%	65%
38年	31%	69%
43年	30%	70%
48年	25%	75%

〔資料4〕先祖を尊ぶか（同上）

	尊ぶ	普通	尊ばない	他
28年	77%	15%	5%	3%
48年	67%	21%	10%	2%

〔資料5〕宗教・信仰に係る行動（48年NHK）

年に1, 2回程度は墓参りをしている	62%
お守りやお札などを身のまわりにおいている	31%
この1, 2年の間に入試合格などを祈願しに行ったことがある	23%
おりにふれ、お祈りやお勤めをしている	22%
この1, 2年の間におみくじをひいたり占いをしてもらった	19%
ふだんから、お祈りやお勤めなどをしている	15%

設問1 あなたは神や仏を信仰することについてどう考えているか

設問2 以上の資料を総合して、現在の日本人の宗教意識について、どう考えるか。（たとえば、〔資料1〕で27年に必要なものと答えた人の%, 〔資料2〕で27年に神や仏を信じる人全体の%の差が48年, 50年の場合どうなっているか、そのことをどう考えるべきかなど、比較項目を設定して考えよ。また、設問1も、資料を検討しながら考えをまとめること。）

(2) 現代日本人の道徳意識 (P112~115)

〔資料6〕たいせつな道徳はどれか（いくつでも）（統数研—同前）

年次	恩返し	親孝行	個人の権利の尊重	自由の尊重
38	43%	61%	48%	40%
43	45%	61%	44%	46%
48	43%	63%	45%	43%

〔資料7〕義理人情の評価（30・40総理府，50NHK）

「今の世の中は義理人情を重んじないのでよくないか」

年次	よくない	そうは思わない	わからない
30	41%	45%	14%
40	32%	56%	12%
50	39%	47%	14%

〔資料8〕恩人への義理
と、仕事のどちらをえ
らぶか（統教研）↓

- A. 恩人が危篤の時，何をおいてもすぐ恩人のもとへ行く。
B. 恩人のことが気になっても大事な会議に出席する。

年次	A	B
28	54%	41%
38	46%	46%
48	40%	51%

〔資料9〕日本人の道徳に欠けていることは。

	公德心		利己主義的
37年朝日	57%	30年総理府	61%
44総理府	75%	45 NHK	79%
49同上	70%	49 同上	71%

設問3 資料6～資料9を総合して，あなたは現代日本人の道徳意識
についてどう考えるか。

設問4 これらの資料で問うている問題についてあなた自身はどう答
えるか。またその理由は何か。

（これらの設問に対しては，設問1，2と同様に，比較項目を設定し，
変化した点，変化しない点やその理由などを考えながら解答せよ）

（3）現代日本人の民族意識（P208～212）

〔資料10〕日本人と西洋人の優劣（26脱売，28～48統教研）

日本人が	すぐれている	劣っている	同じだ
26年	28%	47%	
28年	20%	28%	14%
38年	33%	14%	16%
43年	47%	11%	12%
48年	39%	9%	18%

〔資料11〕好きなのは
日本の庭か西洋の庭か

	日本	西洋
28	79%	16%
33	85%	11%
38	90%	7%

〔資料12〕日本人の性格（長所をいくつでも）（統数研）

年次	勤 勉	粘り強い	礼儀正し	親 切
3 3	5 5 %	4 8 %	4 7 %	5 0 %
3 8	6 0 %	5 5 %	4 3 %	4 2 %
4 3	6 1 %	5 8 %	4 7 %	4 5 %
4 8	6 6 %	5 2 %	3 7 %	3 1 %

設問5 資料10～資料12を見て、現在の日本人の特色についてどう考えるか。

設問6 これらの資料を見て、今後の日本人が考え、努力しなければならない点は何であると考えるか。またその理由は何か。

（解答にあたっては設問1～4の注意書きに準じなさい。）

（4）そ の 他

紙数の関係で省略するが、以上の他、地域社会の空洞化、高度成長への反省など、多くの資料が掲載されていて、客観的分析・解説も加えられている。現物に一応目を通され、それぞれに教材化をお考え頂きたい。

3. ま と め

ここに紹介した資料の扱いについては、現代社会の特質、青年期と人格形成のいずれにおいても用いることができる。また、人生観・世界観に入ってから用いることもできよう。いずれにしても、現代の人間（日本人）がおかれている客観的生活条件と、それにかかわる意識の状況を資料的にとらえて、それらをふまえた上で、生徒の主体的問題として考えさせていく展開が必要であろう。

紙数の関係で、原典では図表化されていたものを数字の表にしたので、読み取りにくくなった点をおわびし、利用される場合には、生徒の作業として図表化させてみるのも一法であろうことを、つけ加えさせて頂く。

本年の研究主題からみて、本書のような時事的な性格のものをとりあげたことは、あるいは的はずれであったかも知れない。古典と現代との接点を探ることも、授業者としての一つの課題と考え、あえてとりあげてみた次第である。

「緑色革命」— 現代と青年, そのライフスタイルについて

都立小山台高等学校 山下 順 吉

1. とりあげた理由

青年期や現代社会についての諸問題を考えるヒント、モチベーションとして『フォークソング』を取り上げている(紀要13集拙稿参)。それは単に音楽ジャンルの一つとしてでなく、「若者文化」「若者のライフスタイル」と呼んでいい全体の一部を構成している。今回は更に若者の『服装』に言及して、現代青年の意識構造を追ってみたい。ロングヘアーにジーンズ姿を「かぶきたる体」「かぶき者」と否定的にみないで、「きわめてデモクラシー的な価値を表現している」と言ったら、何のことか、当の若者自身も考え込んでしまうのではないか。現代アメリカの「統合国家」、政治・経済・文化のシステムが国家と大企業を軸にして統合された機構体の反省から生まれた『緑色革命』なる書物は、我々・青年にいくつかの問題提起をしているので受けてみることにしたい。

2. チャールズ・ライク著『緑色革命』について

原題を『Greening of America』という。グリーンングとは「緑化」ということになる。これは、失われつつある自然を回復し、緑でおおわれた大地をつくりだそう、などというかけ声のもとに、たとえば4、5百本の若木を植樹するということであろうはずがなく、この日本をふくむ地球全体が、金属やプラスチックや不毛の石で、もはや回復不能なまでにおおい尽くされてしまったという事実を、おごそかに認めたりえて生まれてくる新しい意識のことをひとまず「グリーンング」という言葉で表現している。これは現代アメリカ社会をトータルに批判し、「新しい意識革命」を論じたかなり大部な書物である。この新しい意識をライクは意識Ⅲと呼び、

故に、彼は意識Ⅰ・Ⅱをこう説明している。

意識Ⅰ：世界を各人が独立生きていくジャングルとみなし（238・注1）、美德と力をそなえた個人が勝利する意識である（74）つまり、しきりに出世を求める伝統的（開拓者的）人生観である。

意識Ⅱ：20世紀前半に形成されたもので、組織・制度・社会などの優位を認める態度、ならびに人間は自分の運命を自分自身ではなく、これらのものに結びつけ、それに自分の意志を従属させなければならないという信条である。＜どんな行動が国（そして企業体）のためになるかまずたずねてみよう＞と意識Ⅱの声は言う。意識Ⅱは＜制度人間＞なのだ（74）。組織の必要に役だつことなら、なにを要求してもかまわないのだ。高校生は髪を短く刈らなければならない、さもないと停学をくらう。公務員は政治活動をひかえなければならない。大学の教師は学術雑誌に発表しなければならない、というわけだ（117）。厳重にはりめぐらされた人間関係の網と地位を求める策略とをそなえた巨大な統合的階層制社会へ移行してゆく能力主義社会（メリトクラシー）の重視である（238）。

意識Ⅲ：一言で自己回復ということだが、意識Ⅲについてはすでに拙稿を13集に＜ユースクエイク＞として紹介した。特に我々には、ヘアースタイル、服装、音楽、政治姿勢、他人とのかかわり方などの意識Ⅲの「転換現象」が目にとまる。フォークソングを通して意識Ⅲの意識構造をまとめたので、今回はそのライフスタイル、服装を取り上げた。

3. ジーパンについて

ジーパン（ジーンズ）にどんな意味がこめられているのか、これまで考えてみなかっただけに「新しい世代の服装は意識Ⅲの重要理論を表明している」という著者の展開に何のことかと最初思った。さてそのジーパン・ルックについてまず要約してみると、「くすんだ感じ — 褐色（ブラウン）や緑（グリーン）、ブルーの衣服。その生地はラフで手ごたえがある」

(246) これは正確な観察であり、それなりにわけがある。つまりジーバン(ジーンズ)の主張(意義)は、①豊かな社会の多色なプラスチック的・人工的外観にわざと反発すること、②安価である、③機能的・土着的、自然との親和感があること、④自由、総体としての自己であること、である

(246) すなわち「よごれはめだたず、地面に寝ころがるには最適である。高価なスーツについた油のしみは世間体がはばかれる。仕立に凝った服装の女は、とても思いのままに歩いたり動いたりできない。意識Ⅲの新しい服装は、着ている人間に、なんでも好きなことをする自由をあたえる。そのまま仕事も読書も出来るし、丘に寝ころがれるし、バイクに乗れるし、タッチフットボールもダンスもやれるし、床にすわったり、キャンプ旅行をつづけたり、そのまま寝ることもできる。だからなによりも快適だというわけだ。新しい服装のもつ自由は、総体性としての自己を表明している。同一の衣服が考えうるすべての活動に着用できるのであり、だからこの衣服にいわせればこうなるだろう。いろんな活動をしているのは、同じひとり人間で、たくさんの側面をもった総体的な個人なんだ。こうした服装は、実はおおかたの人間が考えるように「一様」(ユニホーム)なのではない。そのひとつの理由は、これらの服装が人間の肉体をきわめて如実に表現するからであり、しかも、人間の肉体はそれぞれ違っており、ユニークなものである。男の背広服は文字どおりユニホームなものである。新しい衣服は、人間と技術の意味深く新しい関係を明確に示している。根本的には、それは機械のつくったものだが、その事実を隠すつもりはなく、マスプロ製品だからといってはじめるわけでもなく、社会的な重みが失われたとは考えない。それこそ大量生産の自由と経済であり、大いに評価すべきことである。それで新しい衣服は、きわめてデモクラシー的価値を表現する。地位や金銭が重要な場所では、服装が幅をきかす。ウォール街では、高価な凝ったスーツを着ているかどうかで銀行家や法律家とたんなる従業員との見わけがつく。新しい服装は階層制、地位、権威、有利な位置とい

ったものの重要性を否定し、競争を拒絶する。人間たちをおたがいにできるだけ率直に、誠実に自然にふるまわせてくれる(246)～(251)。

4. ま と め

教材内容の平明化という点では、現代社会の特質を若者サイドから分析批判、摂取している点で一つの格好な資料ではないかと思う。賛成・反発つまり対話が沸騰するようなもの、刺激の機能を有するものは、生徒にとって平明なもの、身近なものとなっており、そこから我々のねらいである「倫社」への取り組みが始まるであろう。本稿では、昨年度の第1分科会モチベーションのくふうにおいての取り組みをうけつぎ、やはり現代社会と青年期に力点を置いて試みてみたものである。

(注1)『緑色革命』(早川書房刊)の238ページを示す。以下の数字も同様である。

(参考資料)

『緑色革命』チャールズ・ライク著 邦高志二訳/早川書房刊

『緑色世代』序文チャールズ・ライク 編集マイクル・ジエキャン、村松仙太郎訳/早川書房刊

「青春」の生き方 — 先人から学ぶ

都立清瀬高等学校 小川輝之

1. 学習のねらい

「現代と人間」における、「青年期」の学習については、次の三つの観点から授業を展開している。第一に、青年期が人生の中で、どのような位置を占めているか。第二に、青年期にはどんな発達課題があるか。第三に第二の観点にかかわって、青年期をどのように過すべきであるか、ということである。標題にある、「青春」の生き方は、まさにこの観点から学習を進めようとするものである。

そのためには、授業を進めるにあたって、まず「私の青春」を話すことにしている。次に、下記に示す5人の歴史上の人物が、青春をいかに闘い生きたかを知らせることによって、生徒諸君の青春の生き方を考えさせるきっかけにしている。

「私の青春」の話は、私がどうして教師になったかという話を含めることにしている。それは、二年生の時期は進路を決定する課題を担っているとされるからである。歴史上の人物については、生徒が歴史学習などで、身近かに知っていると思われる5人を選択した。そして彼らの青春の生き方をプリントして読書させ、それぞれについて感想文をださせることにした。とりあげた人物は、岡倉天心、吉田松陰、二宮尊徳、坂本龍馬、細川ガラシャの5人である。

2. 文献資料

- (1) 二宮尊徳(1787~1856) — 足もとをしっかりと勉強
有名なロマンチックの詩人ハインリッヒ・ハイネは、イマヌエル・カン

トについて述べるに当って、この大哲学者の伝記を書くことは最もむずかしい作業の一つであるといった。その理由は、カントには生活もなければこれといった話もないからである。

ただ機械的に順序立てられた抽象的な独身生活が、それもケーニヒスベルグの辺鄙で静かな一隅に過ぎただけというのでは、書きようもないではないかということである。

イマヌエル・カントの伝記が困難であるならば、二宮尊徳の青年時代を述べることも決して楽ではない。少年時代にすでに裸一貫となっていた尊徳には、青年の時代を犠牲にしての勤儉力行ということがあるだけであつた。

朝は早く起きてナワをない、マキをとりにつく、そして田畑に出て、開墾や農業を日の暮れるまでする。

夜もまたナワをない、わらじをつくるといった生活の連続であつた。

恋愛もなければ何とやら条約反対の情熱をたぎらす場所もない。身を粉にして働く勤勞の生活があるのみであつた。それは恐らく何の変哲もない二十四時間のくりかえしであつたろう。わたしも、二宮尊徳の青年をえがき出そうとして思わず筆を投ずるところであつた。

ところが、よく考えてみると、やっぱり筆をおくのは早いような気がする。それは、二宮尊徳の青年時代が、その単調なくりかえしのなかにも、なかなか人と変っているものを持っていたからだ。

彼が伯父万兵衛の家に厄介になつたのは、数えて十六歳のときであつたが、このとき彼は、本を読む彼に灯油がもったいないと怒つた伯父に本気で腹を立てている。よし、油がもったいないのなら、自分で作ってやるというのだ。そして本当に菜種をまいて作ってしまった。

ところが、伯父は今度は百姓が本を読んで何になるといった。

とうとうその家をとびだして、名主の岡部伊助方に奉公した。岡部が学問を好んでしばしば学者を招いていたからだ。門前の小僧のように、その

席につらなっていないなくても、学問の声が開ける楽しみがあった。

十八歳のときである。彼はその後は、また学問を求めて小田原の武家奉公に出るが、ともかくその学問好きと筋骨のようなものは、彼をそうした平凡な日常の中にも、尋常でないものにくきたえ上げていったようである。

たしかに伯父万兵衛がいうように、当時は百姓が本を読んだとて怠けくせがつくくらいで、よいことは一つもなかった。

本を読んでえらくなった百姓が徳川三百年の間に何入るだろうか。

そのことを思えば、伯父の心は親切でいっぱいだったとみてもよい。

しかし、金次郎のよみ方は、そのような一般的な本の読み方ではなかったのである。彼は学者になるために本を読んだのでもなければ、物知りになるために本を読んだのでもない。実に働く農民それ自体として本を読んでいたのだ。

青年の客気で、末は博士か大臣かと大望をいまくことは悪いことではない。しかし、青年のひたむきな魂を、自分の足もとに打ち込みながら、自分自身をきたえるという脱書にせい出すことの意義も忘れてはなるまい。何の変哲もない尊徳の青年の伝記のなかにある一つの歴史である。

(奈良本辰也、『歴史のなかの青春群像』)

3. 生徒の感想文

〔生徒A〕— 二宮尊徳

私は、この五人の中で二宮尊徳の生き方に最も心を強く打たれた。というのも、まったくといっていい程、自分とは違う勉学への心がまえを持っているからだ。尊徳は物知りになるために本を読んだのでもなく、学者になろうとして本を読んだのではないという。彼は、「青年の魂を自分の足元に打ちこみながら、自分自身をきたえるために本を読んだ」という。

私は、この言葉がズシンと心の奥にまで響き、足元をしっかりとかためなくてはならないと思った。

〔生徒B〕 — 細川ガラシヤ

細川ガラシヤの絵は、前に一度ある雑誌で見たことがあった。最初見た時から、「あゝ美しい人だなあ」と思った。絵の下に書いてあった数行の言葉から、単なる美女ではすまされない女性であることに気付いた。偶然ともいえるが、まだガラシヤの顔立ちまではっきりと覚えている頃、先生にこのプリントを渡されました。

私は美人が嫌いだ。鼻が高く、何もかも自分のもののような顔をしている。自分の美しさに自分にほれこんでしまって、月夜のうつくしさとか、星の輝く空の美しささえ、知らないように思われる。

しかし、私の大嫌いな美女であるというのに、細川ガラシヤには何の嫌悪感もない。それは、私には持つことのできない忍耐と勇氣と愛とを持っていたからであろうか。それなのに私は……。もっと強く生きてゆかなければ。たとえ「灰色の人生といえども、生きぬく勇氣を持たなければ」

4. 指導上の留意点（授業を反省しながら）

以上のような、授業を行ったのであるが、ほぼ初期のねらいを達したように思われる。少なくとも、彼らなりに青春の生き方を考える時間にはなったようだ。以下に、この種の授業を展開するにあたっての留意点を、授業の反省を含めて書きそえておきたい。

- ①授業で取り上げる人物を、どのようにして選ぶかということ。できれば人生観・世界観の学習で取り上げられる人物にしたいが、手頃な青春記がない。望ましいことは、カントの青春期を導入としてカントの思想を語ることはないのか。
- ②プリントを読ませて、感想文を書かせる。2時間で、青年期のあり方を考える授業を終えてしまったが、適当な感想文を取り上げて、さらにクラス時論にまで発展させていけば、より意義のあるものになったのではなからうか。

自我のめざめ

— ヘッセ「デミアン」から —

都立青山高等学校 小川 一郎

1. 学習のねらい

自我にめざめた青年は、日記の中で自己を客観視するとともに自己弁護をする。もう一人の自分との対話であるといえよう。したがって日記の内容は外面的な事実の羅列ではなく、心の中にうつしだされたことについて自己の反応が問題とされる。それは外部のことと、めざめた自己の主張の接触から生ずるものにほかならない。自己の生き方が意識されるようになったのである。今までは外から与えられた価値を素直に受けとってきたのであるが、今や自己の見出した新しい価値のために、外部の伝統や権威や慣習に疑問の目を向け、自らの新しい価値を求めするのである。すなわち、自己の生き方を問題にしているのであるが、未熟で力の弱い青年だけに孤独感を味わったり、不安にとらわれたりすることが多い。このような状態の中で、自己を見つめながら真の自己を求め続けることの中に、自己の発見・確立への道があることを理解させたい。

2. 資料と扱い方

☒ 自己に目を向ける

「私はあえて自分を、知っている者とは呼ばない。私はさがし求める者であった。いまでもそうである。しかし私はもはや星の上や書物の中をさがし求めはしない。私の血が体内を流れつつ眠っているところの教えを、私は聞きはじめる。……すべての人間の生活は、自己自身への道であり、一つの道の試みであり、一つのささやかな道の暗示である。どんな人もかって完全に彼自身ではなかった。しかし、めいめい自分自身になろうとつとめている。ある人はもうろうと、ある人はより明るく。めいめい力に応

じて。誰でも皆、自分の誕生の残りかすを、原始状態の粘液と卵の殻を最後まで背負っている。ついに人間にならず、カエルやトカゲやアリにとどまるものも少なくない。上のほうは人間で、下のほうは魚であるようなものも少なくない。しかし、各人みな、人間に向かっての自然の一投であるわれわれはすべてのものの出所、すなわち母は共通である。われわれはみんなおなじ深淵から出ているのだ。しかし、みんな、その深みからの一つの試みとして一投として、自己の目標に向かって努力している。われわれはたがいに努力することはできる。しかし、めいめいは自分自身しか解き明かすことができない」(ヘッセ「デミアン」新潮文庫はしがき)

取り扱い方……小説だから本当は一冊を全部読んで感想を話し合うのがよい。ここでは制約があるので、このような形をとらざるをえないが、資料を読ませて、先ず作者は、この部分で何を言いたいのか考えさせるようにしたい。人間には外からの刺激に簡単に反応してしまう感覚的な反応行動や外部の評価の基準に合わせて行動する面がある。このような自己の姿を真の自己と呼ぶことができるだろうか。これらを否定してそれぞれの人間もつ個性的なかけがえのない生き方をどのように求めたらよいだろうか。自己主張をしはじめている青年は自己の目を自己自身に向けざるをえない。ここでは自由にめいめいの意見を述べさせることにとどめたい。

☒ 自我のめざめ

「そのときからすべてが変わってきた。幼年時代は私の身边から崩壊し去った。両親は一種の当惑をもって私をながめた。姉たちはすっかり私にうとくなった。一種の覚醒が私のなじんていた感情や喜びをゆがめ、色あせさせてしまった。庭はかおりを失い、森は誘わず、身边の世界は古物の見切り売りのように味けと魅力をなくした。書物は紙になり、音楽は騒音となった。さながら秋の木のように葉が落ちるようだ。木はそれを感じない。雨が木にそってしたたり落ちる。あるいは日光が、あるいは霜が。木の中では生命が除々にいちばん奥の窮屈なところに引っこんでしまう。

木は死にはしない。木は待っているのだ。……

私は自分で自分に驚いた。いつも私は深く感じやすい子どもで、根はかなりいい子どもだったが、いまはすっかり変わってしまった。外部の世界に対して完全に無関心にふるまい、幾日もただ、自分の心の中に耳傾け、心の中に潜在的に流れている禁制の暗い流れを聞くことに没頭した。私はようやく最後の半年間に非常に早く成長し、ひょろ長くやせて、ぎこちなく世間を見ていた。少年の愛らしさはすっかり消えてしまい、私自身これでは人から愛されないことを感じていた。(ヘッセ「デミアン」新潮文庫 P. 85~P. 87)

取り扱い方……青年の自我のめざめが、文学的に非常によく表現されている。生徒はこれを読んで心に響くものを感じるに違いない。ここにえがかれている変化はどうして生じたのであろうかを先ず話し合いたい。今まで意味をもっていたものが急にその意味を失ってくることは、青年の心の内面の変化に他ならない。価値の転換が行われているのだ。新しい自己の誕生、精神の誕生における生みの苦しみの中で味わう感情である。既成の価値をいったん否定して自己の内的基準によってはかろうとするのであるが、その内的基準も充分に育っていない。既成の権威や価値の方が強い場合が多い。不安や孤独におそわれながら自分自身の道を歩こうとする青年の反抗や孤独について話し合わせ、考えを述べさせて、青年が何を求めているか自覚させ、自己の生き方を求めている現象に他ならないことを自覚させたい。

☒ 自己の発見

「突然私の眼前には一つの姿、高い崇拜する姿が出現した。……どんな欲求も衝動も、畏敬と礼拝を願う心より深くはげしくはなかった！ 私は彼女にベアトリーチェという名まえをつけた。……彼女は当時私にきわめて深い影響を及ぼした。彼女はその姿を私の前にすえ、一つの霊場を私のために開き、私を一つの寺院の中の祈禱者にした。日一日と私は飲酒と夜

のうろつきから遠ざかった。私はまた孤独に耐えられるようになり、好んで読書をし、好んで散歩をするようになった。突然な改宗はさんざん嘲笑を招いた。が、いまは私は、愛するもの、崇拜するものを持ち、ふたたび理想を得た。……いずれにしてもいまの「明るい世界」はいわば私自身の創造だった。それはもはや、母のもとへ、責任のない保護のもとへ逃げ帰りはいこむことではなくて、自分自身によって考え出され要求された新しい奉仕で、責任と自制とを伴っていた。」(ヘッセ「デミアン」新潮文庫 P. 100～P. 101)

扱い方……ひとりて不快な考えと心配にみだされて散歩していたときに美しい一人の女性に遭遇したことが主人公に大きな転換をもたらしたが、これは何を意味するのだろうか。資料を読ませ感想を発表させたい。迷いながらも自己を求め続けたもののみが見出したものだろう。自己の内部にある価値基準の手がかりをつかんだようだ。自己が見えてきたのだ。自我の確立は簡単になし得るものではないが、外の世界と自己の内部の世界がつながりはじめ、新しい自己の目で外部の世界の意味を考えることが出来るようになり、自己をその中でどのように実現するか希望をもって考えはじめたのである。自己の生き方を考える歩みが軌道に乗りはじめたのである。

3. ま と め

自我のめざめについて理論的に説明したり、教科書の説明を読ませる前にこれらの資料で考えさせたい。生徒に興味が出てきたら是非小説「デミアン」を全部読ませたい。一冊の本を教室で取り扱う場合、特に小説の場合は同感したところ、反発を感じたところ、わかったことをひとりひとりの生徒の理解力に応じて求めればよい。なるべく多くの生徒に部分的な感想でも発言させるとよい。無理に結論を忙がず、生徒の発言を深め、それぞれの発言をつなぐことに心がけ、生徒の考えを尊重しながらすすめるようにしたい。

青年と人間形成 — 工業高校生 としていかに生きたらよいか

都立府中工業高等学校 関 根 荒 正

○ はじめに

私は、今年、教員1年生として、工業高校に赴任した。3年6クラスの倫社を主に担当しながら授業をしてみると、私の頃の高校時代とくらべて授業態度、それよりむしろ本質的な高校時代の意味づけ・生き方が非常に変化しており、最初の頃はまごつくことが少なくなかった。そこで、倫社の年間計画を練り直して、生徒にとって難解であろう哲学的分野は基本的な事項をおさえるにとどめ、生徒にとってより重要であろう社会学心理学の分野に重点をおくことにした。更に、全般を通じて、生徒に自己の生き方を述べさせたり、問答したりする機会を多く授業に取り入れようと努力することにした。以下は、「現代と人間」のまとめの学習として取り上げた授業展開の一部である。

○ テーマ設定の理由及び獲得目標

表題にかかげたテーマを設定した理由は、「現代と人間」の学習の総括として、如何に生きるべきかの道を探らせることが必要であるという観点から、現在の状況でいろいろ問題がある工業高校（卒）生としての社会に生きる方途を追求させんがためである。もう少し具体的に述べると展開は次のようになる。生き方の一般的な問題として、教科書（東京書籍版）にのっている「13の生き方のタイプ」を説明して、生き方の多様さを理解させる。その上に、自己の生き方をその中から前向きに選ばせる。そうしたことを前提として、学歴・能力等種々の差別がうずまく社会に飛び込むであろう工業高校生に先輩達の体験を示して、厳しい現実を理解させ、自己発見の過程を追求させる。獲得目標は次の3点においた。

1. 多様な生き方の理解及び他人の生き方を認める態度の涵養

2. 現代社会の特質についての理解を自己の立場で深める

3. 生き方を社会的に追求する視角を獲得すること

○ 授業展開

このテーマ学習は、青年期の意味・性格形成の学習を前提として、以前に学んだ現代社会（集団）の理解を具体化する意味も含めて、3時間にかたって行われた。その個々の内容は次のものである。

1. アメリカの哲学者C・W・モリスのあげた生き方の類型（東書版、P. 68）を取りあげての、人間の多様な生き方とそれらに共通する3つの傾向を講義。

2. 「生きがい」の問題を、職人氣質や、宮城音弥著「日本人の生きがい」の類型を使って説明、及び生徒との問答

3. 新聞の投書を使って、工業高校（卒）生の生き方の例を示し、それについて問答

○ 生徒の好む生き方の傾向

先ず第1時間目は、モリスの生き方の類型を、職業等で例を上げながら講義した。昨年は厳しい就職戦線と騒がれている中で現実的に就職試験が行われている状況もあって、課題として、自己の素直な、前向きの生き方をモリスの類型の中から選ばせてその理由を説明するという作業も同時に与えた。生徒の選んだ生き方を統計して、多い順に3つならべてみると次のようになる。（尚、3年6クラス、在籍197名、提出170名）

1. 健康でのんきな楽しみに生きる。（安楽型） — 57名

2. 冒険的な行動の機会をつかむ。（行動型） — 27名

3. グループに参加して生活を楽しむ。（協同型）— 24名

この結果をみると、生活と友人の関係を重視している者が大多数をしめ行動型等を好む者も少なからずいるとはいえ、総体的には社会の中で積極的に生きようとする傾向の者はごくわずかである。これをみて、私は、他の人々との競争にたえうる力をつけてほしいと熱願している立場から「優

しすぎる」という感想を生徒にもらした。

○ 新聞の投書に資料に

それから、第2時間目の授業は、「生きがい」の問題を、自己の体験をふまえながら、生徒と問答をして進めていった。そして、このテーマ学習を第3時間目の時間に集約しようと試みた。その際、資料として、朝日新聞（昭和50年8月20日）の論壇にのった「このどうにもならぬ現実—実業高校を出て就職、知った壁」を提出した。その一部を抜粋して紹介してみよう。

「現在、僕は、自活しながら浪人している。工業高校を卒業後、ある大手の造船所へ就職し、そこで予備校の授業料と来年度の私立大学の入学金を作って離職し、今、新聞配達をしながら予備校へ通っている。

何が僕に、これほどまで大学進学の意味を燃やさせるのか。それは現実である。工業高校卒ではどうにもならぬ現実のためである。

一般に、現在の実業高校（一部大学を含むであろう）は、成績不良学生の集積所だと言われている。僕もまたその例外でなかった。その僕を、就職して直面した現実が、変えずにはおかなかった。」

更に、筆者は、工業高校卒故に受けた就職上の差別を2つに分けて語り実業高校への提言を含めて、後輩への忠告として自分の意見を適切に出している。これをもとに、私は、我校の就職した先輩の話を含めて、工業高校卒生に対する差別の事例（職務内容が常に単純労働であること、学歴により能力が認められないこと、周囲の目等）を話し、生徒の感想を聞きながら、どういうことが必要なのか問答した。感想として出されたのはだいたい次の事である。新聞の筆者の進路選択がまちがっていたのであって、自分達はそのようにはしないという意見。投書の差別は事実だろうし、自分達の将来にも同じことがあるであろうというもの。投書の実実はよくわからないが、自分は下積みでも一つの仕事に熱意をもってやってゆきたいというもの。数としては、最初に上げた意見が多く、その裏には、仕事を

前向きにとりくむよりも、それを生活手段として考えている傾向が読みとれた。意見・感想を出させる事には一応成功したが、問題を深くつきつめられないまま、「適切な進路選択」「自己鍛練」が必要なのだという一般的な結論にしかもってゆけなかった。

○ 反省

この学習を反省してみると、題目の大きさはうらはらに、自分の教師としての力不足を感じざるをえなかった。即ち、自己の生き方の追求が不十分であるが故に、抽象的にもってゆきたいところはわかっている、具体的な生き方についての発問過程を系統づけることは出来なかったわけである。又この種の生き方の問題は、一般的なことに流れやすく、くいこみにくいところがある。生徒の方も、まだ、他人の生き方について自分の立場で批判・摂取してゆく力があまりない。この点からみて、自己表現をつける作業をもっと多くやっておくべきであった。最後に、生徒の書いたレポードの中で、めだったものを一つだけ上げておこう。

「人間にとって勉強は将来（生きている限り）長い人生を歩むにあたって、これでいいなんてことはない。……現在、自分は、腕力をつけたくて鉛のボールを使って練習している。一日も欠かさず今日に至るまで、それをやりぬくのは、つらい、苦しい、孤独だ。だけど、いつか何かに役立つだろう。直接にかかわらなくても、たとえ使い道がなくても、何かに役立つはずだ。そう思い、今齒をくいしばって続ける根性、己に勝つをモットーに、誰のためでもない、自らをきたえ、精神的弱さを補充し、いつか、この努力がむくわれる日を待ち、またそんな日を夢みている。現時点の自分を別にバカだと思わない。いや、ほこりをもつほどになりつつある。今、青春のまったただ中を歩むムダでもいい。だけど、負け犬だけにはなりたくない。そのため、「影の人物」「縁の下の力もち」、そんな目立たない人間でいい。それが自分の生きがいとする長所でも短所でもある。」

（飯塚博行）

現代社会における人間の問題 ——ピカソ、M・ブーバーにみる——

都立保谷高等学校 杉原 安

1. テーマのねらい

「現代と人間」の分野をやっている、常に人間不在を感じる。人間を取りまく現代社会の外なる状況は、産業化、大衆化、情報化等の観点から指摘しやすい。しかしその中の人間のあり方を問うことはなかなか難かしいし、昨年現行の倫社の教科書を分析したとき、(49年度一教科書はどう書かれているか — 都倫研特別分科会)「現代と人間」の分野で、写真、図版、統計等視覚に訴えるものが旧版に比して大巾に増加しているのが目についた。例えば絵画についていえば、ピカソのものだけでも“ゲルニカ” “生きる喜び” “泣く女”が取りあげられている。東大の今道氏は、「詩人でも画家でも偉大な芸術家の作品は来たるべき時代を予知する」とのべている。たまたま現在私が使用している教科書の現代と人間の所に、ピカソの“泣く女”がとりあげられ、また<生きがい>について記述されていたので、つぎの観点から本年の研究主題「教材内容の平明化」を考えてみた。第一に“百聞は一見に如かず”といわれているが、ピカソの“泣く女”を通して現代社会における人間の問題を考えさせることである。第二に、現代社会のもたらしている問題を現代思想との関りにおいて考えさせることである。最近、近代哲学が失ったもの、逆に現代で哲学が回復すべきものとして原子論的個人主義に対する共同社会ということが言われている。そこで現代社会における人間の疎外感、孤独感の克服への1つの試みとして、M・ブーバーの人間論をとりあげてみた。

2. テーマの展開

①ピカソの“泣く女”

H、L、C Jaffeによれば「ピカソの芸術は21世紀の本質をうつし出

している。……ピカソの芸術においては、私的なものはのりこえられ、彼自身の体験は彼の時代の体験、もしくは人類の体験となるのである」とのべている。まさに彼の作品を通して現代における人間、来たるべき時代における人間を読みとることができる。”泣く女”はピカソの1937年の作品である。1936年7月に第2次大戦の前ぶれになったスペイン内乱がぼつ発し、フランコ将軍が率いるファシズム勢力がヒトラーと手をくんでスペインの民主政治の打倒をはかった。そして1937年4月にドイツ空軍がフランコ政権を援助するため、小さな平和な無防備の町バスク地方のゲルニカの町を爆撃した。ピカソは1881年南スペインのマラガに生まれたので、このことに強い驚きをうけ、大作“ゲルニカ”の筆をとった。この一番最初の習作が、“泣く女”である。ここにはく奇怪な表情のなか、に深刻な感情がなまなましく表現されている。生徒はこの作品をどう受けとっているか、ここに二、三の感想を引用する。

「現代社会の風刺の絵であり、人間の未来に絶望している。鼻は高くなく、決して威張っていない。顔の輪郭は直線的で機械的であり、融通のきかない人間を表わしている。顔の色は多分明暗がはっきりとした極彩色で人間らしからぬ色づくめの(人工の)顔をしているのであろう。まつ毛はやたらと長く、ごみの入るのを防いでいる。鼻の穴、耳の穴などあるかわからない位小さい。公害に向かう人間の自己防衛の姿勢であろうか目玉は星形に割れ、涙は溝に沿って流れ出ている。顔面はひび割れ、歯と歯ぐきは乱れている。人間は生来こんな形で生きねばならないのだろうか」

「深刻ななまなましい感じ。どうしようもない、身動きできない感じが伝わって来る。この感じが今のいろんなものが集まっている都市に似ているような気がする。産業社会の側面で失われがちな人間性というか、そんなものが現われているようにも見える。」

「幾何学的な模様の中に、人間の感情が深くとり入れられている。我々の生活の中にあるものは、まさしくこれである。現在我々をとりまくもの

は、ほとんどが直線で形づくられ、あたたかみのある曲線というものは、ほとんど見られない。そして我々の感情はその中に屈折した形でおこまれている。我々がもしそのことに気づきそれを嘆いたとしても、結局その直線の集まりの中で、屈折した形でしか、それを表わすことはできないのである。」

② M. プーバーの人間論

M. プーバー(1878~1965)はヘブライの思想家で、既成のいかなる主義にもとらわれない立場から人間の「生」に最高の価値を見出した誠実なヒューマニスト、哲学者として有名である。このことは彼の実践ともつながり、例えば1961年には、イスラエルでの世論に抗してただひとり元ナチス親衛隊アドルフ・アイヒマンの死刑に反対している。(ブリタニカ国際大百科事典参照)プーバーの思想の核心は対話的原理にある。彼は人間理解の方法論の尺度として「我と汝」「我とそれ」を使う。そして人間は「我と汝」の関係でなく「我とそれ」の関係になるところに人間の孤独が生まれるとする。人と人とを結びつけるものは関係である。人間は我として全人格的に汝と向き合うことによって真の人間となる。このことは、現代社会の中に生じている人間性を疎外する状況、個々の人間の利己主義的態度、行動、人間関係の稀薄さを考える時、私達に示唆する点が大きいと思う。今、彼の名著「我と汝」の中から具体的に引用してみたい。

「世界は人間にとっては、人間の二重の態度に応じて二重である。人間の態度は、人間が語り得る根元語が二つであることに依じて二重である。この根元語とは、単一語でなくて対偶語である。根元語のうちのひとつは対偶語・我—汝である。もうひとつの根元語は対偶語・我—それであり、この場合には、それを彼あるいは彼女のいずれかで置きかえても、その意味するところには変りがない。このように根元語が二つあるからには、人間の我もまた二重である。なぜなら、根元語・我—汝における我は、根元語・我—それにおける我とはことなっているからである。……」(対話的

原理、みすず書房)。根元語・我—汝はただ存在の全体でもってのみ語られ得る。根元語・我—それは決して存在の全体でもって語られ得ない。ここにみられるのは、単独で存在する「我」ではなくて、共同存在としての「我」である。昔から「人間は……である」という形で種々いわれているが、いまブーバーの人間観をみてみたい。それは閉ざされた世界に住む人間を救う手だてとなり得るものだとも思う。

「元来、人間に関する科学の中心的対象は、個人でも、集団でもなく、人間と共存しつつある人間である。人間と人間との生きた関わりの中においてのみ、人間の本質性、人間に固有なるものが、直接認識されるのである。ゴリラさえも個であり、白蟻の国さえも集団である。しかし我と汝とは我々の世界の中にのみ存在する。なぜなら人間は、つまり自我は、汝との関連に基づいてこそ、はじめて存在するからである……。人間と共存しつつある人間こそ銀河系宇宙の全景である。人間と共存しつつある人間を見たまえ。」（ブーバー、人間とは何か、理想社）

3. まとめ

最近の生徒の現状をみると、方法であれ、教材内容であれ平明化は不可欠であると思う。その時、上記に書いてきた所で二つの事柄を考えてきたつもりである。第一は生徒の視覚を通じて感性に訴える形での平明化である。ピカソの絵画の提示はまさにこの線に沿ったものとしての試みである。第二は現代社会の所で人間の問題をもっと現代思想との関わりにおいて原理的に考えさせることができないだろうかということである。歴史的に人間観の問題をたどっていった時に、実存主義的な人間観で終わっているというのでは、今日の根気にやや欠ける生徒を引きつけるのは難しいのではないか、勿論、人間に実存的な面とともに、この頃いわれている無意識的な面、感性的な面も否定できない。20世紀も四分の三を過ぎ去ろうとしている現在、もっと多方面からの人間理解が現代社会との関わりにおいて考えられる必要があると思う。

第2分科会 思想の源流

研究経過報告

第2分科会は、6月27日の墨田川高校における都倫研第1回研究例会のあと、第2分科会メンバーの顔合わせ・世話人の選出・今年度の研究会のあり方についての打ち合わせ等が行われたが、実質的にはあわせて5回の研究会を開くことができた。

第1回は7月15日(火)葛飾商業高校で開かれた。学期末のせいもあって参加者4名だったが、3時半から5時半まで2時間程かけて活発な討議がなされた。いろいろなことが話し合われた中で特に、①具体的でいきいきとした教材をどのようにして作り出していくか。②源流思想を学ぶに際しても日本人であるわれわれの意識構造を手掛りとして、どのような形で自己の対象化を生徒に促していくか。③倫社を教える教師の信念・価値をどのように生徒にぶつけていったらよいか等が前提条件として話し合われた。

そしてこれからの分科会の方向として次のように取り組んでいくことを決めた。

(1)思想の源流の分野における原典〔ソクラテスの弁明・論語・聖書…〕に即しながら、授業展開の具体的な仕方・工夫・問題点等を出し合っていく。

(2)その際、抽象的な原理論だけでなく、「無知の知・エロス・イデア・アガペー・仁・慈悲・無我」等を具体的・個別的にどうかだいて、わかりやすく説明していったらよいか、比喩・具体例・エピソードなど授業展開に役立つプラグマチックな面にも力点をおいて考えていく。

(3)毎回、チューターの先生を予定し、その報告を中心にして、話し合いを進めていくので、各自もそれに沿って準備する。

第2回は9月2日(火)市ヶ谷商高校で。学期始めにもかかわらず呼び

かけに応じ、12名の先生の参加をえた。ギリシヤ思想（ソクラテス）をテーマに4時半から6時半過ぎまで研究会がもたれた。まずチューターの葦名先生がポイントを具体的に、わかりやすくだのように説明したらよいかについて、授業中に使用した豊富な資料を参考に現実の諸問題とからませながら報告され、司会浅香のもとに活発な話し合いがなされた。

その際特に話し合ったことは、(1)ソクラテスの死の意義をどうとらえどう説明したらよいか、(2)ソクラテスの信念、その宗教的側面を自然法と関連させながらどう説明したらよいか、(3)ソクラテスにおける主知主義の側面、あるいはその非合理的要素をどうとらえたらよいか、(4)ギリシヤ思想特にソクラテスの場合どこにポイントをおき、どう精選したらよいか、(5)授業における教師の信念のあり方はどうあればよいか等であった。特にその中でも宗教や価値を扱う場合の教師の側の価値意識、信念、その表現方法のあり方などが問題となった。そしてこれら提起された諸問題について更に掘下げが必要であるということで、次回チューターをきめ更めて検討することにした。なおその時まで「ソクラテスの弁明」その他の原典を各自もう一度読み直し、問題点をさぐって来、原典を持参して読み合わせながら、問題点やポイントを出し合って、授業の教材化を考えていくことを申し合わせた。

第3回は10月20日（月）再び市ヶ谷商高で午後4時から6時半過ぎまで実施された。参加者は9名。老いて益々元気な鷲見先生（駒場高定）がチューターになり、独自のギリシヤ思想の見方について熱心に話された。内容は多方面に及んだが、ギリシヤ思想特にプラトンのエロス（生命の根源への愛・男女の愛）とキリストのアガペーとの関連性、ソクラテスのダイモニアン（自然法）とポリスのノモス（実定法）との相違点、宗教と倫理との関連性（宗教から倫理がでた）、宗教をどうとらえるか（理窟で説きえぬもので、信仰を通し世俗から脱却することにより自己を否定し、ウラノス、エロスを通して生命の根源を追求し、いかに生きるか倫理を実践す

ること、また宇宙の真理の啓示であると説いた)、宗教成立の背景(都市
国家の成立、自己否定 - ニヒリズム、教会の成立)等についてが特にふ
られた点であり、ソクラテスを研究する基礎として考えねばならぬ事だ
と強調した。

次いで参加者全員から質問・感想・意見等を自由・活発に出し合っ
てもらった。ギリシア思想と仏教思想・キリスト教思想とがどうつな
がるかへの疑問、エロスとアガペーを関連づけることの当否、宗教の
とらえ方、自然法・神の法(神学)と近代英米法との関係等について
特に質疑がかわされた。前回約束した資料を読み合っ
ての検討まではいかず、いろいろと問題点が
だされたので、次回更に「弁明・クリトン・バイドン・饗宴」など
の原典を読み合わせながら問題点やポイントを出し合っ
ていくことにした。今回の話し合いは授業の教材化にはすぐ役立
つものではないかもしれないが教える側として基礎になることを
学び理解していくことは、お互いに必要であると認識し合っ
た。

第4回は11月10日(月) 4.00~6.30 まで、上野高校で実施した。
参加者10名、今回もチューター 鷲見先生、司会浅香の下に進行。

前回到引き続き実定法と自然法と神の法との関係について、宗教から倫
理が生じ、倫理の最少限度が法である。倫理が法のよしあしをきめる基準
である。そのことは「ソクラテスの弁明」によって明らかであるとして、
具体的に資料に当って検討した。(弁明-31 de, 32 a, クリトン-
54 b c)

また「魂」(靈魂不滅)の問題についても、資料「バイドン」の検討を
通して考察した。(64 c, 65 a c d, 66 c, 67 de)

そして西洋への理解も日本や中国の思想への理解をもとにしなければ
できないと、道元や親鸞の宗教を例にしてのべた。

これに対し参加者から例によって活発な質疑・意見が出た。

「倫理・道徳・法はいつ別れたか」「倫理と道徳の相違は?」「悪法で

もあつた方がいいという考えについてどううけとめたらよいか」「実定法と自然法との関係について、ソクラテスはダイモンの声を聞くのが自然法であると、国法に従うよりむしろダイモンの声に従ったのではないか」「彼は世間の不正に抗議して死刑に服した。つまり死を以て抗議したのではないか」「彼はアテネの腐敗した民主政治・民衆の無知を正そうとして結局それに破れたのであり、彼が裁判にかけられた時点において既に葬り去られることは予定されていたのではないか」「彼は不死を願ったのではなく、不正をさけ、よりよく生きるために（脱獄・逃亡をさけ）あえて死をえらんだのではないか」「ギリシヤ思想史の中で彼をどう位置づけるべきか」等々について、それぞれ資料に当たりながら意見を出し合った。

討議は白熱化した。仁に当たりては師にも譲らずで、老いも若きも謙虚にそして真摯に語り合い、時の過ぎるのをしばし忘れた程だった。しかし回を重ねるごとに問題は整理されるどころか、ますます拮がるばかり。教えることのむずかしさを痛感すると共に、いやそれ以上に学ぶことの重要さ・楽しさを一同痛感したのだった。そして年を越してもう一度ソクラテスについて検討することを申し合わせた。（浅香記）

第5回、再び上野高校で4:30から7:30まで。出席者7名(浅香章名、海野、河野、細谷、宮崎、吉沢)。今まで殆ど毎回出席の鷺見、内田、勝田の3先生と、1回以上出席の永上、木村、飯岡、小平、関根の各先生は都合により欠席された。今回は研究分科会の雰囲気をもっともお伝えするために座談会の一部を転載することにした。(文責・司会浅香)

「ソクラテス」についての座談会

司会 第2分科会は今まで実質的に4回話し合いを重ね、今日は5回目そして今年度最後の研究会になるわけです。今日は今まで会を盛り立て推進して下さった鷺見先生が都合で出席していただけず誠に残念です。今までの先生のご熱意に深く敬意を表すると共に、前回までの討議で一番問題になった点について、今日もう少し検討を加えたいと思いますのでよろしくお願いします。最初に実定法と自然法との関係について、あたりから入りたいと思いますが、例の如くフリートウキングをお願いします。(敬語略)

- A 前回「弁明」の32のa(国法への態度・私人と公人との立場)、それに関連して、悪法も法だから守らなければいけないということが問題になったと思うけど、悪法でも守るべきだと彼は考えていたろうか。
- B 悪法というよりな表現は、どこにも出てこないけどね……
- C ポリスにおける法の位置を、明らかにする必要があると思う。
- A そこで実定法と自然法との関係だけれど、彼は国法に従って死んでいったというより、むしろダイモン(自然法)に従って死んでいったと考えられるので、教科書に国法に従って死んでいったとだけ書いてあるのは、生徒に誤解を与えないだろうか。
- B それは俗解の説、誤りで、彼にとっては国法よりダイモンの方が上だった。
- D しかし彼にとって国法に従うこととダイモンに従うことと必ずしも矛盾していなかったのでは……倫理と宗教の別の領域だから……
- A たしかに彼には民主主義の腐敗・墮落という祖国の現状を憂い、それ

を何とかしたいという気持ちは強かったし、また国法を破るという気持ちのなかったことも事実のようだね……

- E そこで彼がポリスの公共性をどれだけ守ろうとし、またそれを越えてダイモンに従おうとしたか、両者の微妙な緊張関係というか関わり方が問題になると思う。
- B まさに自然法と実定法との関わりというべきだね。(笑…)
- A 彼が沈黙したり外国へ逃亡するのを拒否したのは、自分の信念を曲げ口をつぐんだり、祖国を無視して外国へ行ってふぬけみたいになって生きてもしょうがない、真に生きることにならないという気持ちがあった。だから逃げないことで、彼はダイモンに従い、また祖国を愛して国法にも従ったということだろうか。
- D だから彼は決して祖国を無視なんかしてない……。
- E しかしあんまり国法を強調しちゃうと彼は生きてこない。(笑) ソクラテス個人のダイモンやエロスを強調したい……。
- F 生徒も、彼があそこで逃げちゃったら、彼はなんの価値もないって…
- A しかし逃げたってよかったのではと反論も…。今の国際情勢での亡命と当時とは違うんだって説明しているけど……。
- E 本当に愛したからこそ見捨てられなかったんだと思う。そこでポリスの公共性とダイモンとの微妙な関係が問題になってくるわけで、生徒にどう説明したらいいか……。
- F その辺の彼の気持ちを切実に言いあらわしたのがクリトンに……
- B そう、国法を擬人化したところね……
- F クリトンの岩波文庫本でいうと、12以後ですね。
- B 16のところで「自分は国法からではなく、人間から不正をうけて死ぬんだ。法律が悪いのではなく、運用する人間が悪いんだ」といっている。だから悪法とはいってない。裁判がわるい……。
- D 裁判が間違っていたというならなぜ逃げなかったか…逃げたって……

- A: 前にも言ったことがあるが、彼がアテネの民主政治の腐敗・人々の無知を正そうとして、一部の人々ににらまれ気嫌いされた。そして裁判にかけられた時点で、多数の反対派に囲まれ、彼の有罪・死刑はもうある程度きまっていたのではないか。だから彼は堂々と弁明したが、現状に絶望し死を覚悟していたのでは……一方で不正に処するに不正をもってしたくないという気持ちも強くあったが……。
- F: 今の政治家にも、悪法も法だから守るべきだと、彼を逆用する人も……
- E: そういうものを助長するムードが日本の社会にはある。だからこそ弁明に盡かされている彼の真意や日本の風土を明らかにし、生徒に伝える必要性を痛感せざるをえない。
- F: やはりギリシヤ的な哲学や宗教を持っている者と、もっていない者の違いでは……
- E: 私はロゴスというものだと思う。ソクラテスが法を守れという時、それは超越・普遍的な真理としてのロゴスを守れということだったと思う。日本人にはそういうものがない。だからつい通俗的なものに従ってしまふという傾向があるのでは……。
- D: ロゴスとは普遍ということであり、西洋人は古くから個物と普遍との関係を追求してきた。そしてソクラテスは個物より普遍的なもの、形而上的・宗教的なものを重んじたのでは……靈魂不滅を信じたが、彼の宗教は絶対宗教ではなく道徳主義を基礎にした宗教だと思う。エロスとアガペーは本質的に違ふし、キリスト教のようなものは古代ギリシヤ人にとって関知しないものだったと思う。
- A: われわれはプラトンを通してしかソクラテスを理解してないので、どこまでが彼の考えなのか厳密に区別するのは非常にむずかしいと思う。僕はどれも形而上的な考えはプラトンのもので、ソクラテス自身はそんな深く追求していたか疑問に思うんだけど……。
- D: たしかにクセノホンの思い出にでてくるソクラテス像と、プラトンの

それとでは大部違りが……。

A そこでさっき問題としたロゴスだが、僕はソクラテスという人は、ソイストの相対主義に反対し、すべての人がよりどころとしうる真理として追求したのがアレテだったと思う。そして人間の本質的あり方は何かを知り、知行合一的に発揮しうるよう求めることが彼の愛知（哲学）だったわけでしょう。そこでただ生きるのではなく、どう生きればよりよく生きることになるかを、彼は生涯求めていったんだと思う。だからロゴスを求めたというが、それは絶対普遍的・形而上的な真理ではなく、人間の本当のあり方・生き方を求めたのではなからうか……

C 「巽」で彼は嘲笑されている。彼はそれ以前の自然哲学の影響をうけ、やがて自然哲学なり、古い宗教に批判もしたのではないか。彼には批判される要素もあったのではと思う。そこで彼も宗教的側面、ダイモンの関係でとらえるか、具体的実践・法との関係で追求していくかどちらにウエイトをおくかによって、彼の生き方が違って見えてくるのではないか……。

A さっきギリシヤ時代の宗教を高く評価する意見がでたが、ギリシヤの宗教って結局多神教でしょう。そんなにすばらしいものだったろうか。

D 欲望うごめくギリシヤ神話的な多神教を批判する者はソクラテス以前からいたわけだし、アナクサゴラスは自然現象の根底に精神現象（ヌース・理性）を説いた最初の哲学者で、ソクラテスもその影響をうけ自然哲学に訣別し、人倫に道を拓いたとコンホードもいっている。彼が自然哲学を倫理に引き上げたというのは、西洋哲学史において一般的に認めているところだと思う。

司会 ソクラテスが裁判にかけられた罪状の一つに「国家の認める神々を認めず、別の新しい神霊（ダイモニオン）を信ずる…」とあるが、これについてB先生いかがですか。

B 彼は弁明の中で、「アテナイ人諸君、私は諸君に従うより一層多く神

に従うだろう」といっている。この神とはアテナの女神だと思うが、このことからポリスの在来の神を否定してないと思う。

- D そして一方で自分に一番身近な声としてダイモンに従ったわけで、両方を信じてても別に矛盾はなかったと思う。
- E 最初の出発点に立寄り、生徒にどうわかりやすく授業をすすめていくかという観点に立った時、生徒はソクラテスの自らの信念に忠実に生きたことに共感するにしても、心情の純粹さとか日本の良心でうけとめて感動しているのであって、普遍的真理とかロゴスにささえられて死んでいくといううけとめ方をしていない。このことは資料を個々に当たるだけではつかみきれない問題だと思う。そこでソクラテスをどう教えたらいいかが改めて問題になると思う。
- D 生徒がどう受けとめるかを常に考えながら教えていくことも勿論大事だが、教える側の姿勢なり信念をしっかりとつことも必要では……。
- E 信念に殉ずると、狂信に殉ずるとどこで区別するかが正に問題で
- D 結局、公正な判断というものが欠けて行動に移る時、狂信になるんじゃない。ソクラテスは知と徳を合一させ、生かしたところにすばらしさがあると思う。だから両者のバランスをはかりながら、はき違えた個人主義やゆきすぎた欲望を否定していくように、生徒を教えることが大事ではないか……。

司会 では今の問題に関連して、先生方が授業中どういう所に重点をおいで進めておられるか、簡単に順次紹介していただけますか。

- F ソクラテスとソフィストとの違い、彼は何を自己の使命としたか、彼の死の意味は何か、エピソードの紹介（彼の顔・妻・瞑想等）を通して生徒に身近に感じさせ、考えさせたいということかな……
- B 大体重なる所が多いが、無知の知・魂の世話・問答法の3点に力点をおき、ソクラテスの死の問題は軽々に取り扱うと誤解を招きやすいので問題として残し、継続的に考えさせるようにしたい。

- C ソクラテスは法をどう解釈しているかと、彼の生き方の問題を中心に検討することになっている。その他知ることの意味・死の意味とか……
- G 僕は弁明を章ごとに読んでいくやり方なので、特別の問題を立てて考えていくやり方はしない。17～19章あたりを重視し、知と徳の問題・使命感(信念)を中心に読み進めるが、余り理解づけはしてない……
- A 無知の知を通して学ぶとは何か、彼の幸福観は?(現代人と比較してどう違うか)、ソクラテスの死の意義(教科書でもふれているので)を考えさせることを通して、彼がどう生きたかを考えさせる……
- D 私の場合、そこまで進んでいないので申し訳ないが……
- E 私の場合、先生方と違って、ソクラテスに即してアレテとかエロスとかの概念を説明し、わからせる努力をもっと他に向けたらどうかと思うんです。生徒に考えさせるポイントをしっかりおさえて、ソクラテスを教えるのではなく彼の発想法で教える、つまり資料べったりでなく、なだいなださんのような論理分析のやり方や、京大グループの発想法でやっていきたいんです。具体的には、自分の生き方を考えさせるために……(以下略、アンケート参照)
- B・F まさに生徒にわかりやすくという今年度の研究課題にぴったりだね
- A 先生のように社会学的な発想法で、現実の問題もからませ生徒に考えさせるのは非常にユニークだと思うが、そういうやり方のできる先生とやりにくいという先生もおられると思う。資料に即しての学習は、思想家自身の考えを習わせ、少しずつ生徒の考えを深めていく利点もあるのでは……
- D やはり伝統を無視しちゃいけないと思うな。温故知新で、遺産をうけつぎ伝えることは大事だから……
- E 私だって授業で資料を使わないわけではない(笑い)ただポイントのおき所として、前に言ったことを重視したいということです。
- 司会 じゃ時間もないので、最後にソクラテスが靈魂不滅を信じて死んだ

かどうかの問題検討に……

- D 私は鷲見先生と立場が少し違うと思いますが、やはりソクラテスの主知主義を推し進めていくと、必然的な靈魂不滅を止揚せざるをえないと思う。真理の存在を信ずるなら靈魂の不滅も信ぜざるをえない。相対主義なら不滅はありえず、普遍主義に立てば有限はありえない……
- A すると、靈魂不滅を信じたからこそ従容として死んでいったと……
- D ええ、彼はこの世で善をすれば、豚やなんかにならず人間として不滅でありうるという道德主義的な宗教に立っていたと思う。この点が絶対主義的なヘブライズムとヘレニズムとの違いだと思うが……
- C ソクラテスの真理観をどう考える？
- D 真理とかダイモンの前に自己を殺す、自己を超えるというか、個別を超えて普遍にいく、無知と知を形式論理的に止揚させて真の知に至らせるということでは……
- A 近代的理性主義で対すると、かえってつかめないのでは……
- D ええ、それで中国なんかも、道德的にすごく発達した国で、知より徳を重んじたが、あの国でさえ人事を尽くして天命をまつということで最後はあけていたのでは……
- C 僕はやはり死んだあとの世界はどうなるだろうかということより、彼が一番問題にしたのは、今の段階で人間としてどう生きたらいいのかを求め、生きていくことに最もウエイトをおいたのであり、靈魂不滅ということはそれ程深く問題にしていなかったと思う。
- A 僕なんかも、バイドンあたりから彼が靈魂不滅を信じていたように強調される方もおられるけど、彼が生涯求めていたのは人間のアレテであり、人間としてどう生きることがよりよい生き方なのか常に求めていた。だからこそ死に臨んでも逃げかくれしなかったのであり、未来永劫に生きることを願って、死を選んだわけではないんじゃないかと
- D たしかに彼は道德主義の人であり、地上における生き方を一番問題に

したと思う。だから彼は宗教としては徹底せず、倫理としては徹底していると思う。そういう意味で現代のような非宗教的時代に、彼の教えの意義は大きい……

司会 そこで彼の場合、よりよく生きることを願ってあえて死を避けなかったのか、それとも不滅を信じて死んでいったのかどっちだろう。

D 僕はやはり不滅の方に重点をおいたんじゃないと思う。しかし必然性で不滅も信じていたと思う。

A 彼はある面では非常に宗教的な、純粹で敬虔な生き方をしてきたともとれるが、バイドンなんかで画かれているように靈魂不滅を本当に信じ追求していたかどうか疑問に思えるし、生徒にそういうとらえ方をさせることが当をえているかどうか……

B・C あれはプラトンの考えじゃないか。バイドンには問題がある。

F ソクラテスについて、二つの解釈があることは何かの本にもでていたが、私なんか「産婆術」というもの、生命・靈魂を含め何かを産み出していく、そういう意味でとらえ敷衍していくと、何か不滅的なものがあるように思えてくる……

C・D 科学的社会主義だって、ある面では宗教であり、理論を実践しようとしている点で知行合一を図っているといえなくもない。信念と狂信のところでは問題はでてくるが……

A 釈迦はガヤーで五蘊は無常であるから無我であると説いた。つまりそれは永遠不滅の自我の実体としてのアートマン（我）は存在しないということで、ウパニシャッド以来の伝統を否定したところに意味があると思う。そしてアートマンを否定したということは靈魂不滅説を否定したということだと思ひ、どうもそういう仏教的理解を本にして考えるせいかわソクラテスも不滅を信じなかったように思えてくる……

司会 この辺が意見の分れるところで、彼をどう評価するかの分岐点になるところだが、これはお互の人生経験・人生観を基盤にしているから

そう簡単に一致点は見出せないなあ……

- C ちょっと感じたことだけど、孔子のいう忠、心の真中からでてきた行動、誠ともいえようが、周辺の自己を否定し真中の自己・本質的な自己を生かそうとするのと、ソクラテスの生き方と一脈通じるものがあるんでは……
- D 産婆術を説いたソクラテスにせよ孔子にせよ、人間に対する洞察力のすごく深い人だと思う。そして道徳の世界にいのちをかけた点でも、孔子と彼はすごく似ている。中国人が倫理的・現実的なのはこの世への関心、執着が深かったわけだし、不毛の地に生きたユダヤ人が現実より永遠を求めたのはしょうがなかったと思う。そういう意味でソクラテスは不滅も考えたろうし、この世にすごくかけたし、アテネを愛したし、その中で青年を教育しようとしたし、道徳的生き方をしたという点で孔子と共に大きな金字塔を打建てた人だといえるでしょうね。

司会 ではこの辺で……。

(まとめ) 当初、第2分科会ではソクラテスの他、他の源流思想家についても検討したい心づもりだったが、結果的にはソクラテスの検討だけで終了し、なお足りぬ位だった。この勉強会が授業の教材化にすぐ役立つかどうかは意見の別れるところとしても、各自学ぶことの必要さと楽しさを痛感したことは事実だった。われわれとしてはこの勉強会が今後の授業展開の上になんらかの形でプラスになることを信じかつ期待したい。

そして分科会の研究活動が、新人の先生も継続の先生も一体となって、年々爽りのある勉強会・読書会となってきていることを喜びたい。

おわりに分科会に出席していただいた先生方に、世話人として深く敬意と謝意を表する次第です。

(世話人 葦名・浅香)

「ソクラテス」についてのアンケート

第2分科会世話人

第2分科会では今年度「ソクラテス」を中心に勉強会を開いてきたが、先生方が平生授業でソクラテスをどのように扱っておられるか、第2分科会に所属しておられる先生方にアンケートを送り、返答を寄せていた。勿論先生方が授業をどう進められるか、の授業方法はそれぞれの先生と生徒との相関関係において、独自の雰囲気の中で展開されるものであり、そこにそれぞれの工夫努力があることは十分承知している。従って簡単なアンケートに答えていただくだけで、先生方のご苦心が十分証明されるとは思っていない。しかし先生方が虚心に、その一部を出し合っていたことが、今後益するところがあると信じ、のせてもらうこととした。座談会とあわせて先生方の意のあるところを汲んで戴ければ幸いである。アンケートを寄せて戴いた方は13名、その中にはアンケートをふくらませた形で研究レポートにまとめて下さった方が4名あり、その他源流思想家についての研究レポートをお寄せ下さった方が4名おられる。例年のことであるとはいえ、暮れから正月にかけての休みに、アンケートなりレポートづくりに追われ、苦心される先生方のことを思うと頭の下る思いがする。世話人一同拙ない運営を心からお詫びすると共に、先生方に衷心より敬意と感謝の意を捧げる次第です。アンケート内容は以下の通り。

- [A] ソクラテスを学習させるに当って、どういう点を特に学ばせたいとお考えですか
- [B] その際、どんな参考資料をお使いですか(できるだけ具体的に)
- [C] 生徒にソクラテスを学ばせる意義・意味をどうお考えですか
- [D] 生徒のソクラテスを学んだ際の反応・感想はどのようなものでしょうか
- [E] 先生ご自身はソクラテスについてどうお考えですか
- [F] その他、特に感じられている点について。(以下到着順に掲載)

- [A] 「生きる」ことをどう考えるか。
- [B] ・資料集(「クリトン」と「弁明」の引用のあるもの)
・中央公論社の全集から
・「ソクラテス」ゴットフリート・マルティン理想社

無知の知・愛知・対話・なぜ死を前に逃げなかったか

ソフィストの「人は万物の尺度」の尺度を私は知らない、その尺度が何であるか知らないことの自覚がある。

生きているかぎり、それが知りたくてたまらない(愛知)、ただ生きていくのではなく。

第一段階としてそのことを強調し、第二段階として対話の中から真理をさがす(プラトンの対話篇「リュシス」を部分的に使いながら、友情について、それは何かと話しあう)ことを学び、第三段階で、もし、ソクラテスが脱獄したとしたらという想定で、肯定できる根拠と否定できる根拠を出しながら話しあう。

- [C] 「知る」ことは人間の基本的なものだとわからせる。哲学は誰かえらい人がやることではなく、もっとも自分自身とかがわりのあることだとわからせる。この二つにとって一番いいのがソクラテスだと思う。
- [D] 「ただ生きるのではなく、よく生きる」のが、ひとりひとりの人間の問題なのだとわかる。「知る」ことに興味をもつ。以上が全般にわたる受けとめ方だが、中には、哲学とは、ひねくれ者をうみ出す学問だととらえた女子もいる。
- [E] ふれるたびに、問題が、私個人とかかわってきて、にっちもさっちもゆかなくなるこわい存在です。

- [A] ①・何が真であり、真でないか、何を知らぬかを知ること — 「無智の知」と批判の精神とが吟味活動の根底にあること。②・①の根拠に基く健全な知を求める筋制が「対話」の精神であること。③・「徳」の根拠である魂の知識問題としての追求。 — 「弁明」の中のダイモニオン。④・打算的利己的に流れる現代の傾向に対して「ソクラテスの死」を手がかりに、「正義」とは何か。真の「勇気」とは何か。 — 「知行一致」を考える。
- [B] 『生活の世界歴史3、ポリスの市民生活』太田秀通 河出書房新社 — ポリス市民の日常生活一般を知ること、ソクラテスの思想を学ぶ動機づけとしても必要である。『ソクラテスの死』山本光雄 角川新書、『ソクラテス』人と思想、中野幸次 清水書院 この二著のいずれかをテキストとして選定し、問題点、疑問点を挙げて話しあう。『考えるよろこび』江藤淳 講談社 上記[A]④の内容展開における、対比の傍用資料として引用する。 — 上院議員エドモンド・G・ロスの話 — J・F・ケネディ「勇気の横顔」より —
- [C] 人間は動物と違って理性をもつ存在であること、人間らしい生き方とは理性をもつものらしく生きることであること。とくに、それはソクラテスの人格性における理論と実践との、ロゴスとパトスとの類まれな統一に求められなくてはならない。
- [D] 「ソクラテスの死」に対する考え方が納得できない — 己れが正義と信ずる、その確信の絶対性が何によって保証せられるであろうかという点。
- [E] ソクラテス流に言えば、歴史的に真実であると確言しうるソクラテスについては、われわれはなにも知らないということだけを知っている、ということになる。ソクラテスについて解説された、さまざまな著作内容の把握ですらも浅学で一知半解を免れない。しかし、ソクラ

テスの偉大な足跡をひたすら追求し続けて、たんなる知識でなく、あくまで知的誠実をつくすという態度をもって生きる、本来の自己自身の在り方を自問自答していきたい。

府中工高 関根荒正

[A] ソクラテスの学習にあたって、力点は次の3点におきました。

- (1) 「無知の知」 — すべての知の出発点であり、生きる上での謙虚な態度であることを示すと共に、この中に絶対性を獲得出来る方向があることを打ち出す。
- (2) 「知行合一」 — 知恵と知識のちがいを例示しながら、実践と思索の統一がいかに重要であることを示す。
- (3) 「ソクラテスの死」 — ソクラテスが脱獄したり、剣をもって立ち上ったりするのが客体的にみて正当でありながら、それをすてて毒杯を飲んだ理由と態度に焦点をあてる。

[B] ○ 「ソクラテスの弁明」 — 6. (講談社文庫版 P 17 ~ 18)

※ 「では、それらの事を何のためにわたしが言ったのかを考察したまえ……そして、其処でもまたかの人にも他の人にも嫌われることになった」

「無知の知」の資料として

- 「ソクラテスの弁明」 — 33 (P 67 ~ 68)
 - 「パイドン」 — 66 (P 249 ~ 251)
- } ソクラテスの死の資料として

[C] 意味については、ソクラテスの考えと、それと不可分の生きざまに関係したものとの二つがあると思う。前者については、2千年以上も前に、物事を、しかも生きる上での本質を追求する方法を現在よりも鋭く出していることを知らせること、後者については、とかく近代

的人間は知と生が分離し、それをあたりまえとする傾向があるが、思索と実践を統一するという自己存在の当為性を知らせること、そうしたことがソクラテスを生徒に教える視角だと考える。

- [D] ○生徒に導入のためソクラテスについて何か知っているかという質問を行ってみると、望外にも顔・名前・死の方について知っている者が多く、「無知の知」「ソクラテスの死」についてよく聞いていたと思う。

○レポートより生徒の感想を分析してみると、先ず、彼の死について、確かに立派であるという意見が多いが、自分(生徒)としては生きて自己主張を最後まで通す方法を考えると答えたものが多い。考え方については、「無知の知」を説明させてみると、例は上げられるが、生き方の問題としてとらえてくれたものは残念ながらわずかでした。

(私の力量不足)

- [E] [F] 新任として初めて倫社をもったものですが、古代ギリシア思想の学習を9時間かけてソクラテスに焦点をあててみたものの、通り相場のように一般的なことに流れてしまった感じがしてならない。精進不足であり、諸先生方の御教示をこいたいと願っております。

葛飾野高 吉沢正晶

- [A] 無知の知、魂の世話、問答法の三点に力点をおく。ソクラテスの死の問題は軽々に取り扱くと誤解を招きやすい。問題として残し、継続的に考えさせるようにした方がよい。
- [B] 『ソクラテスの弁明』岩波文庫本 P20f(六)、P35f(十七)、P41f(十九)、P53f(二十九)、(三十)、(三十二)、(三十三)等を[A]の各項に応ずる部分としての文献資料とする。その他『クリトン』から。
- [C] ソクラテスは何を求めたかということ、そこに人生の基本的問題が

示唆されている点を学ばせたい。「単に生きるのではなく、善く生きること」という点。魂のはたらきをすぐれさせることという辺りに気づかせ、「徳」に関心をもたせるようにしたい。

[D] 生徒の小論の一例(部分)「つまりソクラテスはことばというものを大切にしたということです。だから『問答法』ということばのキャッチボールのような形態をとったのだと思う。そして多くの自分では知者だと思っているような人が本当はそうではないと知った時、はっきり真実を伝えなかったのだらう。そういう点から考えられるのは、ソクラテスは偽りが嫌いで、常に真実を求めていたのだらう。…ソクラテスが死から逃げなかったのは、やはり『神霊の声』を信じていたからだらうということと、『不死の魂』ということだと思えます。そしてまだはっきりわかったわけではありませんが、一つ一つ納得のいく点ができました。」

[E] [F] 「子は怪力乱神を語らず」といわれ、「いまだよく人に事^{つか}ふる能はず、焉^{なほ}そ鬼に事へん。…いまだ生を知らず、焉^{なほ}そ死を知らん。」
「鬼神を敬してこれを遠ざく、知といふべし。」
「人を愛す。…人を知る。」という孔子が合理主義的で、また知と情との総合的人格が思われるところに比して、ソクラテスの主知的なところとまた神秘性、宗教性が思われる。「われ知あらんや、無知なり。」
「知るを知るとなし、知らざるを知らずとなす。これ知なり。」に孔子の『無知の知』がうかがえる。など、孔子とソクラテスの比較研究に発明するところがあり得る。

府中高 永上 肆朗

[A] ・ソクラテスの実存。祖国アテナイの危急存亡にあたり、眠れる市民に対して真に生きるとは何かを説き、自らも権力に屈することなく崇高な真理に生きた旺盛な哲学的精神を学びとらせる。

・人間のヒュブリス。「無知の知」を通して人間や自己の傲慢さに気づかせ、(理性の狡智)人間が自らの力を過信して溺れることのないように、おのれに忠実に生きることの大切さを考えてみたい。

・ソクラテスの死。ソクラテスにとって死は何を意味するかについてふれる。古代人の死生観の一端にふれ、クリトンとの対話を通じて考えさせ、Nomos(ロゴス)の内面化、絶対化、神聖化こそが至上命題であること。

- [C] (1) 『弁明』を思想または人生の書との最初の出会いとすることにより、以後の展開における補足引用にも役立つ。
- (2) 古典成立の背景をしらべることにより、世界史などに関連づけられる。
- (3) ソクラテスの対話を吟味することにより、論理的な考え方や、教育の方法や原理を知る。
- (4) 具体的な現実認識や実践と理想主義的なものとのからまり具合をまとめ、世界観への開示に役立つ。(プラトンとアリストテレスなど)
- (5) 大衆にこびることなく真理に生きたソクラテスの勇気を考えさせたい。

[D] <ソクラテスから何を学ぶか>

ソクラテスはまず自分に対していちばんきびしかったからこそ他人に対しても自分の意見が堂々と言えたと思う。今の私たちは自分に負けています。自分に対してきびしくあるということは、いつも自分の真実を極限まで追求するということで妥協はゆるされません。ソクラテスは大衆の目を気にしません。これは現在の私達にはなかなかできません。いつもなんとなく多数にまけて自分では何も考えない人間が多い。現在の三無主義的な社会では、それがあたりまえのことになっているが、それではいけないのです。いつも前向きな姿勢で物事にと。

りくみ、正しいこと、正しくないことをはっきりと見分けられる目を持ち、それを自分の意見として発表できなければいけないと思うのです。……（2女）

志村高 木村正雄

- [A] 無知の知、問答法、福德知の一致、国家と個人のあり方
- [B] 録音教材、NHK「人間とは何か」の「ソクラテスの弁明」抜萃、デルフォイの神託、知行合一「ゴルギアス」、個人と国家「クリトン」
- [C] 知への愛、学問への謙虚さ、福德知の一致の意味、個人と国家との関係を考えさせる。
- [D] 「無知の知」に関心をもち、謙虚さが目立った。
「福德知の一致」は理解するが、賛成しかねる者が多い。
死刑になるよりも、もっとたたかうべきではなかったか。賛成する生徒は少ない。
- [E] 観念論だといってしまうばそれまでであるが、思考方法など参考にするべき点が多い。
- [F] 時代的な側面と普遍的な側面をわけてとらえるべきではないか。

駒場高 細谷 斉

- [A] 自然哲学者からソフィストを経てソクラテス・プラトンへと続いて行く古代ギリシャの哲学思想の展開の中で、フィロンフィア（愛知）の精神がいかに自覚され高められていったのかを、ソクラテスを中心に理解させる。すなわち、人間の有限性の自覚に立ち、無知の知の立場から真知を愛求し、そのために生命をかけたソクラテスの思想と行動をラジカルにとらえさせ、倫理や道德の立脚点を考えさせたいと思っている。
- [B] ソクラテスの学習においては、特別に「弁明」を全員に持たせるよ

うにしている。これは参考資料ではなくテキストそのものとして使う。

「弁明」以外では、ソクラテスの人と思想を知る参考書として、田中美知太郎「ソクラテス」(岩波新書)、村井実「ソクラテス」(牧書店)、ロコロ叢書「ソクラテス」(理想社)のうちいずれか一冊を読むように勧めている。「弁明」の英訳を合わせて読むのも勉強になると思うので紹介している。ペンギン叢書の「THE LAST DAYS OF SOCRATES」や、エグリマンズ・ライブラリーの「THE TRIAL AND DEATH OF SOCRATES」など手に入り易い。後者の方がよい。研究社から「ソクラテス」という小さなテキストも出ている。

- [C] ソクラテスに限らず、思想の源流に登場する先哲達こそ、人類の思想・文化の根幹を作りあげた人々といえる。時代は古く遠いし、その思想も現代的感覚からはすべてわかり易いものではないが、私は倫理社会のような授業の中心は彼等に置かれなければならぬと思っている。
- [D] 私のこれまでの乏しい経験から言うならば、生徒の大多数にとっては、ソクラテスに限らず先哲と呼ばれる人々は縁の遠い人々と映るようである。それでも、仏陀やイエスのような宗教家のイメージがないので、この点親しみ易さを感じる者もある。とにかく、古い先哲を今日の高校生の精神の糧となるように指導することは難事である。
- [E] ソクラテスの「愛知の精神」に心ひかれている。
- [F] 毎年「弁明」を扱っているが、指導内容や方法についてはますますむずかしさを感じている。

葛飾商 浅香育弘

- [A] ① ソクラテスの「無知の知」(愛知・問答法)とは?
② ソクラテスの幸福観(知徳合一、知行合一、福德一致)とは?
③ 彼の死(生き方)について、ソクラテスについてどう思うか?

[B] ① 「ソクラテスの弁明」 21 d・29 d・30 a (中央公論社、
世界の名著)

② 同上 29 e・30 b・38 a、「パイドン」69 a・b・c

③ 同上 29 a・30 e・40 a~c。「クリトン」46b・48b

[C] 自己の無知(人間の本质一徳に無知であること)に気づかせる。

愛知一「学ぶ」ことの意義や大事さに気づかせる。

自分たちの幸福観とソクラテスのそれとどう違うか考えさせる。

アテネの腐敗した民主政治、民衆の無知に気づかせようとして破れた
彼の悲劇に気づかせる。

たと生きるのではなく、よりよく生きることを求めさせる。

[D] 正しい判断に基づいて正しい行動(知行合一)ができればすばらし
い幸福だとはわかるが、それが自己の無知に気づき、問答し哲学して
いくことによって可能だろうか、また彼は亡命し所信を貫く態度に出
てもよかったのではと疑問視する生徒も一方にいた。(国法とダイモ
ンとの関係がつかみにくいようだ)

しかし自己の無知に気づき、真の人間のあり方(アレテ)を求め続け、
よりよく生きようとして死に臨んでも信念を曲げず、終始一貫した態
度はりっぱであると感じる生徒が多かった。

二説ある「ソクラテスの妻」についても女生徒達は興味をもった。

[E] 無知に気づき生涯アレテを求め続けた点や、死を前にしてよりよ
く生きようとし、信念を曲げなかった点りっぱだと思うが、他方饒舌、
強舌、アイロニーを駆使し挑戦した?点(問答法)でソフィスト哲学
の継承者ではなかったとも思われ、今だにもってわからぬ人物です。

市ヶ谷商高 葦名次夫

[B・E・Fについて] — 「ソクラテスを教える」よりも、ソクラテス
に「生きている精神」、ソクラテスたらしめている「根源的事実とし

ての経験と感覚(森有正)」を、少しでも生徒が感得してくれればと願う。故に、必ずしも、弁明等の原典資料や、哲学的概念を用いずとも、よいのではないか。いや、むしろ、以上の「精神」を、実感体得せしめ、考えさせてゆく適切で豊かないきいきとした具体例・比喩を、身近な日常生活の中から集大成、精選して授業展開をしてゆくことも、困難だが、大切でなかろうか。その意味では、例えば、山本七平、梅原猛、なだいなだ諸氏の著書に示された精神態度もよき「参考資料」となると思われる。

[A・Cについて] — ① まず、「考え、思索し、知的に探究することのおもしろさ、楽しさ」「未知なる真理を求めていくイキイキ高揚した精神、ウキウキとした快活なる認識の魅力と素晴らしさ」

② 具体的には、「会話の楽しさ」「対話・討論・問答のおもしろさ」「ことは、論理を駆使する愉快さ」「知的団らん、饗宴のよさ」……それを実感し、日常の生活に経験として取り入れ、生かしていくこと。そして、そのわざと力の養成。

③ さらに、⁴¹⁷「ふだんの生活の中で、無意識的になじみ、当然、自明のこととして疑わず、習慣や惰性の中に埋没している行動の一つ一つの意味や根拠を、自ら問い考えていく、自己の対象化による自覚化」ひいては、「ムード、ふんいき、周囲の空気と大勢に流されない、合理的で自律した判断力の養成」「権威に惑わされ屈しない毅然とした精神的態度の形成」

④ その意味で、我々を、生かし、促し、突き動かしている「なにものか」(人間が信念、使命、良心、情熱、信仰と呼んできた人間的真理の確かな存在)を、つかみ志向していくこと、等があげられようか。

そして、以上の諸点をねらいとしつつ、あくまでも、現実の授業の場で、具体的・实际的に展開してゆける素材、事例、比喩、語りの

開発と集大成が私の課題であり、それが活かされたいきいきした授業が私の願いである。

鷺宮高 佐々木 誠 明

[A] ソクラテスを学習させる場合のポイント

ソクラテスは「愛知者」として哲学思想の源流に位置する人物である。したがって、かれの思想はすべて大事にとり扱われなくてはならない。だが、あえて重点をおく部分を拾いだせといわれるならば、「よく生きる」とはどういうことなのかを生徒各自に考えさせる点があると答えたいと思う。

いうまでもなく、「よく生きる」ということを真剣に考えるためには、現在の自己、すなわち「ただ生きている」のみの自己に対する痛切な自覚と反省が必要となる。「ただ生きる」とはどんな状態なのか、そしてこれに対して、「よく生きる」とはどのような態度をさすのか。私はそれを「ソクラテスの弁明」、「クリトン」の引用を通して生徒とともに考えていくことが重要であると考えます。

[B] 引用する参考資料

じっさいには、「無知の知」を開示された神託の箇所なども真先に引用し、「立派で善いこと」とは何を意味するのかなど設問をまじえて展開するわけであるが、今は割愛する。

そこで [A] に即して一つあげておく。角川版「弁明」の75頁7行目～76頁16行目の有名な部分を引用して、ソクラテスがここで金銭・評判・栄誉・身体などのことと、英知・真理・魂のこととを区別している意味について深く考えさせる。他はここでは省略する。

[C] ソクラテス学習の意義

現代社会には多様な価値観が渦まいている。一つの価値観の絶対化はたしかに危険であり、また誤まりでもあろう。だが、価値観の相対

11
は社会に多大な混乱を招来しているのも事実である。ここで考えられることは、そのような多様の価値観にもかかわらず、いな、そうであるからこそかえって、それらをおおって基底ともなるべき一つの共通した人間のありようともいえる普遍的な真理が必要なのではないかということである。必要というより、むしろそれは必然に存在するはずであるというべきであろう。

ソクラテスが求めたものはじつにこの真理だった。しかし、彼は必ずしもそれを明確には示さなかった。各人が自ら産みの苦しみを経ながら求めるべきものと考えたからであろう。そこに重要な示唆があると私は思う。私は、生徒各自が未来にわたってそれを追求していく道程に人生の筋道がよこたわるものと考えたいのである。結論は早急に求むべきものではないのだ。

[D] 生徒の反応

「"たんに生きることではなく、よく生きることが大切だ"といったソクラテスに対して、私を含めてほとんどの人がこう感じるのではないかと思う。現に私は、毎日毎日の単調な生活を脱皮し、よりよく生きたいと思っているのである。それでは「よりよく生きる」というのはどういうことなのか……………」

現在の世の中でいうと金銭や名誉をなによりも求めている。きっと誰でもそうである。そしてまた、いくらそれがあってもそれだけで真の幸福がつかめないということも知っている。それが何かのはずみで、一時的快樂などによって精進を忘れてしまう。また、自分の年来の希望・理想も、ある一つの失敗により簡単に妥協してしまう。失敗してそのままズルズル墮落していった人は世の中がまっ暗になり、自分自身にもいや気がさし、ついには悪の世界にも入りかねなくなってしまふ。やはり、たんに生きるだけではダメなのである。自分を自覚し、反省し、しっかりとよりよく生きなければならないのだ……………」

(2年6組 石川由美子)

この生徒作文にもみられるように、ソクラテスから自己への反省の必要を学びとった生徒でも、「よく生きる」という意味を、ただ単に「よりよく生きること」というふうにとらえている。これでは、普遍的な人間の生き方の探究というソクラテスの真意に反している。私の教え方が拙いことを改めて反省させられながら、授業のむずかしさをしみじみ感じている。

[E] ソクラテスについての私の考え

私は、若い時、法廷でのソクラテスの勇氣に感動したことをありありと思い出すことができる。彼がひたすらに真理を求め続け、それを青年にも鼓吹した生涯に私は感銘をうけ、私の青年時代を多少なりともそれにあやかって過そうとしたのであった。

私はいま、ソクラテスが普遍的な人間の生き方を求めるために、魂への配慮を重要視したことを素直にうけ従うものである。ただここで、魂をすぐれたものにするには、具体的にどうすればいいのかという手だてになると、やはり私には疑問が残るのである。外的な事物に惑わされることなく、精神を立派ですぐれたものにする、まことに重要なことだと思ふ。だが、己れの理性の限界内で、はたしてそれは可能なのだろうか。私は、人間の心奥深く住むデモーニッシュな力に辟易せざるをえないのだ。むしろ、人間に共通していえることは、「弱い」ということではなからうか。たしかに、世の中には強さを自認する人がいる。だが、そこに人間「弱さ」があるといえないか。

もう一つ留意すべき点がある。それはソクラテスが国法に従って刑死したことについて、これを直ちに国法遵守の教育に用いてはならないということである。たとえば、先日の公労協のスト権ストの場合、中曾根自民党幹事長はソクラテスを引きあいにして、「悪法も法なり」ということばを引用して遵法の重要性を説いている。私はこれは

まちがっていると思う。せっかく倫理・社会でソクラテスに学ぶべきものを考えさせようとしても、世の風潮がそれを妨げていく。私はここでスト権について意見をいおうとしているのではない。そうではなく、法の尊重というきわめて今日的な課題に即して、ソクラテスを誤用してもらっては困ると言いたいのである。

なるほど今日の社会は法治主義によってその秩序を維持しており、法は一般に正義の表現であると考えられている。正義の理念そのものは抽象的であるけれども、その具体的内容は時代的制約の中で、その時の法律に具現されているものといえよう。法なくしては破壊と混乱あるのみであるから、遵法は国民の義務として尊重されるべきである。しかし、さらに考慮してみると、具体的な法ははたして正義の表現であるといつもいえるのであろうか。衆知のように、今日法律は、国会における多数党の力でつくられる場合が少なくはない。しかも、党利党略の立場から法律案は提出され、少数党の反対意見は強引に無視されることが、いかにしばしばあることか。そうして制定された法律が、特定層の利益に奉仕するものであり、大衆に犠牲を強いるものである時、遵法の美德の強調は結果的に何に利するものであるか、いわずして明白であらう。「悪法も法である」ということばがたしかにあるが、よくよく吟味してみなければなるまい。少なくともこれをソクラテスに結びつけることはしたくないものである。

あえて私がこのことを書き添えた所以はなにか。かつての日の生徒がいちようにソクラテスを断面拒否していたことがある。その原因を調べてみると、なんのことはない、世界史の授業で、ソクラテスは「悪法も法なり」と宣言して死んだ哲学者であると教えられていたのだ。ソクラテスがこのように述べたというたしかな証拠もないのに、一面的にこう教えられ、それ以外のソクラテスの真意はかすみのようにぼんやりとしか生徒には伝わっていないのだ。

ソクラテスほどに誰でも知っている哲人になると、他からの知識の
摂取も行なわれやすい。それだけに、ソクラテスにとりくむ時は、じ
っくりと時間をかけて行なわれなければならないと、それ以来私は思
うようになったのである。

江北高 宮崎 宏 一

- [A] ① まず、ソクラテスとソフィストとの違いがどこにあるかを理解
させたい。つまり人間がよりよく生きるための普遍的で、客観的なも
のとしての道徳を追求したソクラテスと処世術や相対的道徳を重視し
たソフィストとの相違点を学ばせる。
- ② ソクラテスは何を自己の使命として生きていたのか、また祖国
アテナイに対して、どのような愛情をもっていたのかを理解させたい。
広い意味で教育していった方法が問答法（産婆術）であり、それによ
って相手に無知の知を自覚させ、そして正しい知識、真の知識への関
心をよびおこさせ、墮眠をむさぼるアテナイの市民たちに人間の本性
は、自己を知るという理性の作用にあるとし、「なんじ自身を知れ」
ということをも人生の本来の課題であるとしたソクラテスの思想を学ば
せたい。
- ③ 「ソクラテスの死」の意味は何かを生徒にじっくり考えさせたい。
- ④ その他、いくつかのエピソードを通して人間ソクラテスを、現
代に生きる高校生の身近かな問題と比較させながら、理解してゆく。
- [B] ① 高校2年で使用している「世界史」の教科書。（特にギリシア
の思想の歴史的背景を理解させるのによい。）
- ② ソクラテスの胸像（石膏）や古代ギリシアの写真や絵画を見せ
導入する。
- ③ 潜水書院人と思想「ソクラテス」・「プラトン」

④ 中央公論社・世界の名著「プラトンⅠ」ソクラテスの弁明（P 419上～P 422上、P 434下～P 436上）

⑤ 角川文庫・プラトン「クリトン」山本光雄訳（P 121 14行～P 122 4行目）

⑥ 中公新書・藤井義夫著「ギリシアの古典 — よく生きるための知恵 —」ソクラテスの人間の形成（P 66～P 88）

④⑤⑥の箇所を抜粋したプリントを作成、そのほか「倫社資料集」を参考資料としている。

[C] 情報化社会の中で、生活している現代人がソクラテスの人物なり、思想なりを学ぶことは、非常に意義のあることだと思う。対話や会話を重んじ、自分の言葉をもって、自己を主張しようとする弁証法の方法こそ、哲学（学問）の出発点であると思う。ソクラテスの「よりよく生きるとは何か」の生き方を、生徒自らの問題としてとらえさせ、自己自身をみつめる、また人生を考える絶好な機会であると思う。

[D] 「無知の知」の自覚を中心とする彼の思想については、なんとか理解できてきているようであるが、なんといっても「ソクラテスの死」について、どうも納得できないという生徒が多いようである。ポリスの法を尊重しなければならないといって、親友クリトンの脱獄、逃走のすすめも断って、平然と毒杯を仰いだ理由説明がもっとほしいというのである。単に正義と勇気の実践であるとか、ポリテースとしてポリスの義務に殉じたわけであるといったところで、まったく理解されないのである。そんなときは『クリトン』の一部を朗読してやったり、抜粋して説明してみることにしている。『ソクラテスの弁明』をグループ研究活動の中で読んだ班は大変喜んで、ソクラテスの思想を積極的に学ぼうとする姿勢がみられた。やはり原典にふれるということは、効果があるといってよいのではないだろうか。

[E] この分科会に参加したことで、大変勉強になったし、再びソクラテ

スに関する著者に深く接することができたことに感謝している。

とにかく哲学(学問)の道は、ソクラテスを源とするといつてもよいのではないだろうか。人間そのものの問題、人間の生き方の問題、真の自己のあり方の根本原理などを彼から学びとり、人間の本性である理性のはたらきにより知恵をもつことを、人間の理想的な生き方としたギリシア思想のおもしろさに、感動をおぼえずにはいられない。できることなら『饗宴』風景にみられるような、大哲人ソクラテスを中心にして、適度の酒を飲みながら、音楽や女性は適当な頃に去ってもらい、お互いに夜の更けるまで膝をまじえて語り合っていたいものである。夢のようなことを書いてしまったが、どうも最近マス・メディアの虜になってしまったようで、これはなんとかせねばならないという気持ちでいっぱいである。現代版の対話篇を生みだしたいほどである。

[F] どうしても、現在「倫・社」の教科書ではギリシア思想史の概論的説明が不十分であると思うので、できることなら歴史的、時代的背景と合せて、高校生にも理解できるような、平明化がほどこされてもいいのではないだろうか。

上野高 海野省治

[A] ソクラテス学習のポイント

- 人物像、家族、時代のクローズアップ
- 国法と市民の間の契約関係、市民の権利、政治と市民の関係という点を特に明らかにする。

[B] 参考資料

やはりプラトンの「弁明、クリトン」クセノフォンの「メモラピリヤ」それに今年度は毎日新聞の「昭和の群像」164～166回。

「昭和の群像」は新聞のコピーをとって全員に配布、ソクラテス説明

後読ませて感想を書かせた。今年度は思想と現代の関係を常に考えさせようと思っていたので丁度良い材料であった。

[C] 学ばせる意義

日常性に埋没しがちな我々を"はっ"とさせる生き方もある、死をいわず、一生懸命生きる生き方をした人間がいたことを理解させる。但しこのことにはむずかしさがつきまとうので、その人間の考え方を十分検討し、理解させることが必要である。

[D] 生徒の反応

これは研究のところで述べたが、賛否両論がある。でも、それぞれなりにかなりまともに受けとめ、考える作業はしていた。

[E]・[F] 私の考え、他

ソクラテスは、生きることに徹したという点で、尊敬に足る人物だと思っている。画家の岡本太郎氏は、テレビの番組で、自分は、いつも、死というもの、困難さに向かいつつ芸術活動をしていると語っていた。棟方志好氏も、同じような考えがあったものと思う。常に全力投球で、今の自分の力を十分発揮しつつ生きている人の美しさを、やはり生徒にもわからせたいと思う。芸術家の生き方という点からアプローチしていくのも一つの方法といえるのではないかと思う。

攻玉社高 内田君夫

[A] 1. 無知の知

ソフィストの相対知に対して、ソクラテスの絶対知 — 真の知 — 探究の意味を知らせる。真の知に関する無知を自覚することが、その出発点たることを、ソクラテスが問答法を用いて探究したことの説明。その態度の真剣さ、謙虚さを見る。

2. アレテー(徳)

真の知の対象である徳とは何か。人間の一番大切なものとして、魂

への配慮をとく。こゝからソクラテスが生きがいと考えた "よく生きる" ことの意味を考えさせる。

3. ソクラテスの死

"ただ生きるのではなく、よく生きる" ことを、"たとえ、何度殺されても、これ以外の事はしない" という信念の実行という面で、ソクラテスの人間としての偉大さを、この知徳合一の点で強調。

[B] 1. 自然哲学とソフィストの思想の発展としてソクラテスの思想を要約し図式化してプリント。

2. NHKラジオ「人間とは何か」シリーズ「ソクラテスの死」(市民としての人間)山本光雄氏解説の録音テープを使用。

3. 「ソクラテスの弁明」のうち、魂への配慮をといた箇所(17 d・e)をプリント。

[C] 人生の意味を、"よく" 生きるという点で、自分で考える出発点とさせる。

[D] 自分とは、直接関係のない遙か過去の人物として、ただ、あゝそうかというような受け方をするものが気になる。

「ソクラテスの弁明」の学習方法について

都立駒場高等学校 細谷 斉

1. はじめに 倫理社会の授業は、生徒の日常的な思考を訓練し、自己自身のあり方を考えさせるきっかけとなるものでなくてはいけないといわれる。知識を与えることも大切であるが、より以上に生徒の意識を刺戟し、自己自身並びに自己をとりまく世界を深く考えるように意欲を喚起することが重要であるとされる。これはもっともな言い方だと私には思われる。それでは、生徒に考えさせる授業とはどんなものかということが私の課題になる。例えば、私が古代ギリシヤの哲学者の名前や思想を次々に説明する（講義する）のは、ギリシヤの思想を教えていることにはなるが、考えさせていることにはあまりならないであろう。勿論、新しい知識を知ることは思考するための第一歩であるから、「考える」という働きと矛盾するわけではなく、それに合っていることではあるが、「考える」ということには「自ら」という主体性が特に要求されるとするならば、人の話を慢然と受動的に聞くだけでは「考える」ということにはあまりならないだろうということである。このように考えるならば、倫社の授業に於ては、生徒に対し、何らかの具体的な問題を投げかけ、彼等がそれに対して共感や反撥などの意識を抱きながら真剣にその意味や状況を考えるということが求められてくると思う。このことはわかりぎったことであり、また言うは易く行うは難いことであるが、私はこのような考えのもとに、ギリシヤ及びソクラテスを授業するに際しては「弁明」を各自に持たせ、その内容を読み検討するという方法をとっている。私は48年度の本紀要に「弁明」の原典学習について書いたことがあったが、その後数年間の授業の中で考えたことなどをふまえて、今回同じテーマをとりあげてみたいと思う。

2. 「弁明」の読ませ方

「弁明」を読むに先立ち、章ごとの問題点やポイントを指摘したプリン

トを渡し、自己学習をするように指示しておいた。授業は章ごとにあらかじめ伝えてある設問を考えることを中心に読み進めていった。以下いくつかの点について書くことにする。(詳細は省略)

第1章(ステパヌス版の番号17A-18A)第1章では、雄弁家の意味について論じている。設問:何故雄弁家であることが問題になるのか。

第2章(18A-19A) ソクラテスに対する旧・新二つの弾劾と弾劾者について論じている。

第3章(19A-19D) 旧くからの訴状の内容について、設問:いかなる理由をあげているか。

第4章(19D-200) 承前、設問:ソクラテスの言い分はいかなるものか。

第5章(200-21A) ソクラテスは自分の名声と中傷の原因について述べる。ソクラテスは次のように言う。「自分が名声を博し、悪評をたてられた理由は、一種の知慧がある為で、その知慧は一種の人間的知慧であろう」と。この言葉は弁明全体の中で最も大切な言葉の一つではないかと思う。人間的知慧と岩波文庫版では訳されている言葉は、*ανθρωπινη σοφία* '人間に許された智慧'の意味であろう(田中美知太郎)といわれるが、英訳ではHuman Wisdomと訳されている。設問:この人間的知慧とは何か、ソクラテスは自分には他の人にはない知慧があるといっているわけであるが、どういうことか。第5章から第9章までは一連の話として読むべきであろう。

第6章(21B-21E) デルフオイの神託とよばれるものについて述べられる。設問:この神託からソクラテスが気がついたことは何か。

第7・8・9章(22A-230) ソクラテスが神託の真意を探究していく。この過程の中で、神託の真意、ソクラテスの知慧の内容が明らかにされていく。設問:政治家・詩人・職人と対話して、ソクラテスはそれぞれについてどのようなことを感じたか、そして何がわかったか。解説:例

えば詩人はインスピレーションで詩をつくる（詩人が詩作するのは智慧によるのではなくて、むしろ予言者や神巫のように、一種の自然的素質と神祕とによる一岩波文庫版第7章）というけれど、それは知慧とは違うというのであるが、この文章にしてもその意味を考えてみるとなかなか面白いと思う。即ち、詩人といっても一概には言えないが、詩人の才能というのは確かに一種の天才的な閃きとみなされるものが多いことは実際その通りであろう。頭が良い、才能がある、勉強がよく出来る、などという言葉は一種の魔力を持っていて、私達はこのような言い方に甚だしく弱い、実はそうではない、それは知慧とは違うぞ、とでもソクラテスは言うように解せられると思う。政治家にしても職人にしてもそれぞれが有する知慧の欠落をソクラテスは暴露し問いつめているわけだが、このあたりは現実の私達にも最も共通の課題となるであろう。以上のような読み方は時間的には甚だしく無駄で、一時間で一章を進めるかどうか位のスピードになってしまうが、私としてはやむを得ぬことと思っている。

以下、2・3設問を書くに留める。

第12章：ソクラテスの問答法（対話法）は後の弁証法のはじまりとされるが、その論理の特色は何か。

第15章：ソクラテスのダイモニア（神靈）とは何か（諫止の声→道徳的判断、行為の判断の根拠→今日で言う「良心」か）

第16章：現代社会における大衆の無知について例をあげてみよ。

第17章：ソクラテスの愛知の活動とは何か、ソクラテスは人はいかに生きよと説いているか。

8. まとめ 紙面の関係で中途半端な舌足らずの文に終り申し訳けないが、要するに、私としては、「考えさせる倫社」ということを授業のねらい、自己の課題としたい、そのための一方法として「弁明」をくわしく読んでいくということにすぎない。迷いは附れない。御教示を仰ぎたく思う。

ソクラテスにおける死

都立上野高等学校 海野省治

はじめに

ソクラテスは死んだ。毒杯を仰いで、友人の脱獄の勧めを拒否して。幼な子や妻を残して。何故一昭和22年、栄養失調で死んだ山口判事は、日記の中でこう書いている、「自分は平常、ソクラテスが悪法だと知りつつもその法律のためにいさぎよく刑に服した精神に敬服している。…」(毎日新聞「昭和の群像」より)一ソクラテスは悪法も法と考えて死刑の判決に従ったから。この解決を持ち出す人は今日でも多い。日本の過去においてもそうであった。このように日本人の中に定着?してしまっているソクラテスの法や死に対する考え方は妥当なものといえるかどうか。以下この点を中心に分析を加えてみようと思う。

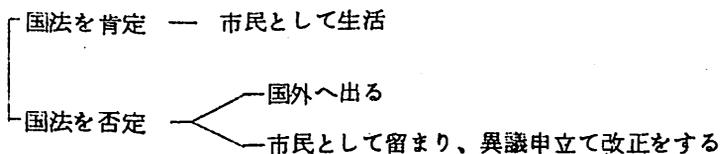
ソクラテスの考え方・行動

(a) 資料について 「ソクラテスの弁明・クリトン」は資料として最も良く使われている。このプラトンの著作は、ソクラテスの裁判における言動や、法及び国家についてのソクラテスの思想を良く伝えている。少なくとも我々は良く伝えていると信じている。プラトンはソクラテスの下にいた時代は確かにあるし、その場にいなければ書けない部分も多い。しかしプラトンは、劇作家としての道を志したこともあるし、プラトンがソクラテスを偶像化した部分が全くないとは言えないのではないか。そう考えると、文献として使う場合には、幾分かは割引きして読むことも必要な場合があるだろう。一例をあげれば「弁明」の岩波文庫版で(31)以後の死についてのソクラテスの考え方などは、検討の余地がある。このように我々としては、利用する際に、一応考慮の中に入れておく方がいいと思える。

(b) ソクラテスの国家及び国法に対する認識

国家や国法に対してのソクラテスの考えが良く示されているのは「クリトン」である。岩波版で(11)以後。そこでの考え方として(12)で、「祖国は神聖である。従っておよそ国家と祖国の命ずるところはこれに従がえ」と語っている。但しここで同時に「祖国が怒ったときには、これに素直に従うか宥めるようにすべし」という言葉が入っている。この宥めるという言葉は一つ重要なところである。又(13)で、国法のお陰でお前は存在しているのだが、もし国法がお前の意にかなわなければ、国外へ出ることが権利として認められていたという点が述べられ、更にそれにもかかわらず、ここに留まり、市民として生活することは、国法や国家を認めていることになる」と述べている。そしてこの次に有名な「三重の不在」という説明がつく。(14)でもソクラテスが国法や国家に満足している理由を述べている。こうした点から見ると、ソクラテスは、国法等に対してその神聖さを認めて、それに従うことは当然だとしていることがわかる。但し、盲信せよと述べているのではなく、主体的に従うという態度を打ち出しているといえる。というのは、一人前の判断力がついたときには、もし国法が気に入らなければ国外へ出ることが認められているし、留まっても「もし国法に間違った行いがあったときには説得によってこれを改めさせること」が市民には認められていたからである。このように自らの意志で国法を判定し、自分の去就を決定する権利は、市民の権利として確立していたといえる。

以上のことを図示すればこうなる。



国法に対する態度は大別してこの2つしかあり得ないとソクラテスは言う。中間的なあいまいな態度は、許されない。自分に国法が直接関与し、自己

に不利益となった時に、自分のしたいような行動をするという身勝手さは、ソクラテスは認めていない。法に対するこの認識は、日本人には残念ながら非常に欠けていると言わざるを得ない。しかし西洋人にとっては、こうした（暗黙の）契約関係は、当然のことであったといえる。古くはユダヤの契約関係がそうであり、現代のヨーロッパにおいてもそうしたことが言える。より平易に言えば、西洋においてはルールへの尊重、確立があり、日本の社会には、それが不足しているということである。だから普段は、まあ主義で、イザとなると規則一点張りになるのである。

今迄述べたようなソクラテスの法に対する観点から「悪法も法」という結論を導き出すことは極めて困難である。

(c) 法と不正

上記のような認識をソクラテスが持っていたことは、プラトンの著作から読みとることが出来るが、ソクラテスは、自分が不正を受けたということ、不当な扱いかいを受けて死刑の判決が下されたことは認めている。これは「クリトン」(15)あたりで言えることである。但しこの場合ソクラテスは、国法から受けたものとは言っていない。ここに又「悪法も法」を否定する材料がある。「弁明」においてソクラテスは、「アテナイ人諸君」と「裁判官諸君」とを使いわけた。この理由を改めて述べる必要はないだろう。この使いわけをした延長線上にあるものとして、「クリトン」(16)で、以下のような言葉が出てくる、「お前がこの世を去るなら、今ならお前は不正を — われわれ国法からというよりも、人間から — 加えられたものとしてこの世を去るのだ」(岩波文庫P.87 後から1～2行目)この言葉の意味するところは何であろう。法というのは国家における基本的ルールである。そしてこれを生かすも殺すも人間の行為である。だから法は為政者の恣意により曲解され、誤まることがある。為政者が権力の座に眼がくらんで、違法行為をしないという保障がない。だからこそモンテスキューは、三権分立を説いたのである。まして悪平等化してしまったアテ

ネの民主政治の状況において、法の軽視が一般的になっていたと見るのは妥当なところである。それだからこそソクラテスは裁判官に対してあえて忠告をしたのである（「弁明」(1)の終りなど）。従ってソクラテスは、法は正当性を持っていたが、それを動かす人間の不当性を非難し、それに生命をかけたといえる。法を生かすも殺すも人間の法に対する姿勢如何によるということを行わんとしたのだと思う。しかし結局ソクラテスの真意は当時のアテネでは受け入れられなかった。

(d) 政治活動と死

ソクラテスの時代のアテネは、すでに民主政治は失速状態にあった。強力な指導者はすでになく、政治上の混乱が、支配していた。そうした状況の中で、ソクラテスは「アブ」(「弁明」(18))として存在し、市民に自覚を求めている。「弁明」の公人、私人という話(19)もその一端をうかがわせる。彼にとって善く生きることは、正にエピクロスと対称的であったといえる。すべてが、哲学が、魂をみがくことが、幸福が、政治活動が一体となっていたにちがいない。だから弟子のプラトンは、後に「哲人政治」を説いたのである。従ってソクラテスの死の背景には、解説書等に見られるように、多分に政治的配慮が働いていたと考えねばならない。ソクラテスの裁判は一種の魔女裁判であったと言えるのではないか。こうした時代の状況をぬきにして、ソクラテスの死を扱かうのは危険である。いつものながらのことであるが、時代と思想の関係を十分ふまえることが、倫社の学習には必要である。

(e) まとめ

以上主としてソクラテスの法や国家、政治に対する姿勢という観点からソクラテスの思想、死の問題を扱ってきた。ソクラテスの死には、時代の政治的状況が深くからんでいること、国法の運用の仕方を誤ったアテナイ人に対するきびしい批判を行ってきたこと、又その結果としては死が彼をまっているだろうことは当然予測していたということ、こうした点

をふまえて私はソクラテスを扱っている。ソクラテスが生命をかけて自己の信念を貫いたことは、生徒にも少なからざる刺激となるようである。又今年度扱った補足的な教材の「山口判事の死」は日本人の中にこうした生き方をした人がいたということで、生徒は関心を持ったようである。ソクラテスを扱う場合、我々は概して、異常の人として扱いがちになる。生徒もそのような感想をいただく。感想文を書かせると、この生き方には感激するが、私にはできない、死んで一体何になるのだろうか、生きている事こそ価値があるのだというのが圧倒的に多い。今年度も感想を書かせて、そこで終りにしてしまったが、ここでもう一步進めて、何故自分にはソクラテス的な行動が出来ないか、生きている価値とは何か、といった感想を出発点とし、かつ個人はそれぞれちがうというところから、話を改めて始めると面白いのではないかと思っている。グループディスカッションなどの形で、こうした内容の意見交換が行なえればよいと思う。だが今私はこうした方法に二の足を踏んでいる。こうした討論がどうも上野ではうまく行かないからである。ここにある大きな壁をまず打ちやぶることが私にとっての今の課題である。

ソクラテスはかなりシリアスなテーマである。こうした人物が、このような生き方(死に方)をしなくてもよい状況を考えることも一つの展開の方法としてあるだろう。

ソクラテスをどう扱うかは、まだ私として試行錯誤の段階である。御批判をいただければ幸である。

意味の覚醒・その喜び

— イキイキした比喩・具体例による授業展開

都立市ヶ谷商業高等学校 森 名 次 夫

倫社は、「意味の次元」を特に扱かうという、ユニークな性格をもつ。自己の内面の心情や価値意識と関わり、かつ、切実でひたすらなる意味の希求に、原点があるといえようか。そのことは、また、当然、自己の姿勢や生き方が問われることとなる。そして、意味というものは、かすみやわたあめのように、とらえどころがない面がある。そのため、重苦しさや戸惑い等があることも確かだ。しかし、意味に関わる学科を、内面の価値や問題意識の裏づけなく、抽象的的概念やことばだけを、羅列することは、共に、しらじらしく虚しい。ちょうど、辞書や百科辞典を読みあげただけでは、授業とならないように。

やはり、大切なことは、いきいきとした具体例や、ハッとする比喩、ニコッとする素材やエピソード、意味を覚醒させる象徴的のアナロジーにより、内面の価値や問題意識をわかりやすくいかえて、授業を構成していくことであろう。また、それが、倫社の醍醐味であり、倫社たる証といえようか。そして、人生の真実の意味＝根源的事実としての経験と感覚を、共に考え、共感、発見し、めざめてゆくことは、かえがたい人生の喜びであろう……………こわばって、死んだ授業でなく、意味のシンフォニーによって響きあり、イキイキ、ハツラツとした授業の場を創っていきいたい。それが、ますます、深まる私の願いである。

以下、このような視点から、キリスト教をテーマとし、そこにこめられた意味やメッセージを、具体的事例に基いて考えてゆく授業をめざしたメモを、かかげてみた。拙く、雑然としたメモですが、何かの御参考にれば、幸いです。

(1) キリスト教の、「神の語りかけ」「神の選び」「神との契約」ということは、自然宗教的文化風土にある我々には、なじみにくく、また、そのような宗教的経験をもたぬものにとって、ピンとこない。ここでは、音楽や美術の感動を、言葉だけで説明することが困難であると同様の限界がみられる。しかし、その「人間における意味」を、具体例、比喩、象徴によって考えていくことは、可能であろうか。【例】①神の呼びかけにもかかわらず、気づかない一母のせつない祈りや願いが子供には、わからない。一生懸命想いをこめても、相手に伝わらない片思い。②「選びや契約」を、「誠実・信頼関係としての、本質的で運命的なあい（めぐりあい、邂逅）」「人間の意志を越えて結びつくように思われる関係」として、その意味を考えさせる — 劇的・必然的出会い（小説）、あの人との出会い。

(2) 生徒は、よく、「神は全能ならば、なぜ神に背く墮落し矛盾した人間を創ったのか」という問をする。それには、「人格＝主体的で自由な関係」と、「モノ＝強制・必然の世界」との違いの説明が、適当だろうか。即ち、強制して愛の関係が形造られるのは不可能であり、「神は愛」なるが故に、人間自らの自発的な信仰を呼びかけているとの説明が、適当か。【例】①語りかけの相手としての「人格関係・関ること、我と汝」の意味 — 我と汝＝収容所内で窓から見え成長してゆく木々への語りかけ。何かが私の心を動かす思い出の場所。我とそれ＝爆破事件で会社の身内だけ助け、他の人は知らんぷり。高層ビルの火事で助けを求め必死に飛び降りて死んでゆく人々を、冷静に対象化してとらえるカメラマン。なぐられている人を、自己に関りなしとして、つき離し、冷たく見捨てる。君子危きに近よらず。②神は愛＝愛における自発性の意味。即ち、強制や利益に基く結びつきでなく、その人の人格そのものが愛の対象 — ピストルつきつけ愛を強制できず。恋の奴隷＝非人格。人形の家＝おもちゃとしてのかわいがり。③人格関係が、御利益 give & take の関係でないことの説明。

偶像崇拜=人間が自己の利益のために神を手段とし信仰することの否定
ルターの回心=自己の心の平安を求めて自己中心的に神を求める信仰の不
純さの反省。

(3) 生徒の間には、「神が怒ることは、神さまらしくない」として、怒ること自体への否定的な受けとめ方が、みられる。が、怒りは、真剣、純粹、本気故に、愛の裏返しとしての本質的な人格関係であることを、示すことが必要か。《例》①妻の浮気に対しニコニコするのは、愛しているならおかし。本当に怒ってくれる先生=有難く記憶に残る。②厳しさとしての愛。愛のムチ。お世辞や賞讃よりも、苦言を呈し、厳しくイヤなことを直截に言ってくれる人は稀少で有難しなど。

なお、その対極として、ながめる態度(傍観者的、冷静な態度)が、関らないという点で、非人格的・非宗教的なものであることに、留意したい。

Ⅱ 罪、原罪、罰、ゆるしについて

生徒は、「罪、神の罰、ゆるし」などを「悪いこと、してはいけないこと」というように、行為一つ一つを道徳主義的、律法主義的に受けとめやすい。やはり、根本に、神と人との「誠実なる人格関係」が基礎にあり、この関係に「背く」ことが罪であること、そして、その背きの源として「人間の自己中心主義、エゴイズム、原罪」の問題が問われていることに、気づかせたい。そして、その「関係の回復の新生」が、ゆるしや愛などと関連していることに、注意したい。

(1) 人間のエゴ、自己中心的なあり方を、省りみる。《例》①ゴミ問題 日照権の争い。葬式での財産争い。②極限状況における人間。戦争、遭難における醜い争い。小説(羅生門、くもの糸)。③ねたみ、嫉妬の情。友人の幸福、素直に祝えるか(合格、就職、結婚)。ポストのため上役の死願う。となりの貧乏は鴨の味。(2)「人格の関係」をこわす自我のあり方の省察《例》①いばる、傲慢不遜、おごり、たかぶり、優越感まるだし、見栄、虚栄、みせびらかし、輕蔑のまなざし、背信と裏切り。②自慢話や、

謙遜の形をとる高慢。自らをほめることの嫌らしさ＝私は純な女の子。ド
ストエフスキーの自尊と屈辱との葛藤の人間像。(3)そして、たとえ、形式
的・道徳的にそつのない、上品さも、根本的な結びつきがない場合、冷たく、
ぎこちない偽善的な人間関係となることを理解させたい。(例)①フーテ
ンの寅さんと、『積木のはこ』との人間像の比較、②いんぎん無礼＝てい
ない言葉や敬語は、「関係」が切れて冷たいからこそ。(4)「ゆるし＝義と
する」という意味を、「根源的な関係の回復による新生」という点から考
える。(例)①実際に背いた罪はあるが、ないものとみなす。その意識さ
えなくゆるす。奥きせがましく、貸しを押しつけるのでなく忘れる＝ゆる
すとは、忘れること、②率直、真摯、ひたすらなる謝罪。悔い改め。路上
でのさんげ(『罪と罰』)と、「ごめんなちゃん文化」の比較。

Ⅲ 律法主義とその問題点

(1) 生徒は、律法を、しちめんどくさく、非合理的で形骸化したバカ
バカしきものと受けとめがちだが、「民族固有の習俗としてのタブー」と
いうことを、理解させたい。(例)①インドにおける聖なる牛＝飢饉でも
食はず ②戦前の天皇制＝御真影守るため校長焼死事件

(2) では、律法が、だんだんと内面的真実を失って、形骸化してゆき、
精神的意味が稀薄になってゆくことの、具体的例示と問題点の指摘は如何
？ ①善悪や罪を、重い軽いと「はかり、評価する」心持ちが、すでに問
題。(例)価値と業績によってはかる人間観。人が人をはかることが問題
であることの指摘。法律と道徳が、裁きと報いの立場であることの示唆。
あだうち、殺人等の刑期。②律法を守ることや、信仰に、「報酬、賞罰、
業績の観念(結局は自己中心のあり方)」が、入りこむことによって、不
純となることを示す。＝やって、当然が、やることによってえらく思える。
私は、辛い苦しいことを、これだけ我慢してやっているのだ、どうだ～!
という意識。さんげの中にも己がよき業の意識が入る。＝私はダメないけ
ない人間ですという裏返し of イヤラシサ、偽善。③「自発的に、すすん

で、喜こんで、いきいき行なう」ことと、「重荷、苦痛と感じながら、いやいや消極的に、沈うつに従う」こととを対比させる。(例)席ゆずるのでも、気持ちよくか、恩きせがましくか。親切の押売りへの反発。葬式で悲しくなくとも、御愁傷さまですと言う儀礼。厳しくなればなるほど、心が離れて偽善的になる学校の規則。清掃・当番への対し方。

IV イエスの「愛」・アガペー

(1) イエスの生涯そのものが、人間の弱さ、はかなさ、苦しみ、惨めさ、に、悲痛な涙を流す「心貧しき、悲しむ者」への呼びかけであることに、まず、着目したい。そして、この苦悩と悲哀、恥や屈辱、惨めな辛さという魂の苦しみ・悲しみ — 一般的には、ネガティブで否定的なものとして受けとめられる「心の貧しさ(?)」こそ、¹⁰⁰⁰ 貴く真実であるという考え方を感得し考えていきたい。また、「心の貧しさ」が、経済的貧しさだけでなく(i)価値低く卑しいとされる心の窮乏感(ii)他と関ることができず、愛してくれる者のいない孤独と絶望感とに¹⁰⁰⁰ 関連している事を理解させ、それ故に、癒しと慰めとそれへの希求が問題となっていることに留意したい。(例)①遠藤周作『イエスの生涯』『死海のほとり』で描かれた、無力だが永遠の同伴者としての「愛」。大塚久雄氏の言及する、社会的な内的・心的窮乏感のもつ意味(『信仰と学問』等)が、説明事例として効果的か。②「関りなく愛されぬ」、孤独と絶望=無視される、ふりむかれない、存在しないが如く振舞われる、ひとりぼっち、仲間はずれの辛さ、村八分、声かけられることなし。老人問題・孤老の寂しさ。(日常の孤独の考察)

(2) そして、人間はなぜ、苦しむことに、そのような意義を見出そうとするのか、苦悩と罪悪を、そのように「意味づけたい」とする我々の心情の根拠をさぐらせていくことも必要か。(例)フランク「実存分析」「苦悩の存在論」的人間論の紹介。不幸の神義論の紹介=ヨブ記。苦難の僕の引用=イザヤ書。苦悩、悲しみ、罪意識、不適応の固有のかけがえのなさの意味=ロボトミー、幸福になる薬の開発の問題。(愛する人失った悲

しみを薬で薬にすること拒否)。『私の棄てた女(遠藤)、奪った女(漱石・それから・門・ころ)』のあるべき苦悩と罪意識の考察。ルオー『受難』・バッハ『マタイ受難曲』等感覚的メディアの活用。

(3) さらに発展して、意味を希求し、意味に支えられている人間存在そのものの示唆も必要か。実存分析の人間探究。(例)意味のない仕事にどれだけ耐えうるか。(ハンカチふるだけ一日六千円でやるか?)=ドストエフスキー『死の家の記録』、日曜神経症=暇と気晴らしの問題(『パンセ』)

(4) 生徒は、愛敵の教えを、「辛いけど無理して義務的に愛する」と受けとめる面もあるが、イエスの「愛」においては、積極的にして集中的なものであることに留意したい—自然的でひたすら、切実、かけがえのなさの意味、わきいずるものの考察。全関心を集中し他の一切を忘れる瞬間としての「愛」(迷える一匹の子羊)。しかし、一方では、イエスの愛が、人間には不可能と思われる自己犠牲、自己否定の極地であり、そのような愛の存在の証しを身をもって示したことの意義とその感動の意味を、考えたい。(例)三浦綾子『氷点』『塩狩峠』、難破時にボート与える等。

(5) そして、イエスの愛が、端的な愛であること、即ち、相手の価値に依るもの(エロース)でなく、あるべく定められている他者への人格自体への愛であることの意味を与えたい。(例)①計算や打算やあて、即ち価値に基く give & take 的な「愛」(エロース)を、なぜ人間は、不純とし、それを寂しく感ずるのかの考察。=人は理由をあげて愛さない。富、才能、美貌故の愛→それなくなればもう愛さないのか。(波多野精一・宗教哲学)。②相手を、自分の喜びや利益のために利用。利用・手段・計算することを何故不純と感ずるか。相手を自分の思うがままにしたいというあり方の考察(Ⅱと関連)=人間における性・フリー・セックス、欲望③エロースが、根本に移ろいゆく、矛盾した不安定さがあることの指摘と考察も必要か=(Ⅰ)日常絶えない愛の無常、葛藤、裏切り、悲劇、破局の事例(身上相談欄)。(Ⅱ)只今恋愛中の緊張、不安、苦しさ、切なさ(赤と黒等の小説)。(Ⅲ)惚れ恋し慕う事とアガペーの違い(伊藤整『近代日本の愛の虚偽』)。

人間尊重の精神をさぐる

— 罪責と煩惱を通して —

都立千歳高等学校 中村新吉

〔テーマを設定した理由〕

一般に、罪責という場合は西洋的な表現であり、煩惱という場合は東洋的または仏教的な表現と考えられる。このことは、それぞれの間観や世界観の相異に立脚しているものであるから否定しえないニュアンスを秘めていよう。しかしなお、基本的な問題としてとらえてみたいという衝動にかられることの方が今のわたくしに強くなってきている。なぜかは別として、いずれにしても、罪を自覚する、責めを背負う、自分の心や行為についての内省を忘れないで生きる、罪業から逃れられない自分を自覚する、あるいは罪責や煩惱を背負うて生きることはどのような意味があるか、といったことについて、一般的にどう指導すべきかということではなく、自分がいったいこれまでこのことにどんな意味を見い出して、なにを語ってきたか、省察してみようとするものである。わたくしはこの頃、どの思想をとり上げるにあたって、罪責または煩惱という人間性の内面にかかわるところを明らかにしていくようになってきた。それがいつの頃かというところ、どうも「高校紛争」の頃からのようである。なぜそうなったか、人間の自由とか、平等にしても、人間の尊重にしても、あるいはそのようなことの主張の正当性の根拠にしても、自己自身に対する反省なり批判なりが前提とされる必要があることを痛感するようになったからのようである。人間性に対する深い理解がなければ、他者に対する深い愛や共感あるいは慈悲ということも生まれてこないだろうし、自己本位、自己絶対視になっ

てしまうだろう。暴力的なあるいは破壊的な言動のみならず、孤立的でしかも甘ったれで無責任な言動が多いのも、罪責感や煩悩の自覚にもかかわっているように思われてならない。

〔 どう語ってきたか 〕

今から10数年前に、朝日新聞の懸賞小説として一躍有名になった三浦綾子の『氷点』は今なお新鮮で強烈な感動をよびます。この物語の主題は、一貫して「汝の隣人を愛するように、汝の敵を愛せよ」という倫理の追求にあるといつてよかろう。主人公の陽子は、実の母と信じて疑わなかった母から、実はあなたは私の子ではなく私の子を殺した殺人犯の子どもだ、と言われて激しい衝撃を受ける。そして死を覚悟して、恋人の北原君につきのような遺書を書きとどめている。

「北原さん、短い御縁でした。お礼の申しようのない程、やさしくしていただいて、陽子はどんなにうれしかったでしょう。でも、北原さん、陽子は死にます。『陽子には殺人犯の血が流れている』との母の言葉が耳の中で鳴っています。この言葉は、私を雷のようにうちました。私の中に眠っていたものが、忽然と目をさました。それは今まで、一度も思っで見なかった、自分の罪の深さです。

一度めざめたこの思いは、猛然と私自身に打ちかかって来るのです。『お前は罪あるものだ、お前は罪あるものだ』と、容赦なく私を責めたてるのです。

北原さん、今はもう、私が誰の娘であるかということは問題ではありません。たとえ殺人犯の娘でないとしても、父方の親、またその親、母方の親、そのまた親とたぐっていけば、悪いことをした人が一人や二人必ずい

ることでしょう。

自分の中に一滴の悪も見たくなかった生意気な私は、罪ある者であるという事実耐えて生きて行けなくなったのです。

私はいやです。自分のみにくさを少しでも認めるのがいやなのです。みにくい自分がいやなのです。けれども、既に私は自分の中に罪を見していました。こんな私に、人を愛することなど、どうしてできるでしょう。」

『氷点』の陽子は、明るく、まじめで、友人に親切で、両親の言いつけをよく守り、学業成績も優れた模範的な性格の子供であった。その陽子が自分の中に背負わされて受けつがれてきている罪をみたのである。自分がなにか一つ悪いことをしたことの無い汚れなき自分であると信じていた。これはだれでも持ちやすい反省である。しかし、自己反省の深みとその角度の転換から、罪を負い罪から逃れられない自己存在を知るのである。人間は誰でも一滴の悪を犯さない無欠な生きかたはできない。できないがなお、一滴の悪を犯さない生きかたをしようと、あるいはそのような生きかたができる人間に高まろうとする。人間の弱さとみにくさ、業の深さを知ってなお高まり合おうとするところに、罪責を負う人間の愛が見い出されてくるであろう。すなわち陽子の遺書「けれども、既に私は自分の中に罪を見していました。こんな私に、人を愛することなど、どうしてできるでしょう」という問いかけと嘆きはやがて、自己のうちに罪と業をみたものが愛に生きられる論理に転換するのである。ここに人生における信仰の意義が求められてくる。

イエスが、自己をだれよりも高しとし、自己を絶対的なものとする人間はさまざまな自己欺瞞や自己正当化にもかかわらず、孤独であり生きる意味や目的を見いだすことができない、とした。そしてまさにここに人間の

罪責をみた。ブツダは、人々が我執をいだいてたがいにへだて合うのが世の常であるから、人の世には苦しみや争いがたえないし、煩惱は我執からうまれる、とした。では、イエスの説くように、人間がたがいに自己中心的な生きかたをする時、どのような問題をうみ出すか考えてみよう。また、ブツダが説いたように、たがいに、われとわれの所有物にとらわれて生きようとしたら世の中がどのようになるか考えてみよう。くどくどと例示するまでもなく、みにくい心をもった人間がたがいに自己主張し、反目しあい、ぎしぎしした冷酷な、およそ人間尊重の世の中と反対の地獄の世界が現出することであろう。

人間にとって自己中心的な生きかたをすることが罪責であり、罪責を犯さないでは生きていけないという事実耐えがたく恐れおののく時にこそ、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」というイエスの根本律が自らのうちにひびきわたることができるのである。キリスト教の信仰のいっさいはこの根本律から出発し、この根本律に徹しきる生きかたを要求する。「汝の隣人を愛するように汝の敵を愛せよ」という律法をも包みこんでいるのである。このことの理解がなされないと信仰の深い意味がわからないし、深い意味がわかることによってまた罪責を負う人間の救いが見いだされてくる。それゆえ、「神とはなにか」「『神を愛する』ことはどのような意味をもつか」をどこまでも自らの問いかけとして問い求める生きかたにこそ、人間が新しい人間に生れかわることの鍵があるといえよう。主なる神「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らせてくださる」(マタイによる福音書 第5章)と聖書で示されている。これが先の問いかけに答えるものである。神を愛することによってのみ、神の

111

愛の心を自らの心とすることができようし、神のみこころのうちのみ生きようとすることによって新生の希望があたえられるであろう。「新生の希望があたえられる」とはなにか。自己中心の生きかたから差別と打算にとらわれ、争いや対立がきけがたい罪深い現実の自己が救われ、自己中心を捨てて、だれかれの差別なく、わけへだてなく、他者のうちに「人格」をみだし、人間を尊ぶことに生きることが可能となることである。

仏教的には、「自己中心の生きかたから差別と打算にとらわれ、争いや対立がきけがたい罪深い現実の自己」はまさに煩惱にまといつかれた自己である。この煩惱を超克することによって、人間は自由と平和の状態に進んでいくことができる。ではそのためにはいかなる法をみ、いかなる法によって生きればよいのか。それは、無常・無我の法によることであり、縁起の法によることである。たとえば、わたくしにとって、ブツダの教えをいかだのとえによって考えるのが好きである。

44

旅人がとある大河にさしかかった。しかし渡舟もなく橋もかかっていなかった。そこでその旅人は草・木・枝・葉・なわ・つるなどをかき集めていかだを組み、そのいかだに乗って彼方の岸に渡った。彼方の岸に渡ったその旅人は、「このいかだは私の作ったもので私を助けてくれた。さあ、私はこのいかだをかついで行こう」と行ってしまった。このようにしたならば、かの旅人はそのいかだに対して為すべきことを為したものであろうか。大悟した者は、そのいかだを岸に捨ておいて行かなくてはなりません。大悟した者なら、それと同じように、仏法を他の人々のためをはかって捨ておいて行かなくてはなりません。もちろん非法は捨てきらなくてはなりません。—(参照。中村元著「原始仏教」P.61~62、NHKブックス、日本放送出版協会)—。このたとえは、高校生にわかりやすい内容に自分

なりに手を加えてみたものである。このいかだのたとえはどのようなありかたを人間に教えようとしたものか、考えてみよう。

〔ま と め〕

今日、人間の尊重や人間の尊厳がさげぼれ、あるいは人権の尊重が主張されている。しかしながら、その一方で、われわれ自身がエゴイステックな自己主張におち入っていることはなかろうか。他者の人権が、自己抑制をとまわらない自分の権利と自由のみの追求によってふみにじられ、き損されている事実はなかろうか。人間は自己目的の実現をめざしてつき進みやすい。自己中心的な生き方からの脱却、残執の超克がどういう意味をもつか、このことは今なら改めて述べなくてよかろう。イエスを通して、ブツダを通して、現代における人間のありかたや民主主義社会の根本原理を照し出してみることは、どんなにくり返され、どんなに深められても、これでよいということとはなかろう。

仏教と「いろは歌」との関わり

都立葛飾商業高等学校 浅 香 育 弘

<はじめに>

仏陀の教えについて検討する際、四諦説(四苦八苦・五蘊観)・三法印・縁起説・智恵・慈悲・仏教の平等思想・平和思想・具体的実践としての五戒・六度・八正道・上求下化(解脱と慈悲)等にふれているのが普通だと思ふ。

しかし現行倫社の教科書で、仏教思想との関連で「いろは歌」を紹介し説明しているものは殆どないようだ。(国語古典でふれているかもしれないが)そのため今の高校生で、いや大学生でさえいろは歌をきちんと云える者は少なく、ましてそれが仏教思想を歌ったものであることを知っている者は更に少ないのが現状ではなかろうか。

こゝ数年仏教を検討する際、私は導入として"ことわざ・日常生活にみられる仏教用語集"なるものをプリンシシ渡たして、読み合い検討することにしてゐる。これが結構いまの生徒には困難であるが、一方で新鮮な驚きと同時に、仏教に身近なものを感じ、興味をいだくきっかけになっているようだ。日本人が古くから親しんだ「いろは歌」が仏陀の教えとどうかゝわっているかを学ぶことも、生徒に仏教を身近に感じさせる一つのきっかけになるのではないかと思ひ、毎年ふれることにしている。

<仏教といろは歌との関連>

私達が小学校で習字を習いはじめの頃、最初に習ったのが「いろは」だったと思ふ。(オトシがしれますなあー)「いろはにほへと、ちりぬるをわか…」子供の頃はアイウエオとかABCと同じように単に発音の違う文字を並べただけにすぎないかと思つていた。しかしやがてそれがある意味をもつものであることを知った。10代の頃「修行者と羅刹」という物語(これが法隆寺の玉虫厨子に画かれている「施身問偈本生図」と同じ話だっ

たことは後でした)で修行者が羅刹(実は帝釈天)から聞いた偈をいろは歌として教わったからである。

色は匂へど散りぬるを 吾が世誰ぞ常ならむ (前半)

有為の奥山今日越えて 浅き夢みじ酔ひもせず (後半)

一応訳してみると、「美しく咲いた花もいつかは散ってしまう。それと同じようにすべて生あるものは滅し、この世に常住なものはない。それなら無常で苦しみの多いこの世に処してどう生きていきたいのだろうか。人間が煩惱の深いために苦しみの多い有為転変のこの世を解脱し、のりこえて寂靜の境地に生きるようになれば、醉生夢死でなく、正しく嘗めて平安、自由に生きることができるようになるであろう……。」

仮りに「いろは歌」をこのような意味にうけとれば、それは釈尊の教えを要約したととれる四法印、四諦説を説いているとうけとれぬこともない。四諦説はマハーバッカ(大品)1・6・19~22や、スッタニパータ 724~727等に、四法印はダンマパダ(法句經)の277~285等にみられるが、やがてふとしたことで20代以後、中国東晋時代の僧法顕(337~422?)が渡印、帰国後翻訳した大般涅槃經の終りの方で、如来最後の教えを「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂」と訳し、これが「いろは歌の本になっていることを知った。つまり次のようになる。

色は匂へど散りぬるを (諸行無常一諸行ハ無常ナリ)

吾が世誰ぞ常ならむ (是生滅法一是レ生滅ノ法ナリ)

有為の奥山今日越えて (生滅滅已一生成滅シ已ッテ)

浅き夢みじ酔ひもせず (寂滅存樂一寂滅ニイキルヲ樂シミト為ス)

そして北伝系の涅槃經漢訳四種のうち、般泥涅槃經や遊行經、南伝のマハーバリニッパーナスッタ(涅槃經)ではいずれも、このところが如来偈ではなく帝釈天の頌偈となっており、釈尊最後の教えはパーリ涅槃經によれば

この時、世尊は言われた。「比丘達よ、今この時に臨んで、特にお前達

に告げておく。Vaya-dhammā samkhārā と己れの好みにふ
けらずに極まればいゝのだ」と。これが世尊の最後のことばであった。

(VI7)

とあり、死の3ヶ月前マハーバナで諭し、死の直前クシナーラで最後の教
え(遺言)としてもう一度同じことを弟子達に繰返し説いていることを知
った。(釈迦仏陀本紀・同余論 富永半次郎氏述)このところを法顯は
爾ノ時如来此ノ偈ヲ説キ已ッテ諸ノ比丘ニ告グ。汝等当ニ知ルベシ。一
切諸行皆悉ク無常ナリ。…汝等宜シク応ニ勤行精進スベシ。此レ則チ我
ガ最後ノ教ヘ也。

と訳している。つまり Vaya-dhammā を aniccā samkhārā
(諸行無常)と同義にとらえているが、これは北伝、南伝とも同じで、こ
のような伝統的解釈が現在の東西の学者にそのまゝ受継がれているようだ
から、いろは歌の無常観的うけとめ方の淵源も深いといわねばならない。

しかしこれについては、五蘊作用の中の āyu 的な samkhārā (生や
自我に執着する我執我欲我見の根本煩惱)が消え、サンカーラが完成して
こそ(五蘊正観となり)すべての Vayas (身心のはたらき、言行、五蘊
作用)が dhammā (適正)に発揮される samkhārā 作用になるから、
バヤスがダンマになるようなサンカーラ作用になるように、とでも訳すよ
うな全然別の解し方もあるようだ。(前掲 富永半次郎氏述)

仏陀最晩年のこの二つの重要な語句についての次のような説明

「自己持続の観念を固必ずるもの(つまり精神)が今自分から消え去った
ことが、深い内観の間にはっきり意識された。されば生命(心憎トイッテ
モ同ジ)そのものが形成の真の担い手であることを忘れることのないよう
にして欲しい」(雑誌理想No 475 P. 114 千谷七郎氏訳)も大いに参
考になる。そこで、これは全くの推論だが、法句經183に諸悪莫作 衆
善奉行 自淨其意 是諸仏教 とあるのは、普通「悪をなすな、善を行な
え、心を淨くせよ」と並列的に読まれているが、「すべての悪をなさず、

善を行うは、自己の心を浄めるに依(拠)る。これこそ仏の教えである。」とも読めるのではなからうか。そうすると仏陀の最後の教えとつながってくるのではなからうかとフト考えてみたりしている。

<まとめ>

以上のことから「いろは歌」は釈尊最後の教え(というより法顕訳の如来偈)を和訳したものであることがわかった。授業中の説明はこの辺まででよいと思うが、もう一步掘下げてパーソ涅槃経を通し、仏陀最晩年の教え(根本仏教)を検討していくと、弟子達が継承流伝した原始仏教と全く違うものが開かれてくる可能性があり、いろは歌がひいては従来の仏教理解が果たして仏陀の真意を伝えているか疑問に思えてくる。

諸行無常説一つとりあげても、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。」というような伝統的無常観には常住不死を願うが故に無常を厭うという般若空観的、涅槃思想が根底にあると思うが、その他に精神作用(五蘊)の中のサンカラー作用(色受想行識の中の行であり、無意識的・潜在的によくもあしくも考えをまとめあげる作用をいう)は無常であるという意味が本来あったと思う。

従ってむしろ「しづこころなく花の散るらむ」と無常を無常として観た友則や、「蚊柱や夢の浮橋かゝるなり」「行く水や何にとどまるのりの味」と煩惱に漂泊した其角にこそ、無常観にとらわれず無常を観る(心)眼がそなわっていたといえるのかもしれないのである。

いずれにせよ仏智は甚深無量(法華経方便品)で、言語道断(言語ニテ道ヲ断ツ、ことばで言いあらわせない)・不可思議(思議スベカラズ、思議し得ない)であり、自分でわかったつもりでも自分なりに理解しえた範囲内でしか理解しえず、伝ええないのが現実である。

仏教思想をわかりやすく学習するために、いろは歌や仏教用語をとり入れるのも一つの方法だと思ふ。しかしいざ掘下げていくとむずかしい問題に直面し、全くもって自信がないというのが実感だが今後とも学んでいきたい。

老子の思想

都立志村高等学校 木村正雄

1. <学習のねらい>

石油ショックや公害問題をきっかけに、今までの物質主義的な考え方に疑問をもつようになった現代の影響を受けた生徒たちも、青年期特有の理想主義も手伝って、非合理主義的なものに関心をもつようになってきている。そこで、現在の高校生の物欲的な考え方、しかもそれしかないという考え方に対して、少しでも反省させるきっかけをつくりたい。まず、人生のすべてが物や金でないことをふと考えさせ、人間にとってもうと大事なものがあのではないか。いったいそれは何なのか。ということをも文明化人工化の社会に生きる一員として、一つの反省の材料としたい。次に、目先の小さい事柄にとらわれないこと、もっと大きな目で見、大きな心でとらえさせるようにすること。成績のよし悪しやスポーツの勝敗、はては身体の大小にまでこだわる傾向に対し、もっと勇氣と寛容のもてる考え方をもたせたい。第三には大は小によって支えられているというように、他あつての己であることを自覚し、すべてのものが相対の世界に生きる者としての自覚があつてこそほんとうの自己の生き方が見出させることに気づかせたい。つまり、人間中心に万物をみる現代の作爲的なもの見方に警告を發し、自然とともに生きる、自然に絶対に帰一することが眞の自由であり幸福であることの意義を考えさせ、社会の一員としての生き方についても自己主張と忘我などの諸問題について現在の生活の諸問題と関連させて考えさせたい。

2. <学習内容>

〔道〕

「道の道と可べきは常の道に非ず。名の名づく可べきは常の名に非ず。名無きは天地の始めにして、名有るは万物の母なり。故に……」(老子1章)

これが「道」といえるものであれば、それは本当の、不変の「道」ではない。「名」がこれだと名づけられるようなものは、それは恒常的な時空を超えた「名」ではない。天と地が出現したのは名づけられないものからであり、名づけられるものは万物のそれぞれを育てる母にすぎない。本当に永久に欲望から解放されているものだけがかくされた本質をみることができ、欲望から解放されないものはその結果だけしかみることができない。この二つは同じものからでているが名は違っている。つまり、道とは万物が生成される根源、相対を超えた対象化し得ないもの。宇宙の本体、根源、無限絶対のもの、相対の世界の言葉を使ったのでは説明できないもの、便宜上、無理に名づけて「道」とか「大」とかよぶだけである。

「物有り混成し、天地に先だつて生ず。寂兮たり寥兮たり。独り立って改わらず、周行して而も殆れず、以て天下の母為る可し。吾其……（老子 25章）

はじめに形もない渾沌とした何物かがあった。それは天地の分れ以前から生じていた。それは音もなくがらんとてただひとり立ち、不変であり万物にあまねきわたってしかも怠らない。それは万物の母だといってよい。仮に「道」とか「大」と名づけ、天も地もまた「大」である。

〔相対論〕〔絶対論〕

「天下、皆、美の美為ることを知る。斯、悪なる已。皆、善の善為ることを知る。斯、不善なる已。故に有無相生じ、雖易相成し……（老子 2章）

世間でよいとされていることは果して絶対によいことであろうか。個別の立場に立っている限り、よい悪いは絶対にきめられない。私、あなたが互いに相対的であると同じように善悪も相対でしかあり得ない。どこまで行っても相対的でしかあり得ないわれわれの世界で見、聞き、知るものはすべて善悪、美醜、大小、高低、長短等、互いに他方があってはじめて言えることでしかない。つまり、世間の人々は皆、美しいものは美しいということを知っているけれどもそれは醜いものがあるからのことである。

「三十の輻、一つの轂を共にす。其の無に当たって車の用有り。(老子11章)

車輪の三十本の輻は一つのこしきの空虚な部分に集中している。そのこしきの空間部が軸を通してあるからこそ、はじめて車輪はその働きをなすことができる。花びんはその器の中が空であるからこそ水を入れたり花をさすことができる。この教室も空の部分があるからこそ机や椅子、人が入ることができる。すなわち、無があるから有の働きができるのである。だから表面ばかりでなく隠れたものの働きをみる必要がある。

〔無為自然〕〔柔弱謙下〕〔嬰兒に帰れ〕〔小国寡民〕

「賢を尙ばざれば民をして争わざらしむ。得難き貨を賈ばざれば民をして盗為らざらしむ。欲すべきを見ざれば心をして乱れざらしむ。……」(老子3章)

賢人をたっとぶようなことがなければ民は争わずにすむ。手に入れ難い宝物などをいつも無暗に尊んだりしなければ人民は盗み心など起さない。欲望を刺激するようなものを見せびらかさなければ人民の心は平静で乱されない。常に人民に不当な欲望を起させないように無為の政治をするならば天下は安らかに治まる。すなわち、無為は相対的な人為を取り去り絶対の道に則した行為をいい、何もしないということではない。無の道に従っていっさいの作為を捨ててありのままに自ら然る姿に素直に生きることである。自然という言葉は、一つは大地の自然でこれを万物の母とよび、もう一つはあるがまゝという自然で、そのような生き方を無為という。

「大道廃れて仁義あり、知恵出でて大偽あり、六親和せずして孝子あり、国家昏乱して忠臣あり。……」(老子18章)

大道があるがまゝに行なわれないところに形式的な仁義や作為的なものが出てくる、知恵ある者がでてきたから虚や偽わりが行なわれるようになった。例えば弁護士が法の裏をかくように。父子、兄弟、夫婦が不和になったから孝慈が目立つようになった。国家が混乱したので忠臣というものが目立つようになった。だから自然に従うべきである。相対的なもの。

「信言は美ならず。美言は信ならず。美なる者は弁ぜず。弁ずる者は善ならず。知る者は博からず、博き者は知らず。」（老子81章）

真実な言葉は美しくみえない。美しくみえる言葉には真実がない。テレビニュースなども標準語で語られると冷たく真実味が感じられない。田舎言葉で語られると親しみや真実味がでてくる。本当に良い行ないをする者は多くを語らない。真によく知っている者は真の博識者ではない。雑多な知識を博くもっている者は実はどれ一つとしてよく知っていない。これはクイズ番組をみれば理解できる。

その他、真に徳に満ちた人物は一見空っぽのように見えるが、その徳を用いれば窮地に陥ることがない。真に真直くな者はかえって一見曲っているように見え、真に巧みな者はかえって一見へたなように見え、真に雄弁な者はかえって一見とつ弁のように見える。また、固い質の木は折れやすいが柔かい木は折れにくい。雪が松の木と柳の木に降った時、固い松の木はボキリと折れる。同じ木でも大きくて固い幹は下にあり、柔かで弱い枝や葉は高いところにある。理想的な人間像は赤ん坊のようになること。赤ん坊は無為、無心、無欲であるがためにものを握るとなかなか離さない強さをもっている。高校生の多くは欲望や虚栄心に満ちているため無心にはなれない。進学や就職などこせこせしない者は真によくのびのびとしている。また、理想的な国家は小国寡民である。最も強調したいのは、学習成績よいのは悪いのがいるからであり、上手な人、早い人は下手な人、遅い人がいるからだということに気づき謙虚な気持ちをもつことでないか。

8. <まとめ> 生徒は「道」が理解しにくい。おぼろげながら何となくわかったという程度。相対論や柔弱謙下などは生徒は興味をもち、敗者、弱者の論理であると知りつゝも、いや、それだからこそなるほどと理解するのもかも知れない。老人くさい考えと思いつつもそんな考えがあるのかと生徒は驚く。孔孟の考えよりも興味関心が強かった。平明化の難かしさとともに、抽象から具象へ、具象から抽象へ、さらに生徒と共に論理的に思考を深めていく作業の難しさを痛切に感ずる。

莊子の思想

都立府中高等学校 永上 肆朗

1 とりあげた理由

老荘の思想は孔孟にかくれた陰の思想である。だからといって決して無視できるものではない。それどころか儒家は道家あってこそである。まさしく莊周流に言えば、「兩行」そのものである。たゞ私の場合、『論語』とのかゝりわりで老子にふれることはあっても莊子を扱う余裕がないのが実状であった。しかし莊子の思想には人生と世界への透徹した認識がひめられており、その文学的ではあるが、すぐれた比喩や寓話の中には時代と文への痛烈な警句も少くない。これが源流思想の強みであろうか。そこで指導にあたっては、特定の時間配当なくとも随時引用しながら比較展開することもできる。このような際に、自分なりにこころしておきたいことをその中心思想である相待観においてまとめてみた。

2 相待観の展開

相待は莊子の中心思想である。莊子の言葉に「井の中の蛙(かわず)大海を知らず」(秋水篇)というのがある。これは人間が自分の立場から一つの価値にこだわる独断への警告である。人間の現実界は、是非、善悪、正不正といった価値と分別対立にいとまがない。「あれ」か「これ」かそれぞれの立場から主張することにより一方の価値を絶対視する。しかしよく考えてみるとその区別や対立もより広い立場から眺めれば、誤りであることがわかる。すべての対立者は、たがいに依存しあってのみ存在しうるものであり、したがって単独の絶対的な存在はない。「彼」と「我」は相互に相待ち合っこそ成り立っているのが実相である。このようにして万物は、道の世界に立ってみれば、本来真偽是非の区別はない。人間は自分の狭い視野をこえて天高くかける大鷲のように下界を見おろして、全体を視野に入れるものでなければならない。この境地に立っこそ「もの」は

齊しく無差別平等の世界になるのである。

『荘子』の「齊物論」にみる思想は以上の通りであるが、これを指導の場にむすびつけるにあたって次の点を配慮していきたい。

○不安と気まぐれな人間

人間の本来的な姿はどうであろうか。性善説や性悪説もあるが、それらはいずれも、一面的な人間観にすぎない。もし世界に神や仏がいなかったら、認めないなら、いやこれを望むとしてもなお、人間自身の胸さわぎをとめることはむづかしい。「人間のむなしさを十分に知ろうとするならば、愛の原因と結果を考えればよい……。クレオパトラの鼻がもし低かったら、世界の歴史は変わったであろう。162」とのパンセの名句は寄辺のない人間のむなしさを描いたものである。王の決断を鈍らせるには策略に及はない。

「一匹の蠅(366)」が耳もとで唸るだけでじゅうぶんなのだ。危いかな人間。誇り高き人間の幻滅の姿である。荘子の人間観にはこのような実存的な気まぐれがある。荘子にとって、人間存在は初めから孤独であり、すがるべき神をもたず、不安にさらされた絶望的な存在であった。しかし人間は、その孤独と不安に耐えて生きてゆかなければならない。ここに荘子の生きかたのすべてがあった。(→『荘子』(中央文庫 P 57 ~)

○価値の混乱

不安の先駆者パスカルは「ピレネー山脈のこちら側で真理でもあちら側では誤謬である(294)。」とさらに人生のむなしさをこのようにもとらえる。価値と反定立の世界の指定。およそ人間に文明や習俗がどんな意味をもつであろう。現に文明すらも色あせてきつゝある。

▽大草原のはてから昇る太陽の動きに身をゆだねて生きる世界では、腕時計をあまり必要としない。しかし、自動巻きだから、はずすととまってしまう。近代文明の世界では便利なはずのものが、ここではかえって不便なうとましいものになる。… 文明の価値といっても、その価値は不変なものではない。▽美醜の問題にしてもそうだろう。… 白いはだが黒

いはだよりも美しい、というのは白人優越社会が生んだ神話かもしれない。(「天声人語」文字のない世界にふれて 51. 1. 13)

永遠を志向するアフリカは、文明をあざ笑うようである。現代は価値多元の時代である。混乱の時代である。荘子の生きた古代中国はまさにかような時代であった。そこでは、規矩準繩にしばられない自由奔放な生き方が、「小知」をすててより高く「大知」に生きる生き方が必要であった。

○運命と死

「死と生とは、運命によって定められたものである。それはちょうど夜と朝の規則正しい交替が自然によって定められているのと同様である。このように人間の力ではどうすることもできない天命によって支配されているということは、存在するものすべての真相なのである。」(大宗師篇)

荘子にとって生と死はあるがまゝのものとしてとらえられた。「生を善しとし、死も亦善し」とする。(方生の思想)目まぐるしい時代の転換期に生きた荘子にとって自然と運命のはからいを深く感じとったに違いない。時の流れは、いっさいを押し流して寸時も止むことはない。もし人間の一つのありかただけに執着し、青春だけをよしとすれば、それはつかのまに失われていくのであろう。

○荘子と仏教

荘子はものを対立の相においてみずに連関の相において全体的にとらえる。二つをむりに一つにまとめようとしない。また一つをむりに二つに分けようとしない。この分析と区別の知識を否定し、二極をありのままに認めて、全体的な視野からの直観や体験で統一する。知識やことばの否定は禅の不立文字の立場に基礎をあたえたものである。無為自然の大道に従う因是の思想は、柳は緑、花は紅として是認する禅宗の立場に通ずるものである。また、親鸞のいう悪人正機も、一視同仁の立場からする仏の慈悲心のはからいによる無差別平等に立つものである。自然法爾にもこの考えがみられる。

「老子」の逆説的情熱を

都立深川商業高校 田 辺 寅太郎

(1) 定時制における初めての授業であり、その時間、時間で勝負する授業を条件づけられた私としては、どう授業を進めていくか悩んだ。ほんとうに教育課程審議会中間発表ではないが、精選され構造化された知識をおしえ、しかもそれが彼等一人ひとりの生きる糧となり、倫理社会授業のねらいでもある実践的なものとなるには、どうすべきか考えさせられた。

しかし、授業を始めてみると、表現力はないが心情的には彼等も「自分は生きているんだ」、そして「自分の人生をいかに生きるべきか」彼等なりに悩んでいることがわかってきた。そこで私は多くのものをら列して教えるよりも、一つでもよい彼等の心のなかになにかを芽生えさせていく授業をと考え、模索しながらも私なりに授業を展開した。で、ここでは、その一つである老子について述べてみたい。

(2) 「道」について

老子の道については、一章、十八章を引用した。定時制の子どもらなので、書き下し文、通釈の徹底的な通読から始めた。そして一人ひとりが一応読め、通釈がわずかながらでも理解できるまでにした。その後、彼等が感じとったことを発表させたが、一章、十八章を通して感じとったことは、いままでの孔子、孟子とはことなり、むしろ否定的な立場であることくらいであった。そこで私の方も殷周の歴史的過程を説明することによって、老子の関心がどこにあるのかを生徒と考えていくことにした。一章、十八章の儒家の道德規範への批判、大道の廃れない無為自然の社会の理想化は彼等なりに理解ができたようだが、老子がなぜそう主張したかについては、彼等も理解しにくいと思い、私の方で説明していくことにした。

ともあれ、どのような言葉も名誉も、またどのような文明も栄華も、それが人間によって作られたものであるかぎり、いつかは崩れさり、蔽びら

せ、道の混沌の中に虚しく呑みこまれていくこと。そして、その崩れさ
ていく歴史の地平のなかで榮枯盛衰を超えたもの、人間の崩れながら崩れ
ない生き方を老子がどこに求めたかを理解させるようにした。

ちなみに人間社会では滅びと崩れが必然であり、その中で人間が崩れな
い生き方をたもつには、崩れさっても残る自然のあり方（造化）に根本原
理を求めなければならないし、また自然に腰を据えた生き方だけが人間に
究極的な安らかさを保証することになるとする「老子の世界」も形而上学
的ではあるが、生徒として味わうべきであることを説明することにした。

(3) 無為、而無不為。柔弱謙下について

八章、三十七章、七十六章、七十八章を引用したが、この場合も、通釈
の徹底的な読解から始めた。ここでは老子が世俗的な価値観をいかに顛倒
させたかを理解させ、その逆説的な表現がどのような肯定的意味合いをも
っているか理解しあうようにした。

そして無為を説き、不争を説く彼の処世の英知も、逆説の真理を身をも
って実践し、世俗的な反価値の中に真の価値を実現しようとするものであ
ること。

また弱 — 柔弱も真の強さを逆説的に表現しているものにすぎないこと。

さらに人間の作為が道の混沌に崩れおちるところから人間の本当の「為」
— 崩れない生き方が考えられること等。……

なお彼の無為の実践は、しばしば水の柔軟さを典型とし、水は器にした
がって自由に己れの形を崩しながら、いかなる場合にも崩れない己をもち
つづける強靱さがあることに、老子が求めた逆説的な情熱を感じざるを得
ないことを理解し合うようにした。

とくに、生徒らが己を低きに置き、他人と勝を争わず、どのような汚辱
にも耐え、どのような卑賤の地位にも甘んじ、己の生活をつづまやかにし、
凹地にたまる濁水のように世のけがれを一身に引きうける生き方に、いさ
さかでも共鳴させられるように図った。

(4) 定時制の子らに

磨げられ、生活苦のなかに、かろうじて自分をささえ、夜の生徒といわれながらも、生きていく彼等に、むしろ世俗的、肯定的情熱よりも、老子の求める逆説的な情熱を、しかも「柔弱謙下」「無為、而無不為」の視点から自分をみつめ直し、自分をうちたてることは、彼等に或る意味の生きる力を芽生えさせるであろうことを期待した。

「現代のような虚しい觀念の洪水、浅薄な文化の氾濫、不毛な僞舌と人間精神を白痴化する多忙さ」では老子ならずとも、われわれとしても生命の長退現象、「知に驕る無知」として批判の念をもたざるをえない。

したがって老子の説く、道にめざめた本来的な在り方に帰れという警句も、生徒らに生きるなにかを発酵させるものがあると考えられる。

ともあれ、人間が本来的な在り方に帰るためには、人間の作為的ないとなみをすべて一度否定しなければならないこと、そしていとなみをすべて否定し、「道」すなわち天地造化のいとなみの根底にあるものに、己の本来的な在り方を見いだすとき、人間はあるがままの世界をあるがままの世界として眺めることができるし、また為さざることのない天地造化のいとなみに、己を虚しくして随っていくことができる、とも考えられてくる。

一章 道の道とす可きは、常の道にあらず。名の名とすべきは常の名に非ず。名無きは、天地の始めにして、名有るは、万物の母なり。

八章 上善は水の若し。水は善く万物を利して争わず。衆人の悪む所における。故に道に近し。

十八章 大道廢れて仁義あり。智慧出でて大偽有。六親和せずして孝子有り。国家昏乱して忠臣有り。

三十七章 道は常に為す無くして、而も為さざるは無し。侯王若し能く之を守らば、万物まさに自ら化せんとす。

七十六章、七十八章 略。

第3分科会 現代の思想

研究経過報告

第3分科会を閉じるにあたっての若干の「総括」

卒直に言って第3分科会、活発に活動が展開されたとは言えません。それでも1年間眠っていたわけではありません。そこで(1)いかなる活動をしたか、(2)いかなる事が問題とされたか、そして(3)都倫研に対しての要望を順に述べたいと思います。

(1)集まったのは2回 — すなわち夏休みと1月です。1回目は世話人2名を中心として3分科会の方針をねりました。以後「方針」通りにはなりませんでしたが、当日明確なテーマの下に論議が展開され無駄ではない集まりでした。2回目は(正直言って)『紀要』を意識したのですが、会場墨田川高に集まったのは7名。熱っぽく議論が続きました。

(2)いかなる事が問題とされたか。

分科会会合の回数、集まった延人数は少なかったものの(これは世話人として素直に反省している)、2回ともたっぷり時間をかけて、顔色が変わる事が有る位言いたい事を言いあい(テーブルにとっておけばよかった)しかしそれでも(それだから)内容が生産的で有意義でした。

(a)50年夏休み(第1回)。

科学性、合理性をもっと「倫社」は重視すべきだ、という事がテーマとなりました。そこでは実存主義の立場から異議がでましたが、むしろ渡辺(勉) — 津田間の、科学性の限界(科学を認めながらも)と倫社の関係についての論争がよりわすれられない事です。

(b)51年1月(第2回)。

自己紹介、経験交流ではじまった墨田川高における会合、7名の殆んどが青年層ということも有り、延々と白熱した論議が続きました。ただし1回目と違いテーマは多岐にわたりました。

話題となったのは(1)第1回と同じ事、(2)個人と集団の問題、(3)倫社の数

師は自己の「思想」を生徒の前に鮮明にするべきか、生徒にとって「神秘的な存在の方が良いのか、(一)言語表現の有効性、(二)情熱なき「分析」について(特に「愛」の問題)、(三)勿論平明化について(ここで数名の教師は原稿の中の平明に「」をつけるべきだ、と主張)、(四)さらにはいかにも青年らしく、倫社とは何か、あるいは倫社教師のあり方(こういう背くさい議論はもっと必要だろう)、(五)そして次に述べる都倫研への要望。

(3)都倫研に対して。

第3分科会 — だらしない1年をおくって批判もなにもないはずだが

— 以下の3点が問題になったので一応書いておきます。

(a)科学生、合理性を不当に軽視し、アイマイな感性や主観に逃げこんでいないか。

(b)言いたい事を出しあえないような独特の雰囲気があり、徹底したディスカッションをさせているのではないか。研究授業等、もっと追及(求)や分析をしてもいいのではないか。要するにどこかなれあいが無い。

(c)方法論や教師の「姿勢」論が多すぎはしないか。一番重要な事は、「何を」「何のために」教えるか、である。意志統一はすべきでない、というより不可能だが、それにしても(それにしても、である)、「何を」「何のために」はもっと議論されて当然の事であろう。

以上3点が問題になりました。青年層を中心にもっと話をして行きたいと思います。

最後に第3分科会としては、研究部長をはじめ各方面に多大な御迷惑をおかけした事をおわびいたします。

なお当「総括」の内容について責任はすべて渡辺(南葛)、津田(羽田)にある事をつけくわえておきます。

文責=渡辺(南葛全) 津田(羽田全)

現代思想の授業と高校生

— "自由と必然"を中心にした女流詩人A嬢と
高校倫社教師B君との対話およびB君の断片的独白—
モノローグ

都立保谷高等学校 五味 誠

B 現代社会の「多様化」「分極化」に照応して、現代思想が「多様化」し価値観の「分裂」が進行しているといわれて既に久しいのですが、僕はいつも「本当にそうなのかなー」という気がしてならないのです。現象的には確かに「多様化」しているんだろうけど、その根底にはむしろ単純化され、それだけ一層尖鋭化された問題が横たわっているんじゃないか、という気がするんですが……。

VVV

A それはどういう問題ですか。

B 一言で表現するのはむずかしいのですが、「自由と必然」の問題、社会の法則的發展とその内部における人間の生き方との関係です。

A 合法則的に發展していく社会の中で、人間がどのようにして主体的に生きていくか、ということですね。古田光氏が1940年代の主体性論争を再検討しているけど、ああいう動きとも関わるわけですね。(注1)

B ええ、そう思います。戦後の主体性論争が占領軍の圧力や論争当事者の政治的分裂によって中途半端なままに立ち消えになった後、社会の動きとしては、いろいろ批判されながらもいわゆる高度経済成長政策を推進した自民党政府への国民の支持(積極的な支持も消極的なそれも含めて)が続いた。その過程では多くの国民が将来に対する夢、明るさといったものを漠然とはあってももっていたと思うんです。ところが、国際通貨危機、石油ショック、スタグフレーション、公害等々が激しくなってくるにつれ、政府も財界の指導者も今までと同じやり方では政権を維持できないことがわかってくるし、国民の方でも先行き不安を強く意識するようになっていく。1970年代に入ってそ

れがますます顕在化してきていると思います。

- A ところが今までのやり方に代る新しい方向性というものを国民ははっきり知ることができない、政治的には野党間の深刻な対立というようにその現われですね。そうした社会の状況の中で、人間の生き方という素朴だが根源的な問いが強く出されているのでしょう。
- B その"生き方"にもいろいろあると思いますが、もうバラ色の夢一現実的根拠をもたないような一はもちえない。とって毎日々の厳しい現実生活に直面している以上、簡単に社会を離れた隠遁生活に入ることもできない。必然的に社会に対する目が開けていくと思います。公害反対の運動や消費者運動の盛り上がりなどのように。ただそうした個々の運動ではどうしても解決しえない、何かこう大きなものが存在するんだけど、それがどうもはっきりしない。そんな気持ちかなり強いんじゃないか。
- A そういう状況は高校生にはどのように反映しているんでしょう。表題の"自由と必然"をもう少しかみくだいていうとこうなると思うんです。人間が彼が生きている時代に規定される社会的存在であることはいうまでもない。しかしそのことは、当然のことですが、人間が社会によって全く一方的に規定される受動的な存在であることを意味しない。人間は同時に社会のあり方を作り変えていく創造主体でもあるからです。この人間の二面性、被規定性と主体性をどのようにして統一して生きるか、ということ、まあ、この辺に問題があるんだと思いますが、今の高校生はどんなふうに考えているんでしょう。
- B ここに本校(保谷高校)一年女子の時があるんです。

昔に聞いた子守唄

昔に聞いた子守唄／今では素直に聞こえない／人生の歯車が カラカラ 音を立てて／からまわりしている／ときどき 歯車の糸がブツリと切れて／一生懸命結んでいると／昔に聞いた子守唄が／私の耳に

サラサラと入ってくる／そんな時 風が 妙にやさしく／私の髪をな
でる／そして糸が結べると／また人生の歯車をまわし始める／何も考
えず 人生の歯車を まわすだけ……／昔に聞いた子守唄／いったい
どこへ いったんだろう (千葉悦子)(注2)

- A この生徒のもっている感じというのは時間的(個人史的)推移の中
で、幼児期の自己中心的世界、自己が全体であるという意識がくずれ
なんだかはっきりわからないけど何かあるものが自分と対立している。
しかもそのものが自分の人生の歯車を回転させていく、自分が考えて
のことではないのに。というように自己と他者(必ずしも他人に限定
されない)とが分化しており、しかし自身ではその分化、対立をいか
に統一(止揚)したらよいかわからない、そうしたもどかしさが昔
に聞いた子守唄に託されてよく現われている。わたしは作者の健康な
ヒューマニティを感じました。

ところでこの詩を読んでいて高見順の「魂よ」という詩を思い出し
たんです(注3)。そしてこの詩と比べてみると、この生徒の場合、
先程わたしが言った他者を社会として認識していないんじゃないか、
だから自己の内面への問いもヒューマニティには満ちているんだけど、
なんとなくロマンチック過ぎて頼りない。さらに花田克己の「ベトナム
の竹」(注4)のように社会の法則性に対する認識・確信がないだ
けに、どうも自分一人の殻に閉じ込めちゃうような、そんな不安も
もつんです。

- B そうですね。社会や歴史が偶然的要因によってのみ進行していると
とらえちゃうと、個人の主体性は強調されるけど、ただその主体性も
簡単に行き詰まっちゃって、結局のところ社会に流されてしまうとい
うことがありますね。

ところで僕は現代思想の授業でマルクス主義とサルトルをとりあげ
ているんですが、その場合もこの二つの思想が「自由と必然」という

問題をどう論じているかという点にポイントをしばってみたいと思います。たとえばサルトルは最近、こんなことを言ってます。「権力と自由の関係がいかに関係されてきたかを哲学的に考察するのが当分の私の関心事だ。両者の敵対関係と共存関係、そしてこの両者が別個のものではなく力強いという契機と自由であるという契機を兼備した単一の實在に止揚されるのはどういう条件のもとでかということをつまらかにしたい。その際、人間を経済制度の産物とみるマルキシズムの方法論を私はとらないつもりだ」(注5)。他方マルクス主義の方でも、スターリン時代の客観主義的理解を克服しようとする動きが顕著のようです。市民的自由といわゆるエンゲルスの自由との関係を論じたり(注6)、「弁証法的-史的唯物論」の提唱(注7)などがそうです。

こういう具合に双方とも、社会的存在者としての人間の自由を、解決の方向性を異にしながらも、非常にアクチュアルな問題としてとらえているからです。

- A そうですね。その際社会契約説やヘーゲルなどを視野に入れた思想的流れの中で「自由と必然」の問題の所在を明らかにすることが大切ではないかと思えます。

— ○ — ○ — ○ — ○ — ○ — ○ — ○ — ○ — ○ — ○ —

現代思想の授業の平明化とはどのようなことだろうか。概念や用語の平明化はもちろん大切だろう。だが現在の私にはその力はない。そこで実際の授業で私が試みようとしていることをいくつかあげると (1)現代思想の課題を思い切って限定・単純化し、キーポイントとして生徒に提示する。(2)そのポイントを生徒の現在の問題意識に出来るだけ引き寄せる(生徒作品の利用等) (3)教科書や論文の文体は生徒にはなかなか読みにくい。そこで抵抗なく生徒に受け入れられる文体にする(対話の形式もその一つ) 以上の対話は、このように考えている私の一試みである。

- (注1) 古田光「主体性論争の歴史」(『世界政経』1975年3月号)
同「主体性論争」(『現代と思想』No.13.14.15)
- (注2) 保谷高文芸部「方寸」第四号 1975.9
- (注3) 詩集『死の淵より』(講談社文庫)所収
- (注4) 真壁仁編『詩の中にめざめる日本』(岩波新書 1966.10)
所収
- (注5) 『Newsweek』1975年11月10日号のインタビュー
記事
- (注6) 日本・イタリア・スペイン・フランス各国共産党の最近の政策
に反映している
- (注7) 一例として、ドイツ民主共和国の『マルクス主義哲学。教科書』
(1967)(邦訳は大月書店より1969年出版されている)。

「事実」と「ことば」

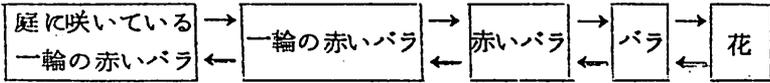
都立板橋高等学校 小河 信 国

序

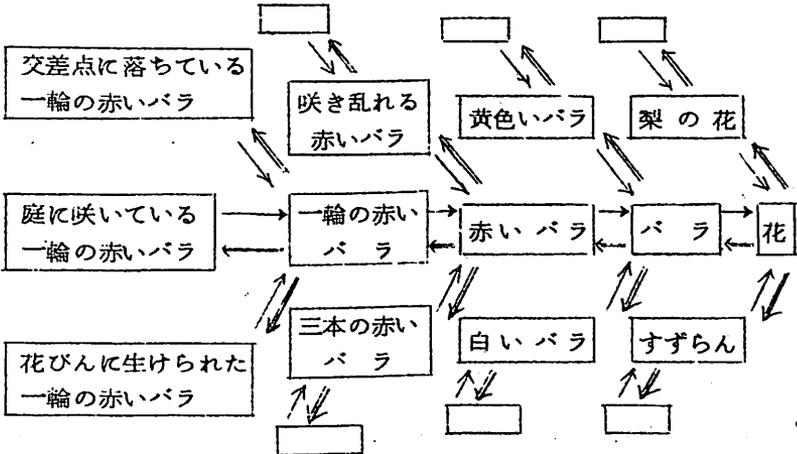
一年間の授業経験から最も痛感したことは、現代高校生達の「ことば」への無関心であり、そして「ことば」が「論理」として起上り、やがて思想が胎動し始めるプロセスについてなんらのイメージも持ち得ないということだった。それは単に「論理的表現」の未熟という<現象>の問題としてのみ片付けてしまうわけにはゆくまい。中等教育に携わる者として、教材と教授の平明化は言わば必須の要請であらうけれど、一般に<思想>というものが一定の<ことば>や<命題>を選ぶ以上、<思想そのもの>の平明化には自ら一定の限界がある。私は、むしろ「ことば」そのものに対する覚醒を呼びかけるという角度から、授業を鮮明ならしめる必要を痛感して来た。とは言え、この種の参考書は私の知る限り皆無といってよいし、私としては生徒の反応だけが道しるべという不安な試みだったことは否めない。以下はその苦闘の一例であるが、本分科会の直接のテーマとは言えないかも知れぬ。が、科会の雰囲気とは大いに関係があり、またコースブスキの「抽象のはしご」を使用したり、パース、デューイらの「概念道具説」もいちおう意識されていることをつけ加えておきたい。

1. 「抽象」と「具象」

「君の話は抽象的だ」などによく言うが、抽象とはどういうことだろう。抽象の反対は具象だという。両者の関係を考えてみたい。



上図に於て<庭に咲いている一輪の赤いバラ>という具体物は → の方向へ進むに従って次第に抽象化されてゆき、やがて<花>にゆき着く。更に抽象化を進めればやがて<植物>といったものになるであろう。一方、← の方向に進めば具象化の道をたどり、次第に具体性を獲得してゆく。とにかく、具体物と抽象物との間には一本の<はしご>が懸かっていることがわかる。コージブスキーは、これを<抽象のはしご>と呼んだ。ところで、この<はしご>をよく観察すると<花>は勿論、<バラ>からも<赤いバラ>からも枝のように異なる<はしご>を下ろすことが出来ることに気が付く。即ち、抽象とは、共通点を<引き出す>ことである。



個別化 ←

→ 普遍化

<花>ということばの背後には荘大な<ことばのシンフォニー>がある。そして、→ の方向に進むことは結局<普遍化>の道であり、← 方向は

<個別化>であることがわかる。即ち、<抽象化>と<普遍化>の方向は一致し、<具象化>と<個別化>の方向は一致する。人間が何故、<抽象化>を行うのかその意味をよく考えてみたいところである。

ところで、<花><バラ>などは全て<ことば>であるが、この<ことば>が表している内容を<概念>という。つまり、抽象化されることによって普遍化されるのは実は<概念>である。言葉の内容が豊かになり、あてはまるもの(それぞれ共通点を持つ指示対象)が増加する。

さて<概念>を英語で Concept, Conception という。英和辞典を引いてみよう。Conception (n) ①概念 ②構想 ③妊娠 次に動詞を引こう。Conceive (vt) ①想像する ②了解する ③<子を>はらむ。 (vi) ①想像する ②理解する ③妊娠する

名詞、他動詞、自動詞のそれぞれ③に注目しよう。妊娠、<子を>はらむ、妊娠する。つまり、<概念>は妊娠しているのだ! こうして<花>という概念からは、<闇に浮ぶ白い夜桜>も生まれようし、<網走原生花園に咲き乱れる花々>も生まれるのである。そして → 方向の上位概念ほどより豊かな可能性を持つことがわかる。

抽象絵画、具象絵画というものを考えてみよう。例えば、ここに二枚のタブローがある。<りんご>を描いた一枚の具象画は、どこまでも<りんご>という具体的個別的な存在を表現するのに対し、もう一枚の抽象画は、<りんご>であると同時に<孤独な女性の顔>であり、<おしつぶされた醜れ>であったりするのである。

2. <事実>の世界と<ことば>の世界

<花>というのは結局<ことば>であり、<概念>であって、<事実そのもの>ではない。<花>というものは実はこの世のどこにも存在していない。<花>ということばの表わす内容 — 実はそれは共通点という点 —

が指し示す多様な<事実>だけが存在する。ところで事実の世界は我々にとって現象の世界である。今、仮に相異なる概念によって表わされる二つの現象が必然的に継起するとき、事実の世界とことばの世界には、次のような前後関係が考えられます。

事実の世界	実在的關係 (時間的)	原因 → 結果 (先行) (後続)
ことばの世界	論理的關係 (推論上)	理由 → 帰結 (先行) (後続)

上図において、原因 → 結果は時間的前後関係であり、理由 → 帰結は推論上の前後関係である。ところで、原因と理由は広い意味で同じものと見なすことが出来ないだろうか？即ち、両者は「或るものがそれによって存在し、生起する根源的事実、根拠」と言えないか？我々の生きている世界では、或るものは他のものの原因或いは理由となっていると言えないか？例えば<転倒したこと>が<怪我>の原因であり、理由であるというように。この<原因>と<理由>を同じものと見るとき、自然における因果関係の合理的認識の問題が成立する。これは、つまり「事実の世界」を「ことばの世界」に置きかえることである。近代自然科学も、結局このようにして成立したと言ってよい。例えばU博士がガンの特効薬Sを発見し、患者に注射した結果、ガンが軽快したとする。ところが学界はこの特効薬を学問的理論的に認めないという場合、仮に事実としてその特効薬Sがガンを治療したとしても、この事実の世界をことばの世界に置きかえることが出来ない限り、科学として認めることが出来ないのである。

ところで、「ことば」というものは「事実」を一分の狂いもなく正確に捕えることが出来るだろうか？たとえば「顎」という言葉が指示する事実の世界は、人間の顔の中で具体的にどこからどこまでの部分を指しているのだろうか？(鈴木孝夫「ことばと文化」) 科学はこのように不完全な「

ことば」を出来るだけ避けて科学にふさわしい言葉、科学的言語を選ぼうとするだろう。一般に、科学が数学的符号や数式などを愛好する理由は、ここにあるのだろう。さて「原因 → 結果」は「事実対事実」の関係であり、「理由 → 帰結」は「ことば対ことば」の関係である。ここに「ことば対ことば」と言ったのは、正確に言えば「命題対命題」の関係である。命題とは何かについては次回の授業に譲りましょう。

<あとがき>

僅かこれだけのものを展開するのにたいへんな苦しみを味わった。第一に、認識論、論理学、意味論その他、立場によって幾つかの方向に精緻に進められている学問的業績から大きく逸脱しないかという心配。難解な書物は山ほどあるが、経験から言って生徒がよく反応してくれるのは例外なく私自身がとぼとぼ考え歩んだものが多い。しかし、こうして「ことば」に注目させることによって、無数の<概念>を扱う倫・社授業のルールにうっすらと潤滑油が光り始めたようである。とにかく、人間にとっての「思考することのスリル」「知的興奮」を呼びさますことが、まずもって私の課題である。下記宛、諸先生方の御批判、御教示を戴きますよう心からお願いする次第です。

<〒186 国立市東2-3-4 小河信国>

- <参考>
- | | |
|-----------------|---------|
| 新ポケット英和辞典 | (研究社) |
| 哲学辞典 | (平凡社) |
| 鈴木孝夫「ことばと文化」 | (岩波新書) |
| プロノフスキー「科学とは何か」 | (みすず書房) |
| J・サマヴィル「科学入門」 | (白揚社) |

主に単純化を通しての「平明」化

都立羽田高等学校 津田 信一郎

またしても無我夢中の1年間であった。「都倫研の、あるいはわが分科会の方針はこうだからゆえにこう授業しよう」とか「紀要の為にはこういった授業をしなければ」ということなど、卒直に言って考えもつかなかった。H・Rや特定の生徒の事等々で精一杯の毎日だった。あるいは教材においつくこと、そして明日の授業をどうするかで懸命だった。『紀要』を書くにはあまりにも未熟すぎる(これは皮肉や謙遜ではない)。

いいわけがましいととられてもいたしかたないが、以下の小論、他の原稿をひきたたせる以外に何の役にもたたない事をあらかじめおことわりして本題に入りたい。

ふりかえると(ふりかえると、である)、いわゆる「平明」化、私の場合、次の3点を思い出すことができる。

(1) あやふやなまま用語を使わない。

(2) 科学性、合理性を重視する。

これは(a)内容的にも(b)方法的にもである。

(3) 思想を単純化する。

以上の3点について順に述べて行きたい。

(1) 用語の問題

まず我々が何げなしに使っている用語(日常化しているものもふくめて)、が生徒にとっては、暗号に等しいかもしれない事を、我々は認識する必要がある。こころ辺のところでは生徒はつかえているかもしれないのだ。今、世界史もやっているので余計感じるが、まずともかく漢字が読めない、そして日常化した用語 — 例えば「規範」「懐疑」「画一化」「合理的」「普

遍的"等々— がわからない(ここで「わかる」というのは、一応感じとしてつかみ、それほどまちがいがなく使用できる、という意味においてである。例として今あげたコトバは実は難しいのだが、そういうことはここでは問題にならない。まったくの見当はずれではなくて"使えるかどうか"が問題なのだ)。

こういった、ごく何気なしに使っているコトバ(1時間の内4~5回は出てくるかもしれない)を理解してもらわなければならない。例え一部の者がアクビをしても、である。

さて倫社の内容に入ると、これまたやっかいなコトバがたくさんでてくるが、これらに関して解説をしていった。(教師の一人よがりをおせぐ為に(生徒は皆理解してくれるにちがいないという幻想を我々は持っていないか)。(生徒がコトバでつまづかない為に。(生徒にとって(覚えておくと)後便利な為に(こちらにとっては授業しやすくする為に)。(「解説」を使って内容に切りこんでいける、という利点がある為に、特に(何の為に— 徹底して用語を解説し、そしてその前に確実にしらみつぶしに定義していった。(各種参考書、入門書、事典を見られたし。コトバの定義がいかにおちているか、またイライラするほどいいかげんな定義がはびこっているか、……そして定義をしないままコトバを使っている。)

そしてその定義を出発点として、そのコトバの意味する所を解説して行った。定義をし、解説をした用語は例えば以下のものである(話の中でとりあげたものと、特別"用語解説"の時間を設けてとりあげたものがある)。

「概念」「命題」「演繹と帰納」「定義」「決定論」「相對主義」「弁証法」「唯物論」「社会化」「実存」「運命」「資本」等々……。

これらのものはまず「～とは～の事である(事を言う)」と有無をいわずに定義し、そして解説していった(定義ぬきの解説が多いようだ)。

(2)科学性・合理性の重視

(a)内容的にも、(b)方法的にも、倫社の場合科学性・合理性が軽視されてはいないか。ここら辺に倫社を必要以上に難解にしている原因(の1つ)が有るのではなからうか。

(a)内容の場合

現倫社の場合、少々主情主義的傾向が強いのではないか、これは常に私を感じる疑問である。科学はもともと必要な手続きをふみさえすれば誰にでもわかるはず(実際は無理かもしれないが……例えばこの私)のものである。

しかし、いわゆる「ドロドロしたもの」はどうか。わけのわからない「詩」、主情的、主観的な「思想」に接すると感じるのだが、それらはもともとわからないものである。わけがわからないから「良い」とか、行間を読みとれといった発想は、生徒を混乱させるか、あるいは自己満足におちいらせるかいずれかである。科学的、合理的に判断して納得の行くものを教材にすべきではなからうか。「ドロドロしたもの」わけのわからないもの、「難解」なゆえに「深遠」だ、と思わせるもの、何となく情に訴えるもの——一部の生徒はこういったものを好むようだ。しかしそれへの迎合はおかしい——を倫社であつかうかぎり、コトバの本来の意味での平明化はありうるだろうか。

(b)形式の場合

内容にともなって、思考する場合の形式が問題とされるだろう。すじみちたてて合理的にものごとを考える方法について、私はかなりの時間をかけた。具体的に言うと「論理学」や「科学方法論」である。論理学の為の論理学(何か最近、我々と無縁の所で論理学が一人あるきしている感じがしないでもない)、方法論の為の方法論ではなく、我々(生徒・教師)が、世界に社会に人間に思想に切りこんで行く場合、本来それ程難しくはない事を必要以上に難しくしない為、それら対象を整理する為、不合理(これが難解の大きな原因の一つだ)を排除する為、かなりの時間をかけた訳で

ある。定義とは何か(その必要性)、判断、広義の(科学方法論的なものふくめて)"虚偽論" Fallacy等々をあつかい、なかでも虚偽論には相当の時間をさいた。

(3)思想の単純化

各種独特の専門用語、難解ないいまわし等でうなることもあるが、もともと思想とは単純にして明解なものだと思ふ。思想とはどういうものか、を別にしても、少なくとも高校倫社にあらわれる思想は単純明解であってしかるべきと思ふ。そこで私なりに思想を単純化してみた。

少し乱暴かもしれないがあえていうと"実存主義"とは……「要するに個人主義の思想である」……これでおわりである。さらに人間、社会の現実に対する科学的分析が欠如しているとか、非合理主義だとか言えば(少なくとも授業において)後何を言うべきだろうか。バスカルあたりもふくめて最広義の「実存主義」者達の相違点を強調しても余り意味はないのではないか。(もっともこの実存主義、いくら何でも5分や10分で終わらせた訳ではないが)

要するに思想を徹底的に整理、分類し、思想家の「好み」からくる夾雑物をはぎとり、そして単純化する……これを私は「平明」化と理解している。なお思想の整理、分類にあたっては以下のような軸を使った。すなわち唯物論 — 観念論、主観主義 — 客観主義、合理主義 — 非合理主義、個人主義 — 集団主義……等々である(以上のコトバを授業中に使うか否かは別問題である)。かかる視点で個々の思想にとりくみ、同じタイプの思想における相違点は徹底的に無視し、粉飾や夾雑物(これらはしばしば「難解」な用語、いいまわしの為重大視されてしまうことが多い)を片っぱしに排除する — このようなことが「平明」化への第一歩とと思っている。

所で、(3)思想の単純化は、(2)の科学性・合理性の重視と大きく関係して実際上は不可分である。なお、紙数の関係上具体例を述べる事はできなかった。

アダム・スミスの市民社会論について

— その平易な扱い方 —

都立南葛飾高等学校 渡辺 勉

アダム・スミスの『国富論』が刊行されてから200年を迎え、我が国のスミス研究の学問的水準は今や世界のトップにあるというのに、高校社会科の中にスミスは必ずしも正当な位置を与えられていない。政経の経済思想を扱った箇処に、「神の見えざる手」による調和を楽観的に信頼した「自由競争」の論者としてのみ紹介されるに過ぎず、トータルな西洋市民社会の把握を試みたスミス像がおさえられていないのである。倫社の教科書では、山崎正一著『新倫理社会』（自由書房刊）がスミスに頁を割いている。これは感情的人間観の主張者として取り扱っていて、市民社会の基本原理を考えたスミスとの説明はない。日本の社会科学・社会思想研究の良質な部分の成果が、社会科教育に生きていないのは残念なことといわねばならない。

西洋近代思想の主流は、個の共同体的絆からの解放即ち個人主義とそれを実現し確保する方法としての民主主義である。この二つの考え方の方向性を我々はスミスから学ぶことができる。個の解放の方向は、市民各々の利己心の存在を相互に認めるという関係を必然的に生み出す。この社会関係を国家権力の力によらずに秩序あるものとするには、新しい社会倫理の創造が必要である。スミスの学問上の仕事は、経済的行為・関係を（重要な）一部として含む新しい（市民的）関係成立のみちすじをトータルに把握しようとしたものである。我が国の「市民社会」は依然として未熟であり、相互に利己心の所有者としての〈他〉を認めあうというクールな前提が前提としてつくられていず、部落共同体的な「相互理解」と排外主義とがあらゆる人間関係を支配している。国際社会の中で我が国は自立してひとつの役割を果たすことが期待されている今日、日本的人間関係の特色を

自覚し、西洋市民社会の古典的な原理を認識することはいよいよ必要である。利己心のコントロールの問題はとくに現代日本において切実な問題となっているのであり、スミスの『道徳感情論』は、川上源太郎氏が指摘するように「われわれの福祉社会を二百年もまえにすっかり言い当てているではないか。」(註1)

スミスの思想を倫社でとり扱う場合、Ⅰ時代背景と思想史的な位置づけ、Ⅱ利己心について、Ⅲ同感の原理、Ⅳ自由な競争についての順でテーマを設定し、王者の『道徳感情論』『国富論』から文章を引用したプリントをつくって生徒に読ませそれぞれについて考えさせたい。注意したい点は、あくまで日本の社会のあり方との対比を問題にするということである。

Ⅰに関しては、スコットランドの経済的状況について触れ、スコットランド歴史学派の思想的問題意識をフランスのルソーと並べて解説する。思想史的には、前ではヒュームとのつながり、後ではカント・ヘーゲル・マルクスへの影響を採り上げよう。(註2)経済学の勉強ではないので、リストの批判については触れずともよいだろう。

Ⅱをめぐっては、スミスの利己心が抽象的な人間の心のはたらきではなくて、生産者層の経済活動にたいするセンスであることをおさえた上で(註3)、今日の日本の利己的(経済)活動のあり方を考えさせたい。安易な利己心についての肯定も否定も不毛である。

Ⅲについて。ひとが一人の観察者として他人の行為を是認したり否認したりする同感の体験と、逆に今度は行為者として他人である観察者の是認の眼(評価)を期待する同感の体験とを、市民相互にみながみな繰り返す中に、社会的良心としての<公平な観察者>がつくられて市民社会の正義の秩序が生まれる次第の論理構造を説明する。互いに相手の行為を判断しあう人間(市民)どうしは全くの見ず知らずの他人であって相手に関する何の先入観も感情的共鳴も予めもっていないのである。同じように利己心を持ち、同じように行為者になったり観察者になったりできるこの人間関

11
係の等価性こそ西洋市民社会の本質であることを判らせた。

IVの問題。『国富論』第5編の引用は、高校生には面白くかつスミスの自由競争論がわかりやすく具体的にうけとられて有効だろう。

「学寮および大学の規律は、一般に、学生たちの便益のために案出されるのではなく、教師たちの利害関心、もっと適切に言えばかれらの安楽のために案出されている、その目的は、あらゆるばあい、教師の權威を維持することであり、そして、かれがその義務を閑却しようが遂行しようが、学生たちがあらゆるばあい、かれにたいして、かれが最大の精励と能力をもってそれを遂行したかのように、ふるまうように拘束することである。それは一方の階層に完全な知恵と徳とを、他方の階層に最大の弱点とおろかさ^{...}とを想定しているようにおもわれる、けれども、教師たちがほんとうにかれらの義務を遂行するばあいには、わたくしは信じるが、学生の大半がかりにもかれらの義務を閑却するという実例はないのである。ほんとうに出席にあたいする講義には、出席を強制する規律はけっして必要ではない。それはなんであれそういう講義がおこなわれるところでは、どこでもよくしられているとおりで、子どもたちまたはひじょうにわかい少年たちが、教育のうちで、生涯のそういうはやい時期のあいだに身につけておくことが必要だとおもわれる部分に、出席するように拘束するために、強制と束縛は、うたがいのなく、ある程度は必要であろう。しかし、12、3歳をすぎてからは、教師がかれの義務をおこなうとすれば、強制または束縛は、教育のどんな部分を遂行するにも、かりにも必要だということはめったにありえない。」(註4)

という教育認識をもちつつ、教師の収入源を彼の業績とは無関係な固定した俸給におかせるべきではなく、講義に出席した学生の謝礼におけと主張する。こうすれば、できるだけ多くの学生を聴講させるべく教師は互いに努力し競争するぞろろとスミスはみた訳である。自らの授業を省みながら、この議論を生徒に紹介して意見を引き出してみられたい。

とまれ、今日生じている多くの社会問題がスミスの考究した問題のいわば応用問題として解決をせまられていることはまちがいのなのであって、社会科教育（倫社と政経教育）の中で、スミスをどう教材として位置づけるかをめぐって、これから自由競争（ノ）で大いに論じられて然るべきであるとのコラムニスト風の問題提起をしておくことにする。（註5）

（註1） 川上源太郎『続・親の顔が見たい』44頁

（註2） スコットランド歴史学派とルソーとの対比については、水田洋『アダム・スミス研究』233頁-287頁。スミスとルソーについては、木崎喜代治「ルソーとスミス」『季刊社会思想』3-1号所収。スミスとカントについては、浜田義文「カントとスミス」『季刊社会思想』3-1号所収。同「ハチスン・スミス・カント」『思想』617号所収。

（註3） 大河内一男著作集3『スミスとリスト』102頁-169頁
高島善哉『アダム・スミス』82頁-84頁

（註4） 水田洋訳『国富論』<下>183頁

（註5） 水田洋「アダム・スミスの独白」『エコノミスト』'75・11・10臨時増刊号所収 — は、スミスの思想内容の実に巧みな平明化であり、壮大なる学問思想の平明化はかくの如きプロの仕事にまかせたが佳いのではないか？

思想と人間変革

私立駒沢大学高等学校 市川 弘 乗

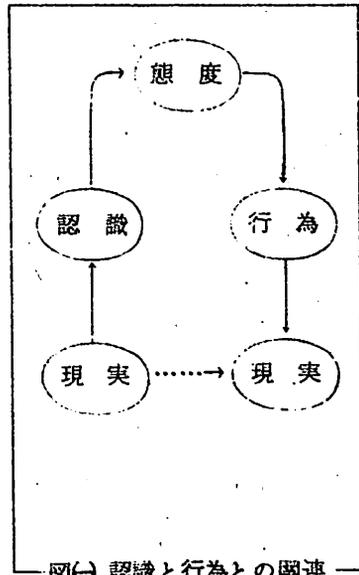
1. ねらい

「倫・社」は他の科目にくらべると、特異な性格をもっている。生徒にとって、たとえば、英語・国語・数学といえ、科目の性格や学習の仕方
も暗黙の了解ずみということになっているが、「倫・社」については、そ
うした共通の了解的な性格がいまのところない。したがって一年間の授業
のはじめに、担当の教員はそれぞれ工夫をこらして、オリエンテーション
をおこなっているとおもわれる。稿者もここ二、三年来本稿に報告するよ
うな形で科目の案内をしている。内容が常識的で学的評価の対象にすらな
りえないであろうことをおそれるのであるが、一応の現場報告としたい。

VVV

2. 認識の役割

人間の行動は、すべて環境への適応
をめざした適応的行動といえる。行為
を現実その他との関連で図に示すと図
(→)のようなものとなろうか。ある現実
を認識したとき、その認識にしたがっ
て一定の態度が喚起され、その態度が
現実への一定の行為となってあらわれ
る。その行為が失敗したとすれば、そ
れは現実についての認識がまちがっ
ていたからであり、成功したとすれば、
その限りにおいて認識が正しかったこ
とになる。行為はこのように認識のあ
り方によって決定的な影響をうけてい
るのである。このことは自然科学のば



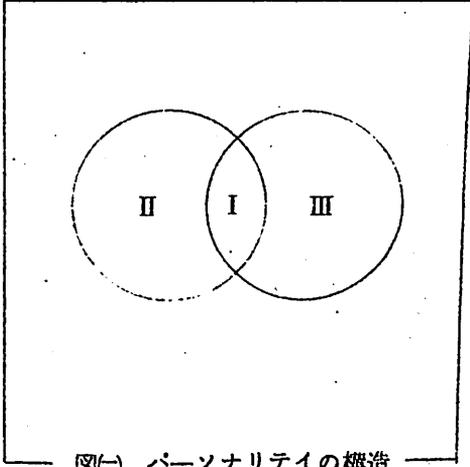
図(→) 認識と行為との関連

あい典型的にあらわれている。人間が自然をより深く認識すればするほど人間の創造的行為も高められてくる。認識と行為との間に技術が媒介しているけれども、認識と行為との関連において、認識のもつ重大な役割は明確におさえておきたい。さらに自然科学のばあい、あらかじめ仮説をたてそれを実験、観察、観測によってたしかめる。もし仮説の通りの結果が出れば、その仮説は証明されたことになり、理論となる。仮説のとおりの結果が出なければ、また改めて考え方、手順、方法といった人間の側に問題がないかを検討しなおして、さらに対象に問いかけていく。自然についての科学的認識のばあい問題となるのは、つねに認識の側 — 人間 — である。考え方、とりくむ姿勢、手順、方法等が、つねに対象である自然の前で、検討され、変革されていくのである。

8. 態度について

認識は上述のように認識主体のあり方によって決定されるが、とくに態度のもつ重要性は無視できない。例えば、「ゆうれいの正体みたり枯尾花」という川柳のように、こわいこわいと思ひながら暗い夜道を歩いていると、枯れた草むらにでさえ、びっくりして腰をぬかしてしまう。ひがみっぼい人は万事をひがみっぼくうけとり、ひがんだ姿勢で行動するので、環境との間がうまくいかない。自分のひがみっぼさに原因があることを認めたららないので、環境がそのようになっているのだと思ひこみ、自分の歪んだ認識に固執をつよめてしまう。このばあい人は図(-)のような矢印の方向ではなく、ある態度が、その態度に合ったように対象を歪めて認識し、そして行動するという回路をとっている。現実の日常生活でのわたしたちの行動はほとんどこの回路をとっている。この態度のかたよりについて人は、意識していないのが通例である。自分のかたよった態度を与えられたものとして、その上に安らって、何らの疑いももたない。それどころか、それを他人から指摘されると逆にいきり出しかねない。それを図(=)でみると、IIは自分はどうであると自分で意識している部分である。IIIは他人には、

はっきり見えるが、自分では意識していない部分であり、行動にあらわれ、したがって他人にはっきりとみえる部分である。自分にとっては、むしろ都合のわるい部分である。対象認識の歪みをもたらすのは、この部分と関連している。Iは自分もそうだと思い、他人も、そ



図(一) パーソナリティの構造

uv

のように見ている自分の性格について共通の理解が成立している部分である。Iの領域のひろいことが共同社会に生きる人間にとって望ましいことはいうまでもない。Iの領域が相互に広がっていくことは相互理解が深まり、人間関係のふかまりを意味する。Iを拡大することはIIとIIIの部分をそれぞれ拡大することに他ならないのであるが、IIのばあいは積極的に自分を表現することを通して他人の理解を得ていくことであり、IIIの領域の拡大については、IIIをIIのなかにとりこんでいくといった意識化の過程によると考えられる。ところでIIIの領域の意識化には自分にとって認めたくない性格もっているので、自分にとってそれをみとめることは非常な苦痛と抵抗が伴わずにはない。したがって強制して、しゃにむにそれをうけいれさせるか、最大限許容的な状況設定の中で意識化させていく方法が考えられる。「世界」の中において、つねに自分の態度決定を迫られているわたしたちの生活の中で、こうした自我の変革は、自然科学的認識のところでも触れたように避けてとおることはできない問題であろう。

さらに意識以前のこうした態度の形成のメカニズムについては、個人の生育歴、環境、歴史的状況と関連させて概説しておくのがよいと思われる。

そのさい、ベーコンの「新機関」のイドラについて、オールポートの「偏見の心理」、管理社会における人間の意識操作の例をとりあげて解説すると効果的であろう。

4. 「つくられるもの」から「つくるもの」へ

態度形成のメカニズムについて知ることは、作られたものから作るものへ、歴史の客体から歴史の主体への人間変革のもんだいでもある。

さて思想は、現実についての解釈であること、①それらのさまざまな思想の理論的精緻さや厳密さから十分に学び、自分の思考力をきたえていかなばならないが、②それらの解釈はちょうど色眼鏡をとおして外界を見るのに似ている。いろんな眼鏡をとおして外界を見ることによって、自分の眼鏡もまたひとつの見方であることに気がつくであろう。③ある思想とそれをになった思想家の生きた時代を見ることによって、その思想の成立の必然性と、その思想が時代の制約を、いかに、どのていどりこえることができたか、またのりこえきれなかったかを、すなわち作られたものからいかにして作るものに変成しえたかを、わたしたちの自我変革＝認識の問題と関連させながら先哲の思想形成の営みが、ちがった時代の他人の事ではなくて、それぞれひとりひとりのわたしたちの問題であること — 時代の状況の否定的状況の中で混迷の中から、その状況をのりこえていくための — わたしたちの仕事でもあることを自覚させたい。「倫・社」はそうした営みの手がかりのひとつともなろうというところにねらいがある。

参考文献

「偏見の心理」 G・W・オールポート、培風館

「集団・組織・リーダーシップ」 培風館

「人間のがわから」小田切秀雄編 産能短大

「個人と国家」の問題を考える手がかり

東京都立白鷗高等学校 坂本 清治

1. とりあげる理由

"あなたにとって〇〇とは何か"という問いかけが、最近よく行なわれる。生徒の討論の中にも"わたしにとって高校・生徒会とは何か"とか、"わたしにとって、青春・愛とは何か"といった思索や主張がよく行われている。これは、人間が全く孤立した存在でなく、社会的存在であり、その社会関係のなかで"われ"の主体性をどのようにとらえるか、という問題であり、あるいは、社会一般がどうであれ、その主体である"われ"が意味を与えうるところのものを問う実存的な発想であろう。確かに、われいかに生きるか、と問うとき、自分がよって立っている、或は身を浸している社会集団との関連なしには考えられない。その社会集団が、具体的なメンバー構成をもっているとか、face to faceの関係にある場合には、帰属意識はかなり明確で、例えば"わたしと家族"、"わたしと仲間"ではなく、"わたしの家族"、"わたしの仲間"と意識される。しかし、いわゆる機能的集団では、その社会集団の成員であることによって現実の生活面で強大な影響を受けていても、実感として帰属意識は希薄であるか、皆無に等しい。特に"国家"は、政治・経済生活のみならず、教育・科学・芸術・思想といった面にまで影響力をもっている。しかし、"わが国"と意識されるのは、単なる他国との区分のときか、国家意思とわたくしの個人意思とが対立するような場合で、一方的に"われ"が意識されることが多い。今この問題を難しい国家論としてでなく、"わたしにとって国家とは"と考えながら、生徒が身近な問題として思考していく端緒をつくる。

2. ア。「わたしの尊重」ではなく「個人の尊重」

資料①私は常からこう考えています。第一にあなたがたは自分の個性が発

展できるような場所に尻を落ちつけるべく、自分とぴったりと合った仕事を発見するまで邁進しなければ一生の不幸であると。しかし自分がそれだけの個性を尊重しようように、社会から許されるならば、他人に対してもその個性を認めて、彼らの傾向を尊重するのが理の当然になってくるでしょう。それが必要でかつ正しいこととしか私には見えません。自分は天性右を向いているから、彼奴が左を向いているのはけしからんというのは不都合じゃないかと思うのです。…略…近ごろ自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしてもかまわないという符徴に使うようですが、その中にははなはだ怪しいのがたくさんあります。彼らは自分の自我をあくまで尊重するようなことをいいながら、他人の自我に至っては毫も認めないのです。いやしくも公平の眼を具し正義の観念をもつ以上は、自分の幸福のために自分の個性を発展して行くと同時に、その自由を他にも与えなければすまんことだと私は信じて疑わないのです。われわれは他が自己の幸福のために、おのれの個性を勝手に発展するのを、相当の理由なくして妨害してはならないのであります。(夏目漱石『私の個人主義』)

ここで、漱石は、個性の発展が幸福につながるものであり、その個性の発展のためには個人の自由が尊重されなければならないといっている。しかしその自由は、決して勝手気ままな自由ではなく、同時に他のすべての個人の自由を尊重する義務が伴うもの、つまり自由と義務が表裏一体であることをといている。さらに、資料の「自分がそれだけの個性を尊重しようように、社会から許されるならば、他人に対してもその個性を認めて」という、「社会から許される」とは具体的にどういうことか、また「相当の理由なくして妨害してはならないのであります」の「相当な理由」とは何かを考えてみる。そこに共通の利害と社会規範の問題があり、それを守っていくべき社会集団つまり国家というものが浮きあがってくるのではないか。全く他を無視した自由は社会に存在しえないのである

イ。「国家のため」と「個人の自由」

漱石は、『私の個人主義』の中で、「いよいよ戦争が起こった時とか、危急存亡の場合とかになれば、考えられる頭の人、考えなくてはならぬ人格の修養の積んだ人は自然そちらへ向いていくわけで、個人の自由を束縛し個人の活動を切り詰めても、国家のために尽くすようになるのは天然自然とっていい」といっている。はたして、「天然自然」かは別として、国家が重大問題に直面したとき、この国家と個人の問題が真剣に問われるのは事実であろう。

資料②（『チボ一家の人々』のヨーロッパが戦争の危機に直面している折、暴力絶対反対から戦争を拒否する弟と国民としての服従を説く兄の議論）
「ぼくには、暴力が認められません。たとい暴力に対する場合でも、ぼくは心に、暴力の下地がひそみそうなわずかなすきまさえ残したくないのです。ぼくは、あらゆる戦争を拒否します。たといそれが＜正しい＞にせよ＜正しからざる＞にせよ、たとえどんな戦争でも。どこの国がおこしたのか、どういう動機にでたものにせよ、……（＜ぼくは、これまで自分が命を賭してきた同胞愛の理想を勝利にみちびくためであろうとも、断じて憎悪や虐殺の連続にはたよりたくないと思っているんだ＞）…（略）…たといぼくが、従順な、国家の制度に満足している国民であったにしても、ぼくは、国家の条理が、このぼくに、ぼくが精神的義務と考えているところのものを侵させようとするのをがまんできません。自分の治めている国民の、その良心までも強制する権利があるかのように思っている国家には、国民の協力が得られるはずがありません」

「わが国のような民主主義的な政府は、一たといその政策が少数反対派の反対をうけているにしても — 政府が政権を握っているということ自体、大多数の意思を正当に代表していることにはかならないんだ。動員されて召集に応ずるというのも、つまりそうした国民の総意に従うことなんだ。たとい、政権を握っている政府の政策にたいする個人的意見がどうであ

ろうと!」

「そうした大多数が、いったいなんの名において、正当な主張までも犠牲にし、またきわめて神聖な自分自身の確信よりも、国民としての服従のほうを先にしなければならないのかしら？」

「社会契約の名においてだ。…(略)…われらは、個人としては、弱く、孤立していて、何も持っていないんだ。われらの力にしても、われらの力の大部分、そしてわれらがそうした力を有効につかわせてもらえているというのも、それは、われらをまとめ、われらの活動力に秩序をあたえてくれている社会的集団のおかげなんだ。…(略)…われらはすべて国家的共同体の一員だ。その結果、われらは、実際にその共同体に従属している。われらとその共同体 — つまりわれらにわれらたることをゆるし、われらをしてほぼ完全に安らかな生活をするをゆるし、そのわく内でわれらに文化人としての生活を営むことをゆるしてくれている — その共同体…今後人間にして社会生活をつづけていくかぎり、そうした社会にたいし、かって気ままに自分たちの義務から解放されようなどと考えることはゆるされないんだ。自分たちを保護してくれ、自分たちをその恩沢に浴させてくれるそうした社会にたいして」

拔萃が長くなったが、個人として自由に考えて見た場合、自分の確信こそ正しく、國家の意思を容認できないという判断と国民としての服従の義務の問題が争点になっている。これと同じ問題をプラトンの『クリトン』から考察してみることもできる。

3. まとめ いわゆる "共同体の一員" としての自覚がかなり強い家族や仲間集団の場合は後者の論理に近づきやすいが、その自覚が希薄であり、または、共同体から疎外されているという意識が強い場合は対立的になりやすいのであろう。ここで、急ぎ当否の判断を迫るのではなく、社会規範と個人の権利の確保の相関的な面を考えていくと共に "わたしたちの社会" と誇り、愛しうる民主的社会とは、と考へ、さらに、そのような社会の一員として積極的に参画する心がまえをもたせたい。

第4分科会 日本の思想

研究経過報告

第4分科会は当初より世話人を含めてたった3人であったので、なんとかもう少し人数を増やそうということが、世話人のさし迫った仕事になっていました。

夏休み中に、「東京都公立学校教職員名簿」を参照して、各学校の倫社の教員の名簿を作成しました。

しかしその名簿の中で、ふだん都倫研の例会にあまり出席されていない先生方に積極的に呼びかけることをしなければならなかったのですが、世話人はそれを怠ってしまいました。

第4分科会の研究会が一度も開けなかったのは、世話人の怠慢にもよるが、文献の読み合わせをやるだけの人数の参加が不可能であったことによるもので残念でなりません。

もし来年も第4分科会の人数が昨年同様に少ない場合は、なんとか人数をもっと集めることを考えなければ分科会としての活動が出来ないだろう。

世話人として第3分科会の討論会に参加して感じたことは、若い先生方が現在の都倫研の殊に研究体制などにかかなり批判的であることです。

今後、都倫研の研究体制を充実した生々としたものにするには、若い先生方の意見を少しでも吸収していけるような体制づくりを考えていかなければならないだろう。(佐藤・鼎)

空 海

都立広尾高等学校 寺 島 甲 祐

1. このテーマをとりあげた理由

空海ほど日本文化史上大きな足跡を残した人はいない。明治以前の日本人は空海をイエスのように奇跡を行なった人、レオナルド・ダ・ヴィンチ以上の万能の人として尊敬してきたのである。彼は密教という宗派を確立し、宣布したばかりでなく、日本で初めての庶民教育の私学「綜芸種智院」を開き、あるいは池を造築し、橋を架け、道を拓き、多くの人を救い、詩を創り、仏像・仏画を描き、「いろは歌」・カナ文字を創造して日本文化の向上にすばらしい足跡をのこして、日本文化の母とたたえられたのである。明治以後の欧化的風潮や排仏毀釈によって、空海は忘れられ、祈禱仏教を創始した俗物とさえ言われるようになって来たが、これでは一千年間空海を最大の聖者と仰いで来たわれわれ祖先に対して申訳ないことである。今、空海の著書に少しでも触れて見る時、彼ほどの宗教的天才・独創的思想家を日本に於いて見ることが出来ないという感嘆をまぬかれないのである。

2. 空海の風景

梅原猛氏は空海の生涯を四期に分けている。彼が讃岐の多度郡屏風ケ浦に生まれてから、24歳のときに「三教指帰」を書いて出家の決意を宣言するまでを第一期、そして、その後唐に留学し、その留学の成果を「^{よほう}講来目録」にして平城天皇に提出するときまで、すなわち24歳から33歳のときまでを第二期、そしてそのときから、彼の輝かしき活躍がはじまり、45歳にして、天皇に願って、高野山に修行の場所として金剛峯寺を建てるときまでを第三期、そして、それ以後62歳にして高野山において入寂するときまでを第四期としている。その間、彼に大きな影響を与えた人物は、少年時代においては叔父の^{あとのおおたり}阿刀大足、青年時代には^{こくう}仏教を教え、虚空

ぞうくもんじほう

ごんぞう

蔵求聞持法の秘法を授けた勤操大徳、唐留学においては密教の大法を授け

遍照金剛の名を与え、真言付法第八祖に列せしめた恵果阿闍梨である。彼は三教指帰に述べられているように「進まむと欲すれば才無し、將に退かむとすれば逼め有り、進退両の間、何ぞ歎息すること夥き」と嘆き、矛盾におちいて、この世から退くことを、僧になることを考えたのである。

また「秘蔵宝鑰」のはじめに語られているように、「生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し。」と嘆き、人生そのものへの懐疑の解決を仏教に求めようとしたのである。

この長い悩みと懐疑の中から、彼は真理らしいものを発見する。それが大日経である。この經典には「菩提とは実の如く自心を知ることである。しかも実の如く自心を知るものを名づけて一切智々（はとけ）と称する」と説かれており、菩提の世界を端的にものがたり、理論と実践との両面から成仏の方法を巨細に示している。これこそ彼が久しく願ひ求めたものである。空海は死よりも生を好む体質の男であったようである。彼は奈良仏教にみられるような解脱だけをもって修業の目的とする教えには納得できなかったようである。彼は釈迦の教えといわれる諸經典が解脱とは人間の本来の性として与えられている欲望を否定するものばかりであることに不満であったといえる。死（無余涅槃）のみが貴いものではなく、生命もまた宇宙の実在である以上、正當に位置づけられるべきではないかと思うようになったのである。生命が正當に位置づけられれば、生命の当然の属性である煩惱も宇宙の実在として、毘盧遮那佛（大日如来）の一表現ではないかとまで思いつめたのであろう。この思いつめが後年、空海の密教の体系における根本經典となった理趣教（般若波羅蜜多理趣品）の「妙適清淨の句、是普菩薩の位なり」（妙適とは唐語における男女交合による恍惚の境地をいう。男女交合の恍惚の境地は本質として清淨であり、そのまま普菩薩の位である）という理解によって、彼の思想は完成されていくのである。空海は生命や煩惱をありのまま肯定する性格の人間だったのである。

密教とは

密教は生命の哲学・思想であるといわれ、空海が六・七世紀ごろインドで成立した「大日経」と「金剛頂教」の二つの経典にもとづいて独自の体系をつくりあげたものであるとされている。そして、この二つの経典は大日如来が説いたものであるとする。ゴータマ仏陀は永遠の理法である法をさとして仏陀となられたのであるが、人間ゴータマの背後にはゴータマを仏陀たらしめた法を身体とする絶対の仏陀が実在しなければならないことになる。その法身が大日如来なのである。空海は「広付法伝」で「永遠に過去・未来・現在の三世をつらねて存在する清浄にして妙なる法身で、この宇宙全体を絶対智とする如来であって、ただそれ自体のために永遠に真理を説きつづけている仏」であるとしている。それが大日如来とされるのは、空海の所見に従えば、この如来は暗黒をあまねく明らかにし、生きとし生けるものを生かし、はたらかし、永遠の光を照しつづけるものであるからである。すなわち、この宇宙の大生命である法身大日如来は、太陽の光のようにあらゆる生命を生かし育てると共に、われわれ自身の生命そのものとして内在し、あらゆる諸善を生ぜしめるものでもある。この大日如来の秘密にして荘嚴なる宇宙の大生命を密というのである。かくして、廣大無辺の大日如来の知恵と、一切万有の活動として顕現する慈悲は金剛界（精神的世界）と胎藏界（物質的世界）にみなぎるのであるが、われわれは容易にそれを把握できないものである。空海は「請来目録」のなかで「しかのみならず密蔵深玄にして翰墨に載せがたし。さらに図画を仮って悟らざるに開示す」と述べているように、密教の教えは奥深くて言語文字で表現することは困難であるから、かりに図画をもって宇宙の大生命を知らない人々に示すのである、という。これが曼荼羅である。空海の真言密教では金剛界マンダラと胎藏界マンダラの二元的世界を図画によって説いているが、この両界は絶対者たる大日如来の知恵と慈悲の世界を幾何学的様式によって芸術的に表現し、それによって絶対者の人格がわれわれの住

んでいる迷いの衆生界とどのようにかかわっているかを明らかにしている
のである。

秘密莊嚴心

密教はマンダラの世界を説く教えであるが、それは真実在であっても、われわれにとってまだ開顕されていないから秘密の世界である。ではどうすればこの秘密の世界に到達することができるのであろうか。空海は秘密の世界は他に求めるべきではなく、あくまで、自分自身に求めるべきであって、心の内奥に深く秘められて内在している秘密莊嚴心に達するように実存を高めなければならないとしている。そして、この超越的にして内在的、内在的にして超越的な絶対者と交通する障害となるものが根源的な無知であるとされる。(秘密曼荼羅十住心論) 根源的無知がもととなって人間の煩惱は現出し、さまざまな虚妄の世界が展開するのである。しかし、われわれの心の世界にはあらゆる世界が共存しているのであって、われわれはこれを否定することは出来ない。空海は「菩提とはありのままに、みずからの心を知ることである」と述べて、第一住心である異生^ニ羶^ニ羊^ニ心、すなわち倫理以前の世界から、第二住心の愚童持齋心、すなわち、倫理的世界へ、そして第三住心の宗教心の目ざめから、さらに仏教の世界(第四住心~第十住心)へと進んでゆく階梯を明らかにしている。そして、第十住心の秘密莊嚴心、すなわち、マンダラ世界において、絶対者たる生命の根源に達するとするのである。この十住心論はヘーゲルの精神現象学にも比せられる人間精神の発展に壮大な鳥瞰図を与えたものであるといえるのである。

即身成仏

このように、自己の宗教的な人格の完成は自己においてマンダラ世界を自覚し実現することである。しかし、われわれは、自覚の本体である大日如来とわれわれの本性とが本来同一であることを十分認識していない。空海は龍樹の「菩提心論」を好んで引用して、即身成仏の現証を保証してい

る。「もし人、仏縁を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速やかに大覚の位を証す」ことが出来るというのである。それ故、密教ではこの菩提心を捨てることはみずからの精神的生命を絶つことであるとす。前述のごとく空海は色心不二、色心為本を主張して、肉体も精神も絶対者たる大日如来の象徴であり、絶対者そのものの本性に通じているとしている。この膿血の出る肉体、飲食物を与えて養う肉血のかたまりに尊い仏が顕われているのである。だから、大日如来を礼拝し、釈迦如来を礼拝しても、そとに向かって求めてはならず、この肉体のままにただちに仏となること出来ることを信じなければならない。あらゆる価値を備えた真理は父母所生の身の中にあるのである。これが即身成仏の教えなのである。それゆえ空海は「草木さえも成仏するのである。どうして生けるもの（有情）が成仏しないことがあるだろうか」（^{うんじぎ}半字義）とか、あるいは「三種世間（自然界・人間界・宗教的生命の世界）はみなこれ仏体である」（日）とかいうのである。

8. まとめ

空海の教えはあまりに偉大で哲学的であるので簡単に要約することは容易ではないし、密教の実践理論も理解しがたいが、これを避けて通り、密教は加持祈禱仏教であるときめつけて終ってはならないであろう。加持という大宇宙と一体となる行の意味をぬきにして、祈禱による現世利益をこととする仏教であるとするのは空海を冒瀆するものである。真の日本仏教は鎌倉仏教において確立したと断定することは、それ以前の日本仏教の大きさと深さを知らないともいえるであろう。空海・最澄を学ばずして日本仏教の真髄は把握できないのではないかと考えるのである。この点に留意して生徒を指導したいものである。

吉田松陰

都立葛飾野高等学校 吉澤正晶

1. この人物をとりあげる理由および学習のねらい

本年度10月末、修学旅行の一日を萩に宿泊することになった。いうまでもなく、吉田松陰を生み、松下村塾跡をいまに残し、高杉晋作、久坂玄瑞ほか多数の幕末の志士、伊藤博文ら明治の功臣たちを輩出させた地である。この土地を踏み、まず第一に、吉田松陰の人物に、その文献資料を通して接することを得させたかった。事前の学習指導から、本年度研究主題に沿って教材化を考えたものを、「日本の思想」学習指導実践報告としたい。

この人物から学ばせたい重要な点は、「和漢の群書を大量かつ精細に読破していった。…その学識は二十歳にしてすでに剗り知れぬ博学を示した」という点もあるが、むしろ「和漢にわたる往時の出来事と、そこに登場する多くの古人の体験思索とを、つねに彼自身が現実に生きていた社会で、また、現実の自己の人生に照し合せて、これらを活きた学問として吸収していった。学問ということをも単に知的に吸収するのではなく、自己の心情の奥底で受けとめ、もって精神修養の糧とした点において、彼は抜群の才幹を示した。」(小田村寅二郎編『日本思想の系譜』、同氏の文から)という所にある。即ち本当の学問とは何か、がここでの学習のねらいであり、本当の学問への志を立てさせることが、ここでの指導の最高目標である。

2. 文献資料の教材化

今日の高校生には漢文の原文のままでは無理なので、現代語訳を作ることも考えなければならない。

1) 『留魂録』から(訳)

一、僕は去年以来、心のあり方が多く変って、一々教えきれないほどである。なかでも、何よりも僕の心をひきつけて、そのようにあらねばなら

いと心がけさせたのは、趙の賢高であり、楚の屈平であった。このことは諸君の知っていることである。…しかしながら、五月十一日に関東に行くことを聞かされてからは、またひとつの誠という字に心を用いるようになった。時に子遠（入江杉蔵）は死の決意をうながしてきたが、僕はこれを用いず、一枚の白布を求めて、孟子の「至誠にして動かざるものは未だこれあらざるなり」という一句を書きつけ、手ぬぐいに縫いつけ、それを持って江戸に来て、これを評定所に留めおいたのも自分の心をあらわすものであった。……

一、僕の性質は激しさや、怒りののしるようなことは少く、努めて時勢に従い人情に適するようにしている。…要は内に省みてやましくないということである。そもそもまた、人を知り、機を見ることが大切である。僕の得失は、まさに棺をおおって後に、人の議論に任せるだけである。

（以下、取調べの経過などを記す。）

一、僕はこのたびのことでは、初めから生きるためのくふうもしなければ死を必然とも思っていなかった。ただ、誠が通じるか通じないかということで、天命の自然にまかせたのである。七月九日に至ってはほ死を予期した。……

一、今日死を覚悟して安心しているのは、四季の循環において納得する所があった。…僕は年を数えて三十歳になる。一事を成しとげることもなくて死に、あたかも農事で稲のまだ成長もせず、実らずというのに似ているから、残念だと思わないでもない。しかし僕自身としていうなら、これもまた秀実の時である。必ずしも悲しむことはない。なぜならば、人間の寿命は定めのないものである。…僕は三十、四季はもう備わっている。成長もし、また実りもした。それが実のない籾であるか、実の入った穂であるかは僕の知る所ではない。もし同志の士に、僕の微意を憐れんで、それを受けつぐ人があるならば、即ち後に蒔くことのできる種子はまだ絶えなかったということ、おのずから収穫のあった年に恥じないことになる。

同志諸君よ、このことを考えてほしい。

(以下、略)

十月二十六日黄昏書す

二十一回猛士

2) 父・叔父・兄宛永訣の書簡(訳)

平生の学問が浅薄でまごころが天地を感動させることができず、非常の変に立ち到りました。さぞさぞ御愁傷もなされることと拝察申し上げます。

親思ふこゝろにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらむ

そうではありますが、去年十一月六日さし上げておきました書を、とくと御覧下されば、それほどまでに御愁傷にも及びませんと存じ上げます。なお又当五月出立の節に、心におもう事を一々申し上げましたことについて、いまさら何も思い残す事はございません。この度漢文で書きました友人たちに語る書も、転覧下さるようにと存じます。幕府は正しい議論をまるで用いようとはせず、外敵は勝手に府内にのさばっていますが、日本の国はまだ地に落ちず、上に聖天子あり、下にまごころの正義の人がいっぱいおりますから、天下の事もあまり御力落しのことはないように願ひ上げます。十分に御気持を御大切になされ、長生きをなされますように。以上

十月二十日認めおく

父上様 膝下

叔父上様 膝下

寅二郎百拜

兄上様 座下

両母上様(注 実母、養母)十分に御体を御大切になされますように。私は殺されましようとも、首までも葬ってくれる人があれば、まだ世間の人には棄てられてはいないものと御喜び下さるよう願ひ上げます。児玉・小田村・久坂の三人の妹へ五月に申しておきましたことを、忘れぬように申し聞かせて下さい。くれぐれも人をかなしむよりは、自ら勤めることが肝要でございます。私の首は江戸に葬り、家の祭事には私が平生使っておりました鏡と、去年十一月六日にさし上げました書を神体となされます

ようお頼み申し上げます。硯は嘉永二年の七月かに、下関を廻った折に買
い求めたものです。十年あまりも著述を助けてくれた手がらのあるもので
す。松陰二十一回猛士とだけ記して下さいようお頼み申し上げます。

3) 漢詩 (書下し)

○夢中には夢を真となし、醒後忽ち幻となる。

何れの時にか大夢醒め、人生の患を脱却せん。(『縛吾集』より)

○「家大人に別れ奉る」(略)

4) 和歌

下田より囚人となりて江戸に送られし時、泉岳寺の前を過ぎ莚士に手
向け侍る

かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂

贈諸妹

心あれや人の母たる人達よかゝらん事は武士の常

今更に言の葉草もなかりけり五月雨降るゝ時をこそ待て

帰らじと思ひさだめし旅なればひとしほぬるゝ涙松かな

安芸の国昔ながらの山川にはづかしからぬますらをの旅

道守る人も時には埋もれどもみちしたえねばあらはれもせめ

3. まとめ—指導上の留意点

明治以後の西洋文明輸入に先立って、幕末に、松陰のような鋭敏な先覚
的思想家があった。しかもこのような人は、単に理論的な理論家にとどま
らず、全人格的体験に本づく表現を残している。このような類の著作や言
行の一部にでもふれて、自己の人格形成の課題に関心をもたせることは、
倫・社会学指導の要諦である。このような文献資料は、はじめから理くつ
をつけて説明するのではなく、提示して味読させ、どこまで味到できるかの
試しとしてよいと思う。古典に親しませる指導には、このような方法も必
要であると思う。なお、本年度生徒が選択した「自主研究テーマ」の中に、
「人民の友としての松陰」、その人間平等観に注目した小論文の提出が、
一男子生徒にあったことを報告しておきます。

伝統と近代的自我

都立江戸川高等学校 佐藤哲男

<学習のねらい>

日本の思想、近代以降をあつかうに当って諸思想、思想家を漫然と羅列するのではなく、思想の流れ、変化に一本の柱を立てその視点から学習させて行きたい。

そこで立てた柱が「伝統と近代的自我」である。これは別の形では明治以降の新旧思想の対立、または国権と民権思想の葛藤ともなり、一人の思想家、たとえば福沢諭吉をとってもその人生に民権から国権へという思想の変化が見られる。今一つ、現代日本の思想的課題という点から考えよう。これは現代日本の思想状況ともかかわり、その思想状況も新と旧の対立が含まれ、あるいは個人と国家、私権と公権の問題も明治以来の国権と民権の延長上にもとらえることが出来よう。ただ一つの留意点として、単純に合理主義、個人主義の確立によって問題が解決出来るものではない。砂のようなバラバラな個人を、核家族を連帯させるため2千年来の豊穡な伝統から何を学びとるかがある。したがって、近代的自我の確立という未だ解決されていない問題点とともに伝統思想との対立、かつ総合という点からいくつかを眺めたい。

<具体的展開事項>

① 国民道徳への要請……これが要請される背景を急速な欧化に反発する伝統思想の台頭とその優越という点でとらえさせる。さらにその主流となった国家主義の具体的表現として「教育勅語」が資料に使える。

「朕惟フニ……」の世代に属する両親から色々な思い出話をこの導入に使うのもよい。その内容には「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相偕シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ……」とあり家族の、公

衆のモラルとしても今日でも立派に通用するものである。が、それはつまり「……以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」のものに留意する。また、伝統思想というより行動規範として日本の誇るべきものに武士道がある。

(新渡戸稲造「武士道」) その自律的武士道などの日本人の精神を空洞化させる作用を果したものの一つに教育勅語があげられる。明治20年代、当時の思想的混乱を勅語という形でイデオロギー統制を加え、政府が封建思想としての「忠君」を天皇崇拜の感情に挿入したものであった。……関連して内村の不敬事件があげられる。

㊤ 夏目漱石……相剋する近代的自我

伝統的儒教倫理から近代的自我の追求へ、封建的人間観と近代的自我の対立相剋と、自我の根底にひそむエゴイズムを漱石の作品を通して理解させる。現国とも連絡し、「三四郎」「それから」「こころ」など平易な文章から倫社として考えさせられるものが多い。とくに、無意識の偽善、などは教師、生徒ともに胸の底深く秘められるものである。

苦悩し挫折した近代的自我は東洋的禪の境地を求める。倫理的に近代的自我を追求して「自己本位」①の立場を形成した漱石も晩年には「則天去私」の境地にたどり着こうとした。則天去私とは、私心を去り大自然の理法に生きようというもので、若き日の参禅の経験が彼を東洋的禪の世界へ導いたといえる。

①の資料「私はこの自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強くなりました。彼等何者ぞやと感慨が出ました。今まで茫然と自失していた私に、ここに立って、この道からこう行かなければならないと指図をして呉れたものは実にこの自己本位の四字なのであります。自白すれば私はその四字から新たに出立したのであります」……ロンドン滞在中にノイローゼ気味になった漱石は多分、西洋人に対するコンプレックスがあったと思われる、その弱点をいわば西洋産の「自己本位」の発想で逆に切り返したものである。

② 純粹經驗……自我の根底を求めて

東西思想の融合という時、西田幾多郎の哲学がとり上げられる。

すでに西洋思想のところで学んだように、デカルト以来西洋の哲学は考える我（主観）と見られる対象（客観）の対立を前提として出発している。これに対し西田は主観と客観、精神と物質という対立、分裂したものからではなく、対立分裂以前の、対立分裂の根底にあって、かつそれらを包んでいるものを求め、そこから出発しようとした。

その主観と客観の未分ものを名づけて純粹經驗という、それには東洋的な考え方、とくに禅が大きい影響を占めていることは西田の日記などによって理解される。

資料① 「私は何の影響によったかは知らないが早くから^{から}実在は現実そのままのものでなければならぬ、いわゆる物質の世界というごときものは、これから考えられたものに過ぎないという考えをもっていた。まだ高等学校の学生であったころ、金沢の街を歩きながら、夢みるごとくかかる考えに耽ったことがいま思い出される。そのころの考えがこの毒の基ともなったかと思う。」（「善の研究」改版の序）

ここに西田哲学の萌芽が見られる。人生とは、人間とは何かという問題に悩んでいた彼の若いころの思想形成がうかがわれる。

資料② 「……純粹というのは、普通に經驗といっているものもその実は何等かの思想を交えているから、毫も思慮分別を加えない、真に經驗そのままの状態をいうのである。例えば、色を見、音を聞く刹那、未だこれが外物の作用であるとか、我がこれを感じているとかいうような考えのないのみならず、この色、この音は何であるという判断すら加わらない前をいうのである」（「善の研究」）

これは主観もなく客観の別もなく、知識とその対象が全く一致した状態で、その点を彼の哲学の出発点としたものである。では西田のように禅をやらなければ「純粹經驗」は理解出来ないものだろうか。……高校生にとって

どうやさしく理解しようか。分かりやすく考えると、われわれが無心に一心不乱に勉強したり、スポーツに熱中したりしていることであり、その無我の境地が薄いのである。たとえばピアニストが演奏に熱中している、ここでは主観たるピアニストと対象、客観が主客一体となり渾然として曲を演奏するのである。画家と絵画もそうである。自分の行為を他人がどう見るだろうかなど雑念が入っては不純なものになる。……このような全人格的活動、まじめな自己の要求の満足、人格の実現が善となるのである。経験を離れた理性のみではなく、経験から生じた主観的な欲望というように対立、分裂したものでもないのである。

㊦ 人間としての倫理学……個人主義的人間観の克服 西田の哲学とともに和辻哲郎の倫理学が東西の融合にとり上げられる。

資料① 「倫理学を「人間」の学として規定しようとする試みの第一の意義は、倫理学を単に個人意識の問題とする近世の誤謬から脱却することであるこの誤謬は近世の個人主義的人間観に基づいている」(倫理学)

和辻は考える我(理性的自我)偏重の個人主義的人間観から脱却するために人間のもつ個と全体の二重構造の自覚を唱えた。そこから来る共同的存在としての人間、間柄的倫理の確立がバラバラになる個人を連帯させるものとした。

<まとめ>

① 生徒に問題意識を持たせ、学習しなければならないという必然性を感じさせるように持って行きたい。そのため現在の話題、新聞記事から導入して行く。また生徒の具体的生活の中から糸口をつかんで行きたい。

とくに純粹経験などの概念は生徒に敬遠されるものである。

② 生徒の研究発表の形式が適当であると思う、ただし事前に教師が発表グループに対して可成り手を加えなければならない、資料の選定、発表の方法など助言が必要であることは勿論である。

ただ、倫社会学の歩ゆみが、日本の思想の十分な扱いに達せぬことが多い。

明治啓蒙思想の形成について

— 加藤弘之に見られる儒教を媒介にしての西洋政治思想の導入 —

都立桜町高等学校 佐藤 勲

<はじめに>

幕末になって西洋列強が日本に迫ってくると、支配層の間にだんだんと対外的危機感が高まり、一面では攘夷論が台頭し、他面では西洋の事情への関心が増大した。

この後者の流れにおいては、西洋諸国に対抗するためには、西洋文明を導入して富国強兵を実現する他に道がないという考えが展開されてくる。

この動向によって、日本の近代化は進められ、佐久間象山の「東洋道德・西洋芸術」のように、西洋文明への関心と評価は、もっぱら科学技術の側面に限られ、社会政治制度やそれを支える精神には向けられない。

対外的危機感の高まるアヘン戦争(1840~42)直後から、ペリー来航(1853)前後にいたる時期の西洋文明への関心は、ほぼ以上の状況であった。ペリー来航と和親条約の締結という新しい事態に入ると、対外的危機に対処するには、単に軍事力の増強だけでなく、社会政治制度を变革し、人心を結集することが必要であると考えられるようになってきた。

このようにして社会政治制度へと関心が向かうと、一面では、儒教のなかの民本主義ないし天下為公の観念が登場し、他面では、西洋の社会政治制度への関心が高まり、儒教の民本主義ないし天下為公の観念を媒介として、近代西洋の社会政治制度が理解され、評価されはじめる。

佐久間象山とともに、幕末における西洋文明導入の先駆者といわれる横井小楠は、こうした動向を切り拓いた思想家であった。

社会政治制度への関心が、西洋文明へと広がり、幕末においては、ほぼ軍事、科学技術、社会政治制度、倫理道德という順序で深化され、更に啓蒙思想家の場合にも、社会全体についての深化が見られる。

啓蒙思想家は、その思想活動の当初から、すでに西洋の社会政治制度についての強い関心と高い評価を抱いており、西洋の制度を導入することをはっきりと目ざしたのである。

<儒教の民本主義や天下為公の観念と西洋社会政治制度との比較>

加藤弘之は1861年に『隣草』を著わした。これは隣国である清朝の改事に託して、西洋の立憲政の導入をはっきりと主張しただけでなく、それをある程度まとまった形で紹介した日本最初の文献である点でも重要である。この本では、まず、西洋列強に対抗するには、単に軍備を充実し、士気を振興するだけではなく、「人和」つまり国内における人心の一致を確立することこそが根本であり、次いで「人和を得るは……唯当時の政体を改革して、一種の政体を立るを云うなり。此政体は実に仁義を旨とせる公明正大の政体にして、漢人の未だ曾て知らざる処なり」として、立憲政とくに議会制度を導入することが説かれている。

このような加藤の『隣草』は、国防の根本が軍事力ではなくて、人心の一致にあるという点ばかりでなく、儒教の民本主義ないし天下為公の観念を基礎として、近代西洋の社会政治制度を理解・評価している点でも、横井小楠の考えと共通している。

しかし、加藤や西の啓蒙主義者の思想と小楠との決定的なちがいは、彼らが政治の問題を制度の問題として捉えた点にある。

彼らにとっては、人民のためになる政治、公平無私の政治を行い、「安民」を実現することは、小楠の場合のように、為政者の心構えないし資質の問題ではなくて、客観的な制度の問題であった。

伝統的な政治体制について、加藤は「僕決して先王の政体を仁義を旨とせる公明正大なる政体にあらず、と云ふにはあらざれども、僕が考ふる処にては、先王の政体の立方にも、未だ至らざる所なきにしもあらずと思ふなり。但し、縦ひ其至らざる処ありども、先王の政治なれば、決して其弊

の生ずることなしと雖ども、後世暗君出るに至りては、其弊漸く生じて、自ら公明正大なる所を失ひ易し。故に後世を患るが為には、先王の政体の立方にも、未だ至らざる所ありと思ふなり」と批判している。

この婉曲な批判には、政治が公明正大であるか否かは、為政者の人間の問題ではなくて、客観的な制度の問題であるという考えが窺われる。

これには徂徠学を媒介にした政治における制度の意義の把握が見られ、発舜三代の政治のあり方と近代西洋のそれとの原理的な相違を認識すると同時に、後者が前者よりも秀れていることをはっきりと承認できたのは、加藤の制度への観点が明確であったからである。

近代西洋の社会政治体制の優秀さを評価した啓蒙思想家は、やがてその根底にまで遡って、個人の自由・権利の観念を認識するようになる。

加藤弘之の未完の草稿に「自主の権」と「君臣尊卑」という一対の草稿がある（『加藤弘之草稿』東京大学図書館蔵）

この草稿では加藤は、父子・夫婦・長幼・朋友という五倫のなかの四倫は、なお「天理自然」に基づくとし、この四倫と君臣の倫とをはっきり区別した上で君臣関係の「自然性」を否定し、「自主の権」のもとに、個人の根源的な平等を説いている。

君臣上下の身分秩序が自明なものとされていた幕末においては、近代的自由や権利の観念を導入する場合、まず個人の平等を主張することが不可欠の前提となるからである。

加藤は、五倫は天地自然の秩序（天理・天道）であるとする朱子学を批判して、人為であるとした徂徠の論理を通じて、五倫の一つである君臣の倫の絶対性を否定したのである。

さらに、儒教的な君臣の倫を否定するにあたって、儒教の天下為公の観念とともに、有徳者君主思想、ないし賢人政治の理想が重要な作用をなし

ているのである。

つまり、万民同権の共和政治が天理に真に協ったものと評価されている

が、その場合、賢人が選ばれて政治を行うということが、その重要な理由となっている。

明治初年には、共和政を理想の政体とする見方がある程度広まっていた。共和政が賢人による政治と評価した加藤は、人間の根源的な意味における平等を説きながらも、反面、賢愚明昧による人間の差別を当然としていたのである。

この考え方は、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という有名な言葉で始まる福沢の『学問のすすめ』（1872年）にまで尾を引いているのである。

身分や家柄に応じて、先例や慣習にしたがって生きるような因襲的態度が一般化していた当時の状況下では、そうした態度を打破し、人々がそれぞれ才能を伸ばして積極進取の生き方をするようにしていくことが、啓蒙思想家にとってはさしせまった課題であったが、共和政治の観念が賢人政治という儒教の伝統を基礎として受容されはじめたことにも一因がある。

「自主の権」「君臣尊卑」においてさらに加藤は、自由の観念が、伝統的な忠君とは対立する、新しい愛国（「国に忠する」）の観念と不可分の関係にあるとする。

つまり、封建的な君臣の別の観念の否定 — 個人の自由の観念の導入 — 近代的ナショナリズムの勃興が、相互に密接に関連している。

というのは、対外的危機の深刻な自覚は、人民の自発的能動性を呼び起し、国家を人民の自主的支持のうえに基礎づけることによって、国家の独立を守ろうとする態度を必然的に展開させるからであり、すでに『隣草』においても、権力を広く人民に賦与することが、逆に政治権力の強化をもたらすとしている。

「自主の権」「君臣尊卑」における自由の観念は、『隣草』にみられた権力の拡散の観念が展開し、「個人の自由」という概念にまで深化したとみられるのである。

東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校「倫理・社会」研究会といたします。
2. (目的) この会は会員相互によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行ないます。
 - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究
 - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
 - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. (事務局) この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
 - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
 - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
 - (1) 会長 (1名)
 - (2) 副会長 (若干名)
 - (3) 常任幹事 (若干名)
 - (4) 幹事 (若干名)
 - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会) 総会は毎年6月に会長が召集し、次のことを行ないます。
 - (1) 役員を選任
 - (2) 決算の承認、予算の議決

事務局組織内規

昭45.1.27

全倫研 共通
都倫研

1. 事務局は原則として会長校におく(都・全倫研とも規約改正の要あり)
2. 事務局組織は下記の通りである。

事務局長	原則として会長校に所属する
事務局顧問	歴代の事務局長があたる
事務局員	ア 事務局次長(1名) イ 研究部長・副部長(各1名) ウ 研究調査部(全倫研のみ6名) エ 広報係(全・都各1名) オ 会計(1名) カ 分科会世話人(都倫研のみ、分科会互選・分科会で2名) キ 大会役員(大会ごとに委嘱する)

3. 事務局分掌

事務局長	企画・運営・渉外などの会の実質的な事務にあたり会長を補佐する。
事務局顧問	同上の目的で事務局長を補佐し助言する。
事務局員	事務局員は各分掌にあって、会の運営を円滑にするため局長を補佐する。 ア 事務局次長 事務局長を補佐する。 イ 研究部 会の年間の研究方針をたて、研究活動全体を運営し紀要の刊行にあたる。分科会世話人は研究部に属し部長を補佐する。

ウ	調査研究部	調査活動の企画・実施・集計・分析等にあたる。
エ	広報係	会の記録、広報活動、会報、名簿の作成にあたる。
オ	会計	会の会計にあたる。ただし局長が代行することもできる。
カ	大会役員	事務局長 企画・運営の最高責任をもつ。 庶務・連絡 局長を補佐する 受付・会計 文書配布物、名簿の作成、会計にあたる
	司 会	総合司会、研究発表、研究討議、懇談会の司会
	議 長	総会議長
	記 録	会の広報部を中心に して組織、文書記録、 テープ、写真
	接 待	来賓その他の接待

4. 事務局任期

ア 事務局長は原則として2年とする。

イ その他の局員は1年であるが、再任、兼任をさまたげない。

5. 人 選

事務局長の人選は幹事会でみとめられた人事委員会があたる。

人事委員会の人選は、会長と事務局長が、原案をつくり幹事会にはかる。

また会長・局長・顧問は原則として委員会のメンバーに入ることとする。

ただし、事務局員の人選は会員の互選による。

(この内規は昭和45年度以降実施する)

昨秋、教育課程審議会は「教育課程の基準に関する基本方向について」いわゆる「中間まとめ」を発表した。諮問の趣旨が、著しい進学率の上昇によって大部分の青少年を教育する国民教育機関としての性格を強めている高等学校の教育内容を、そうした実情にふさわしいものにしていこうということが中心であるだけに、高等学校の教育課程の抜本的改善が図られようとしている。その中で「倫・社」は内容の改訂にとどまらず存廃という観点から論議されているときく。

たしかに「倫・社」は難かしい。教科書には専門家が数十年とりくんで、やっと大凡のところがあるというような思想家を、数十人ならべてあり、しかもそれを2単位で高校2年生が学習するというのである。とても学問的に取扱うなど教師にとっても生徒にとっても不可能である。われわれは^Wできるだけ専門書などで確かな基礎をふまえながら、生徒の能力や問題意識との関連に配慮しつつ、譬喩によって、或は図式化や視聴覚教材の活用によって、考え方の基本的なところを理解させていく。それは培養土かせいぜい小さな芽でしかない。それは円周は $2\pi r$ であるが、小学校低学年に“直径のおよそ3倍が円のまわりです”と教えるように。かれらは小数が理解できるようになって、直径 $\times 3.14$ を学び、更に文字による $2\pi r$ を学んでいく。

社会的適応とか道徳性向上のために「倫・社」に期待したのに、高校生の問題行動が逆に増大し蔓延している。「倫・社」無力という声がある。こうした問題状況があることは事実である。しかし、これは、学校教育ましてや一教科目の問題ではなく、今日のさまざまな社会状況から問題解決をはからねばならぬことであろう。だが、学業不振・将来(進学)への不安・友人関係など、学校不適應に陥ったり、多くの生徒が現実抱えている悩みに最も応えてきたのは「倫・社」である。大多数の青少年が高等学校に進学してくる。そして“高校での進路選択が一生の生活設計を決定しかねないほどの重みをもっている現実のなかで、かれらは自己の生き方を問わずに過すことはできない。”“かけがえのない人生をいかに生きるか。”と真剣に問い、これでいいのかと悩む。この時に、人間存在について深く自覚させ、人間尊重の精神を培い、自主的に人格育成に努めるよう、ともに考え、その手引きを果そうとしてきたのが「倫・社」である。その成果は、その場で形となってあらわれるものではない。長い人生の中で開花していくものである。

としごとに咲くや吉野の桜花 樹をわりて見よ花のありかを
いま、われわれは、「倫・社」の存続というより、高校教育の重要な問題に直面している。これまで以上の会員諸兄のご協力を乞い願う。

あ　と　が　き

年度当初に、研究部として主題と研究活動の方向を構想するとき、年ごとに研究の余地をうめていくように、充実していく会の歩みであるようにと願ったものである。多数が入学する今日の高校生のための「倫・社」授業のあり方は、もっと平易で明解な教材の扱い方なり教材内容なりを構想することが必要であると感じていた。

執筆要項が会員諸賢にとどけられ、いよいよ執筆にかかれるや、二三氏より「書きづらい」という感想がもらされたと聞く。しかし今日われわれが最もさしせまって問われていることが今年度の主題であり、紀要に発表することがらであり、それは各自の正直な表現となるだけに、よい意味での「書きづらい」なのだというコメントが一世話人から返ってきた。未曾有の国鉄長期ストによる生徒の自宅学習、年があけてからの流感の猛威で、授業のおくれをとりもどす必要に迫られたり、執筆の遅滞もあって原稿の集約は思うにまかせなかったが、次第に集まった原稿を拝見すると、各々方のくふうとまた新しい成果に学び得る所が多大であると思う。第2分科会では殊に意欲的に通算5回の会合に平均7、8名の出席者で、プラトン対話篇をギリシア語原典に確かめながらの読み合せと討論を重ねた。その模様はアンケートや座談会として集録されている。また研究体制や組織については、今後新進会員諸賢の建設的な意見を聞き、新しい発想にもとづいて改められてよいと思われる。むしろ洋の東西別や時代別から離れ、例えば広い領域における大きなテーマ別に分科会を組織するなど、新しい構想が出てよいと思う。

本年度の公開授業の特色としては、定時制授業の公開があり、実社会の身近な問題に結びつけた源流思想についての授業、また職業課程第3学年の「倫・社」授業など、教材内容の取り扱い方の上で学べる所があったようである。

「倫・社」は大きな曲り角にやってきた。われわれはこ^れそ^うって謙虚に反省もし、また会の発足以来研究と実践を深め、科目のねらいにそった成果をあげてきたものと、あえて自負してよいのではないか。また今後事務局、研究部の若がえりも必要であろう。本年度特別分科会は「将来の『倫理・社会』」を構想するため、先輩諸賢の御出席も要請して熱心な研究協議を重ねた結果、「倫・社」の基本的性格、高校教育における位置づけ、現代の高校生への対応等につき明確な実践的論拠をもって、必修科目として維持されるよう、教育課程審議会に向けて会長名をもって、2月10日付「要望書」を提出するまでに及んだ。この歩みは恐らく次年度も継続されるであろう。「倫・社」が直面する運命を明察し、これに雄々しく対処し、今後の研究と実践の進展を期することとしたい。

公開授業者、研究発表者、各分科会世話人諸賢の労に対し、厚く感謝申し上げます。

吉澤正晶 記

昭和50年度 都 倫 研 紀 要 14

発 行 昭和51年3月25日 [非売品]

著作者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会

代 表 中 村 義 之

印 刷 (有) 稲 谷 印 刷 所

東京都千代田区有楽町1-9-4

電 話 (03) 843-5678

事務局 東京都台東区元浅草1-6-22

東京都立白鷺高等学校内

電 話 (03) 843-5678

発行者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会

